

都市近郊における  
散策路事業の成立  
構造・計画思潮の  
変遷と縮退時代に  
おける活用可能性

日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C) 18K11844

岡村 祐

東京都立大学 都市環境学部 観光科学科

片桐 由希子

金沢工業大学 工学部 環境土木工学科



野猿峠コース：都立長池公園からの眺望

都市近郊における  
散策路事業の成立  
構造・計画思潮の  
変遷と縮退時代に  
おける活用可能性

岡村 祐

東京都立大学 都市環境学部 観光科学科

片桐 由希子

金沢工業大学 工学部 環境土木工学科

## 都市近郊における散策路事業の成立構造

### ・計画思潮の変遷と縮退時代における活用可能性

#### 1. 研究の視座

##### ■ 散策路事業の成立構造

近年のまち歩きやウォーキングブームのなかで、都市近郊の至る所で散策路の整備・設定や、まち歩きイベントの開催（以後、「散策路事業」と総称）が行われている。歴史的には戦前期にハイキングブームや旅客獲得を目的とした鉄道会社のもと、関東圏や近畿圏をはじめ大都市近郊において多くの散策路が整備された。時代は下り80年代から90年代には、地域環境の保全やまちづくりが重視されるなかで、自然・歴史資源を対象とした「散策路事業」が実施され、これはゆとりや癒やしを求めるライフスタイルにも応えるものであった。

このように、「散策路事業」は、健康、レクリエーション、モビリティ等の発地側の市民のライフスタイルのなかから生み出されるプッシュ要因と、郊外・行楽地開発、地域の自然・文化資源の保全活用、コミュニティ形成等の着地側が期待する環境形成に資するプル要因とのマッチングによって成立すると捉えることができる。これは、今後の「散策路事業」を展望する上でも確かな理論的バックグラウンドとなるのではないだろうか。

##### ■ 散策路事業における都市ストックの創出と継承

運動習慣の取り入れによる健康増進の手段やレクリエーション行為としてのウォーキング(歩行運動)のための環境整備やプログラムの提供は、とりわけ近年、医学や運動生理学の見地から科学的に歩行運動の健康への効果検証が進み、全国各地でその動きが加速している。一方、散策路事業は日常的な散策行動を促すものだけでなく、観光という非日常的な楽しみの中で、健康増進や健康回復を目指したへ

ルスツーリズムやウェルネスツーリズムのプログラムを提供するものに、その幅が広がっている。

九州地方や宮城県で展開される韓国チェジュ島の散策路事業を技術移転した「オルレ」、上山市などでのドイツの気候性地形療法を再現した「クアオルト健康ウォーキング」など、国境を超えて、共通のプログラムが展開する動きもみられる。これら散策路事業の基盤となるものは、快適で安全な歩行環境、地域の自然環境と文化資源、あるいはそのネットワークという、都市やその周辺地域における空間的なストックに他ならない。散策路事業と都市ストックとの関係性を理解することにより、地域資源や地域環境の保全・整備という点においても散策路事業の存在価値を示せるのではないだろうか。

##### ■ 都市縮退時代における都市近郊の持続可能性

都市縮退時代において、とくにニュータウンを含め都市近郊の住宅団地では、今後住み手を含めた関係人口の確保に取り組んでゆく必要がある。建築ストックや公共空間を更新するハード的な方法と合わせて、地域資源の魅力の発掘・発信といったソフト的な取り組みも重要である。新型コロナウイルスの流行を経て、「日常」を対象とした観光・レクリエーション需要や、健康志向の高まりを鑑みるに、「散策路事業」は、核となる歩行路や周辺環境の保全・整備というハード事業の側面と、都市近郊におけるライフスタイルの魅力発信や都市住民の誘客といったソフト事業の側面を併せ持ったものとして、持続的な地域形成手法として重要視されてくるのではないだろうか。

## 2. 研究目的と研究課題

以上の背景を踏まえて、本研究は散策路事業の計画技術を探求することを目的に、以下3点の研究課題を設定する。

第一に、特定地域における散策路事業、もしくは特定の散策路事業を対象に、事業の成立構造やその歴史の変遷を解明し、そのなかで都市の空間的ストックの創出・継承に対する知見を得る。具体的には、以下4つの事例を扱う。

- 1) 戦前期に東京鉄道局と東京市により東京圏で広く実施された散策路事業「市民健康路」
- 2) 戦前期から現代まで各時代に東京都（東京市）により実施されてきた各散策路事業
- 3) 戦前期に整備され、戦後期に人気を博した多摩丘陵における「野猿峠越えコース」
- 4) 戦前期に整備され、その後も地域の緑地環境の保全・開発に影響を与えてきた飯能市天覧山周辺の散策路

※1) は、科研費基盤研究C「都市近郊における散策路事業の成立構造・計画思潮の変遷と縮退時代における活用可能性」採択以前の研究成果

第二に、散策路事業の計画技術の特徴や都市及びその近郊におけるストックの創出・継承に与える影響を横断的、俯瞰的に把握するために、複数事例の比較研究を行う。具体的には、以下2つの課題に取り組む。

- 1) 先進事例として、山形県上市市（クアオルト健康ウォーキング）、熊本県美里町（フットパス）、九州地域（オルレ）の散策路事業を取り上げ、各事業のキーパーソンを招聘したミニフォーラムを開催し、公開議論を実施（2023年度日本

造園学会全国大会）

- 2) 我が国における散策路事業の計画技術の到達点を明確にするという視点で、海外事例との関係性も含め、「クアオルト健康ウォーキング」「フットパス」「オルレ」における散策路事業計画技術の比較研究

第三に、都市近郊における散策路事業が都市及びその近郊における空間的ストックの創出・継承にどのように貢献できるのか、実践的研究に取り組む。

- 1) 多摩ニュータウン南大沢（東京都八王子市）における豊かな空間的ストックを生かした「南大沢ドッグフレンドリータウン構想」
- 2) 流域全体としての地域ビジョンの構想を目指した神奈川県茅ヶ崎市「小出川フットパス」
- 3) 多摩都市モノレール八王子ルート（モノはちルート）構想の普及を目的とした「歩いて発見モノはちルートウォーキング」

## 3. 研究成果

### ■ 論文／口頭発表

- ・片桐由希子・岡村祐（2017）：東京市・東京鉄道局による「市民健康路」事業の展開，ランドスケープ研究，80-5，pp.493-497
- ・岡村祐・片桐由希子（2019）：散策路事業における都市ストックの創出と継承の視点（特集：健康な都市に向けたランドスケープデザイン），ランドスケープ研究，83(3)，pp.288-291
- ・Okamura Y. and Katagiri Y.(2019): Why and How have Walking-Trail Booms Occurred —On

---

the Yaen Mountain Pass Route in the Tama Hills, Tokyo—: 4th International Conference on “CHANGING CITIES: Spatial, Design, Landscape & Socio-economic Dimensions” , Chania, Crete Island, Greece, 24-29 June 2019

- ・片桐由希子・岡村祐（2020）：ニュータウンにおける商業施設を起点とした「暮らし体験型散策路」の提案 —犬連れの来訪客を中心として，造園学会2020年度全国大会ポスター発表，オンライン，2020年5月
- ・岡村祐・片桐由希子（2022）：埼玉県飯能市天覧山周辺の散策路と周辺地域の整備・開発・保全に関する一考察，ランドスケープ研究，85（5），pp.619-624
- ・岡村祐・片桐由希子（2023）：海外規範事例と国内展開組織の関係性からみた散策路事業の計画技術移転の特徴，ランドスケープ研究（オンライン論文集），16，pp.133-140

#### ■ 刊行物（マップ等）

- ・暮らし体験型散策路の計画提案「南大沢でワンちゃんとピクニックしよう！」：首都大学東京観光科学教室「暮らし体験型散策路」プロジェクトチーム（制作・発行），2020年3月
- ・冊子「小出川フットパス」：アーバンデザインセンター・茅ヶ崎（発行）・小出川に親しむ会・東京都立大学観光科学科岡村研究室（協力），2022年3月
- ・歩いて発見 モノはちルートウォーキング：多摩都市モノレール八王子ルート整備促進協議会（発行）・東京都立大学観光科学科岡村研究室（制作），2023年11月

## 4. 本報告書の構成

本報告書は，上記の研究成果を，1. 論文，2. 討論，3. 実践の3部に構成し直したものである。2. 議論に関しては，2023年度日本造園学会全国大会時（南九州大学）に主催したミニフォーラムの記録を整理したものとなっている。

## 5. まとめ

本研究の成果として，散策路事業が，都市及びその近郊における優良な空間的ストックの創出・継承に資するための要点として，以下3点を提示する。

### ■ シーンを作り出すルート

ルートを設定する際は，散策路のテーマやストーリーに即した資源間のネットワークに十分に考慮すべきだが，単に点を繋ぐためだけに線を引くのではなく，ルート上の各区分・各地点でどのような空間体験が可能なのか，空間と歩き方をセットで考え，目的に沿った魅力的かつ効果的なシーンを創り出すという発想が重要である。また，散策路とその周辺の地域資源との連携は，散策のシーンを豊かにするものである。その独自の魅力づくりのためには，地域側の主体的な関わりは欠かせない。

事例研究で取り上げた「野猿峠越えコース」では，地元野鳥料理店や鉄道会社が関わりながら，丘陵地の豊かな環境を生かした施設（動物園，都市公園，アミューズメントパーク等）も含めて，多様なアクティビティが提供されてきた。また，上市市「クアオルト健康ウォーキング」では，ドイツの「気候性地形療法」を取り入れたルートとして，歩行だけで

---

なく、地形や植生や景観など空間に即した各種のプログラムが導入されることで、魅力的な散策のシーンが生まれている。

### ■ 導入と持続のための情報発信・伝達の仕組みづくり

散策路を維持管理し、継承してゆくには、都市住民や地域の人々のなかで、散策行為が習慣化されなければならない。そのためには、人々に散策路の存在やその魅力、また散策の効果を伝え、散策を始める（導入する）ためのきっかけづくりや、続けるためのしかけが必要である。これに対応するのが、ウェブサイトや拠点施設、あるいはイベント開催を通じた情報と体験の提供である。

個人としての継続性を維持するための情報として、距離、歩数、消費カロリー、METS値などを示すことで、達成感や効果を可視化することが一般的になっている。東京都が近年健康増進目的で取り組んでいる「トーキョーウォーキングマップ」では、区市町村の既存の散策路事業の捉え直しと連携により、都内各所で「健康ウォーキング」が楽しむための一元的な情報提供を行うものである。また、上山市では、「クアオルトウォーキング3万人プロジェクト」のもとで、住民や観光客が気軽に参加できる多様なプログラムの提供が行われている。

### ■ 地域として豊かになるためのビジョンとプログラム

散策路事業では、散策路の整備そのものが目的ではなく、地域の健康増進や地域振興など、地域としての豊かな生活のビジョンと結びつくこと重要であり、そのビジョンの共有とプログラムとして具体化が事業の持続的な展開につながると考えられる。

上山市の「温泉クアオルト構想」は、健康保養地としての市民の健康増進と交流人口の拡大を目指したまちづくりの指針となっており、ウォーキングによる健康づくりから、地域医療、観光や農業など地域産業、教育、自然環境の保全などの分野への展開を構想している。観光としての散策を促進するためには、温浴、食事、買い物、宿泊といった他のアクティビティとの組み合わせにより満足度を高めるためのプログラムが必要である。上山市では、温泉旅館の宿泊者に「早朝ウォーキング」が紹介されており、温泉地滞在の健康効果を高めるだけでなく、地元との交流の機会ともなっている。

このように、散策路事業と地域の資源や産業との組み合わせが、地域の発展に寄与するといったストーリーも描ける一方で、東京都における散策路事業の変遷と「野猿峠越えコース」の事例が示唆するように、事業としての散策路は、社会的背景や政策的な位置づけに大きく影響を受けるものである。したがって、「歩き方」だけを追い求めるのではなく、多様な「歩き方」を包摂する空間としての散策路が存在することが重要となる。多様な「歩き方」を包摂する空間とは、冒頭に挙げた地域の自然環境と文化資源、快適で安全な歩行環境によるネットワークという空間・環境的なストックによるものである。

現在の散策路事業は、これを利用するという側面では多様なノウハウが蓄積されているが、地域としてのストックの維持や創出に結びつきにくい状況も見える。散策路を含む地域が、散策路を維持管理し、継承するに足る価値を見出している必要があり、イギリスのフットパスが「生活の知恵や自由への思想によって構築されてきたもの」と評されるように、生活のなかに文化として歩くことを根付かせていくことが重要であると考えられる。

# 都市近郊における散策路事業の成立 構造・計画思潮の変遷と縮退時代に おける活用可能性

## 1 論文

- 東京市・東京鉄道局による「市民健康路」事業の展開 02  
初出：片桐由希子・岡村祐 日本造園学会，ランドスケープ研究，80(5)，pp.493-497，2017年
- 東京の散策路事業における都市ストックの創出と継承の視点 18  
初出：岡村祐・片桐由希子 日本造園学会 ランドスケープ研究，83(3)，pp.288-291，2019年 / 片桐由希子 首都大学  
東京観光科学，PBL 運営委員会 観光を科学するPBL：東京都区部における新しい観光の提案，pp.33-36，2015年
- 埼玉県飯能市天覧山周辺の散策路と周辺地域の整備・開発・保全に関する一考察 26  
初出：岡村祐・片桐由希子 日本造園学会，ランドスケープ研究，85(5)，pp.619-624，2022年
- 鎌倉景園地の散策路と緑地保全 40  
初出：片桐由希子 エッジシティの豊かな自然からまちの魅力を再考する，都市パラダイム研究会：大都市郊外戸建住宅地を  
住み続ける 横浜湘南エリア・エッジシティのケーススタディ報告，pp.33-36
- 海外規範事例と国内展開組織の関係性からみた散策路事業の計画技術移転の特徴 42  
初出：岡村祐・片桐由希子 日本造園学会，ランドスケープ研究(オンライン論文集)，16，pp.133-140，2023年



# INDEX

## 2 討論

- 都市近郊における散策路事業の展開とストックの創出と継承 59  
2023年度 造園学会ミニフォーラム 宮崎南九州大学 2023年6月18日

## 3 実践

- 暮らし体験型散策路の計画・提案 88  
2019年 三井不動産商業マネジメント株式会社  
首都大学東京観光科学研究教室「暮らし体験型散策路」プロジェクトチームとの共同研究
- 冊子「小出川フットパス」 98  
2019-2022年 アーバンデザインセンター・茅ヶ崎および東京都立大学岡村研究室の協働
- 歩いて発見 モノはちルートウォーキング 108  
2022年 多摩都市モノレール八王子ルート整備促進協議会事務局および八王子市都市計画部交通企画課から

# 1 論文

## 東京市・東京鉄道局による「市民健康路」事業の展開

初出：片桐由希子・岡村祐 日本造園学会, ランドスケープ研究, 80(5), pp.493-497, 2017年

## 東京の散策路事業における都市ストックの創出と継承の視点

初出：岡村祐・片桐由希子 日本造園学会 ランドスケープ研究, 83(3), pp.288-291, 2019年 / 片桐由希子 首都大学  
東京観光科学, PBL 運営委員会 観光を科学するPBL: 東京都区部における新しい観光の提案, pp.33-36, 2015年

## 埼玉県飯能市天覧山周辺の散策路と周辺地域の整備・開発・保全に関する一考察

初出：岡村祐・片桐由希子 日本造園学会, ランドスケープ研究, 85(5), pp.619-624, 2022年

## 鎌倉景園地の散策路と緑地保全

初出：片桐由希子 エッジシティの豊かな自然からまちの魅力を再考する, 都市パラダイム研究会: 大都市郊外戸建住宅地を  
住み続ける 横浜湘南エリア・エッジシティのケーススタディ報告, pp.33-36

## 海外規範事例と国内展開組織の関係性からみた散策路事業の計画技術移転の特徴

初出：岡村祐・片桐由希子 日本造園学会, ランドスケープ研究(オンライン論文集), 16, pp.133-140, 2023年

# 東京市・東京 鉄道局による 「市民健康路」 事業の展開

A Study on Development of the Hiking Trails for Citizens  
by Tokyo City and Tokyo Railway Bureau

片桐由希子・岡村祐（2017）東京市・東京鉄道局による「市民健康路」事業の展開，ランドスケープ研究，80-5，pp.493-497  
上記論文に図版を追加

## 1. はじめに

1932年から1939年にかけて、東京市民の慰楽適地選定の範囲として、山手線主要駅及び郊外電車の始発駅を起点に鉄道賃金と運輸時間を考慮し、東京駅を中心とした50km圏域、片道が1時間、1円で到達できる範囲を標準として設定した広域緑地計画、東京緑地計画が策定された。この緑地計画の策定時期を挟む大正末から戦中期にかけて、日本では都市住民の余暇活動としてハイキングが流行している<sup>1)</sup>。1932年には雑誌「ハイキング」が創刊され、新聞や雑誌、専門の書籍により、都市近郊の田園や低山など身近な緑地を対象としたハイキングコース、服装や歩き方、持ち物などが紹介された<sup>2)</sup>。

このような時代を背景に、東京鉄道局と東京市は「市民健康路」の事業に着手している。昭和13(1938)年に発行されたパンフレット「市民の健康路 - 東京中心のハイキング」の巻頭言では、「厚生省が『先づ歩け』の標語を掲げて推進する、銃後の心身の鍛錬し、国土を認識するという国策に沿うための施策

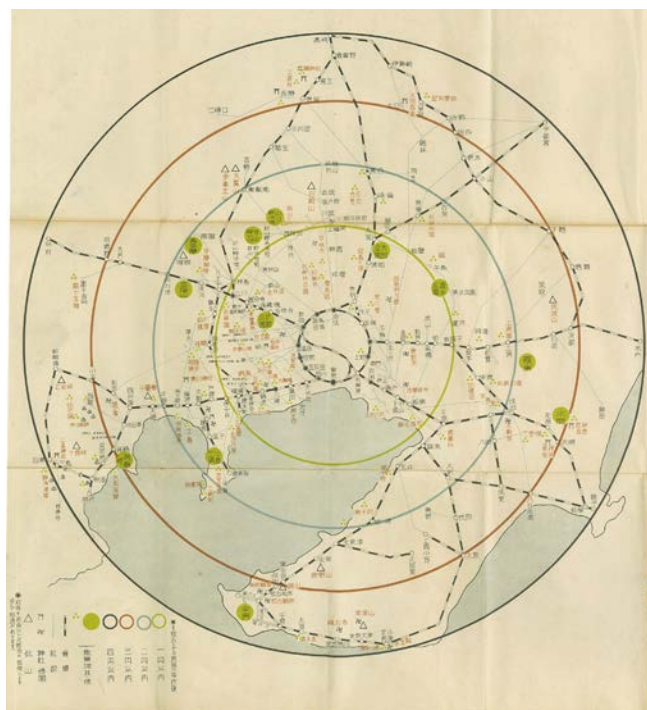
として、武蔵野を背景に、足代を往復1円以下のコースを選定した」とあり、東京市は、「観光課の事業として、心身鍛錬に加え、余暇善用に資する目的を以って調査し、関係各方面と調整した」としている<sup>3)</sup>。

戦前の緑地計画に係る思想や計画技術については、風致地区の運営<sup>4)</sup>や景園地、行楽道路の計画経緯や整備の実態など<sup>5) 6)</sup>、都市計画、造園分野の研究が多数あり、民間鉄道会社による観光地開発に関する研究も数多いが<sup>7)</sup>、風致地区や東京緑地計画の決定事項に対し、都市住民を誘致し、観光・レクリエーションの場として振興する方策として市民健康路に着目したものはみられない。

本研究ではこれまで学術的な研究がなされていない「市民健康路」について、背景にある鉄道省と厚生省の政策とその関連機関の取り組みと事業の展開、各コースにおける緑地の利用状況を明らかにし、戦前における東京を中心とした野外のレクリエーション活動の振興の方策としての意義を考察することを目的とする。



図-1 東京鉄道局 ピクニックコースと東京を起点とする鉄道の3等往復の料金が記載されている



## 2. 研究の手法

本研究では市民健康路に関する刊行物の他、1930年代に発行された地図、パンフレット、ガイドブック、関連する主要雑誌、行政資料を通読し、1)市民健康路の概要、2)関係機関の政策的背景と事業の展開、3)コースと構成の変化を把握した上で、東京緑地計画で決定された緑地や東京府観光協会によって提示された観光ルートの整備の考え方との対応について考察する。

### (1) 「市民健康路」関係機関の施策・事業の整理

市民健康路の事業の主な関係機関として、前述した1938年のパンフレットで挙げられた鉄道省と厚生省を対象とし、関連する政策、事業を整理する。調査にあたっては、東京鉄道局、各民間鉄道会社、東京市市民局 体力課・観光課など、各機関の関係する官民の主体も対象とし、表-1に示す年報やその他行政資料を資料として用いる。

### (2) 「市民健康路」のコースと構成の変化の整理

表-1に示す東京市と東京鉄道局が発行したパン

フレット及び東京市の刊行物から、市民健康路の各コースについて、利用交通機関や距離、緑地計画との対応としてコース内に含まれる景園地と風致地区、自然公園等の地域制の緑地を確認し、整理する。その上で、それぞれの時期のコースの構成と変化を把握する。

調査対象とした市民健康路は、1938年秋と1939年初夏、1940年初夏、同年秋、1941年初夏、1942年の全部で6時期である。

## 3. 「市民健康路」の概要

収集したパンフレット及び東京の刊行物から、「市民の健康路」は、東京を中心とした徒歩旅行を推進することを目的として、1938（昭和13）年秋から1939（昭和14）年までは鉄道省と東京市、1940～1942（昭和15～17）年は東京市が実施したものであり、主な事業内容として、鉄道駅を起点・終点としたハイキングコースを選定し、初夏（5・6月）と秋（10・11月）の行楽シーズンの割引切符の発売が行われていた。

「市民健康路」のパンフレットは、各コースについて、行程と概略図、料金と販売場所、五万分の1

表-1 本研究で使用した資料

発行元	資料名
鉄道省・東京鉄道局	鉄道省年報(S6～11)
厚生省(体力局)	歩け・走れ(S13)
東京市	東京市報、東京市政年報 総務篇(S14,15) 保健篇(S12,13,14) 厚生篇(二)(S16)
東京府	東京府観光保勝委員会 議事速記録 第1号(東京府土木部)
東京府観光協会	観光の東京府(S12,13,14)、観光地開発に関する座談会(南多摩・北多摩・西多摩)
学術誌・雑誌	公園緑地(公園緑地協会)、旅(日本旅行協会)、ハイキング(ハイキング社)、旅と伝説(三元社)
市民健康路に関するパンフレット	歩け市民の健康路ー東京市中心のハイキング(S13)、市民健康路二十九コースー東京市中心のハイキング(S14)、市民健康路ー東京市選定54コース(S15)、東京市選定ー市民健康路60コース(S16)、市民健康路ー東京市選定(S17)、市民ハイキング第一號家族向(横浜市土地観光課・横浜観光協会 S18)、市民ハイキング案内(横浜産業部商工課 S40)、京王沿線ハイキング(京王電気軌道S18)、市民の健康路(京急湘南電車 S 19)
市民健康路が掲載された書籍	東京中心徒歩コース七百種(厚生省体力局・奨健会編、S14)、大東京と郊外の行楽:附・日帰りハイキング案内(水島芳静 萩原星文館 S15)、東京近郊撮影地ガイド(冬木健之介 玄光社、S16)、東京近郊ハイキング・コース(萬華通信社、S17) 図説東京附近健民鍛練コース(野村盧江 アトラス社、S18)

の地図の該当の図郭が記載され、小冊子版はコースに関する解説文が記載されたガイドブックとなっている。1940年以降のパンフレットには、冒頭に「ハイキングの準備」として、服装や持ち物、体力に応じたコース選択の考え方とあわせて、身体とともに精神の鍛錬を目的とするものとして、物見遊山の気分を諫める文章が挿入され、時下に対する配慮とゴミを散らさないなどのマナーをまとめたハイカー自粛自戒十則が掲載されるようになっていく。東京市設案内所が最後に選定した市民健康路は、1942年7月に「夏に鍛へよ」として発表された新コースであ

ると思われるが<sup>8)</sup>、ここでは割引料金に関して記載されるところはない。

民営の鉄道会社としては、1938年時点では、東京横浜電鉄、玉川電気鉄道、京王電気軌道、帝都電鉄、小田原急行鉄道、京浜電気鉄道、横浜・湘南電鉄、東武鉄道、武蔵野鉄道、多摩湖鉄道、西武鉄道、五日市鉄道、南武鉄道、神中鉄道、1940年からは王子電気軌道、城東電気軌道、青梅電気鉄道、総武鉄道が加わっている。

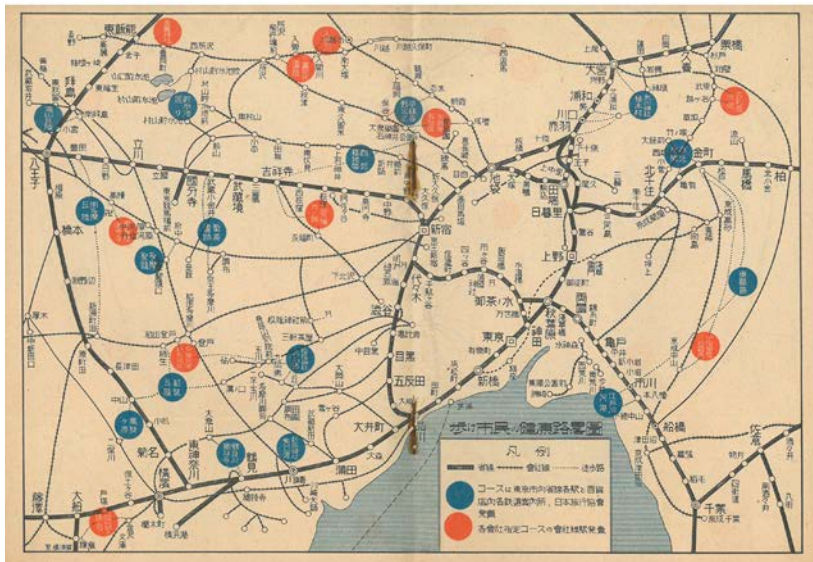


図-2「市民の健康路 - 東京中心のハイキング」に掲載されたコースと割引切符の販売場所



図-3「市民の健康路 - 東京中心のハイキング」の各コースの解説

#### 4. 市民健康路の背景と関連事業の展開

次に市民健康路の背景として、1934年からの鉄道省・東京鉄道局の旅客事業、1938年からの厚生省の政策と東京市の健康増強に関する事業の展開を整理する。

##### (1) 鉄道省・東京鉄道局による旅行の保健化とハイキング普及

1934年6月の雑誌「旅」では、「国民保健の旗幟を高く掲げて」と題し、鉄道省及び東京鉄道局の新しい旅客事業の方針が紹介されている<sup>9)</sup>。従来の「旅行趣味、鉄道常識の普及並びに、名所地及び地方の特殊風俗、行事などの紹介」<sup>10)</sup>という旅客誘致から、内務省や文部省が扱ってきた国民保健に共同戦線を張り、「旅行の保健化を一般に普及すること」を目標とするものとして、「求めよ健康！緑は招く！」など季節ごとの標語の利用、新聞社等と共同で夏季休暇における学生、児童の海・山への動員などにより、保健旅行を普及すること、景勝自然地への宿泊所などの簡易な施設整備により、地方の隠れた景勝地を開発するといった構想が示された。

2割5分のハイキング割引は、1934年から開始されている<sup>11)</sup>。鉄道省が当時実施していた季節割引の乗車券は、新緑、登山、川下り、舟遊び、海水浴、観楓、茸狩り、スキー、スケート、観梅、神社仏閣詣、鉄道省主催のキャンピング等があるが、これらの割引率は2割であり、ハイキングよりも割引率が低い設定となっている。大都市市民のための短距離のハイキング割引として市民健康路に対する特別料金が設置された1938年9月には、国策に沿った青年旅行や社寺詣や国立公園への旅行は奨励する方針が発表されているが、一方で戦時下にあることを考慮し、観桜や潮干狩り等の特別割引列車が廃止されている<sup>12)</sup>。1940年には、旅行の新体制として、国策輸送を優先し国鉄の遊覧的な団体旅行の利用を制限する方針が示され<sup>13)</sup>、1941年7月にはその禁止に踏み切られた。

広報活動としては、行楽シーズンに向けて、新聞各社や関連雑誌にハイキングコースと割引切符の販売が掲載されていたほか、ハイキングの標語や、「ハイキつつ口吟むに適當なる歌」などの懸賞付の公募や<sup>14)</sup>、東京日日新聞が郊外鉄道各社との協力の下開催した1935年の郊外健康地早廻り競争、1936年の東京日日新聞と鉄道省の主催による国立公園早廻り競争など、観光地と鉄道利用の宣伝を兼ねたイベントが実施されている。

##### (2) 厚生省による徒歩運動の奨励と東京市での展開と浸透

厚生省体力課は、1938年に内務省から衛生局と社会局を分離する形で設置された部局である。1938年秋の市民健康路のパフレット冒頭で触れられた厚生省の保健増進の国策に該当するものが、この体力課による「徒歩」運動の奨励である。

1938年に、厚生省体力課・国民精神総動員中央連盟が発刊した「歩け」<sup>15)</sup>では、徒歩運動を実行容易な運動としてその効能や手法をまとめている。徒歩運動の中でも特に「団樂の楽しさの中に保健の

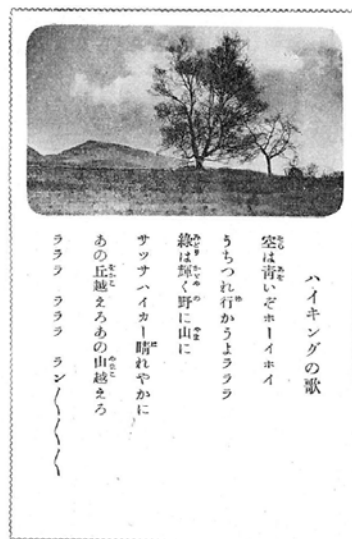


図-4 ハイキングの歌は、コロムビアレコードから発売された。(作詞：西口春雄 作曲：江口夜詩 歌：青山薫)

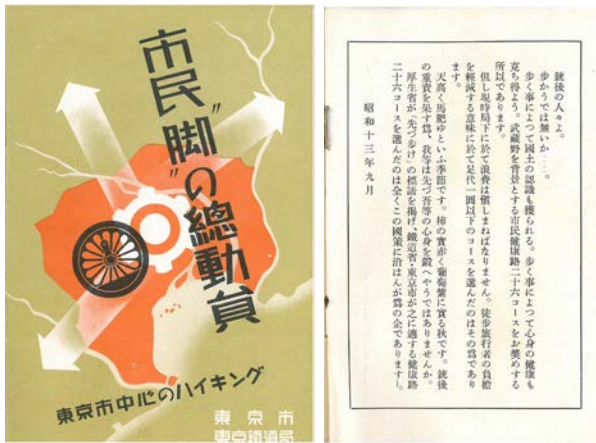


図-5 歩け市民の健康路 東京市中心的ハイキング (A)



図-6 市民健康路 東京市選定五十四コース (C)

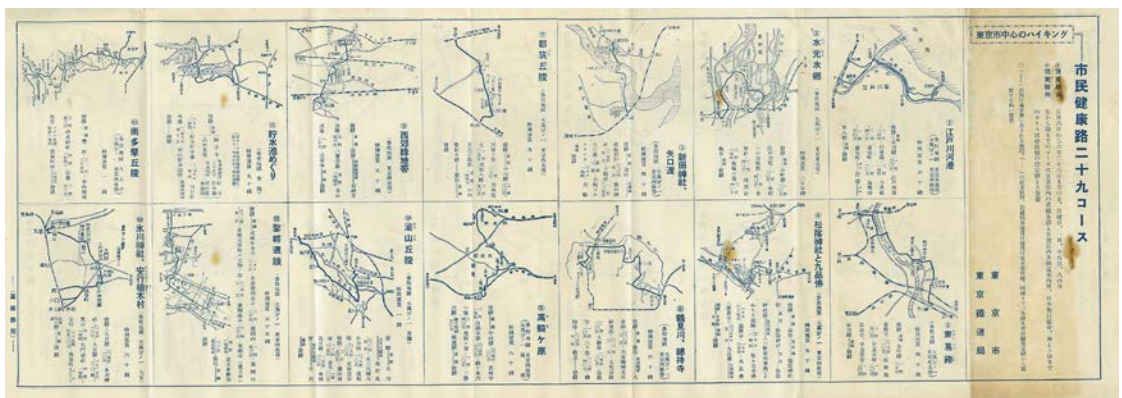


図-7 市民健康路二十九コース - 東京市中心的ハイキング (B)



図-8 市民ハイキング第一輯家族向 (横浜市土地観光課・横浜観光協会)



図-9 甲府からのハイキング (甲府観光協会)



図-10 東京市推薦市民健康路六十コース (D)



増進を図る」ものとして、鍛錬を目的とした山野跋涉、登山、テント旅行、舟遊び、釣りなどの野外徒歩、伝統的な徒歩旅行として神社仏閣への徒歩参詣が紹介されている。また、「共同体の一員としての責務を遂行する精神を養い、質実剛健にして不撓不屈の精神を涵養する」ものとして奨励されているのが、青年団や婦人会などによる強行軍である。同書は、さらに日本には安全に気持ちよく歩ける環境がないとし、欧米の逍遥道路を例に挙げて、歩道や道路の整理、街路樹の植樹や緑化等の施設整備が「歩行を国民に奨励する先に解決を要する問題」であることを指摘している。

一方、東京市では、翌1939年にそれまで教育局体育科、保健局公園課、記念事業部などの部局でそれぞれ行ってきた健康増強の事業を「時局下人的資源培養の重要性」から一元的に遂行するものとして、新設された市民局の下に、公園、観光課と並んで体力課が設置され<sup>16)</sup> 徒歩運動による体力増強事業として厚生ハイキングや健歩会、歩行鍛錬会などが実施された。月例厚生ハイキングは、1939年から各季節に適した行路を選んで第1日曜日に実施されたもので、1940年度には「健歩会」に名称を変え、1941年度までに30回実施された<sup>17)</sup>。コースは主に近郊に設定され<sup>18)</sup>、「参加者の職業は各層に亘り年齢も5才より70才に及び和気藹々たり大家族健歩である」と報告される。また1941年は区の主催による健歩会が175回52,500人、山の健歩会が5回1,113人、青少年歩行鍛錬会が88回21,715人など、種々の健歩会が催されている。

健歩の普及・啓発と奨励に関しては、ポスターやリーフレットによる広報活動に加え<sup>19)</sup>、1941年度には、体力課の職員とともに各界の専門家を相談員とした健歩相談所が春、夏、秋に銀座で開設された。この相談所で取扱われた人員は6,047人、「会社、工場、その他諸団体の登山健歩企画者が多数存した」とあり、厚生省が推奨した、共同体の団結力向上の手段として徒歩旅行を用いるという考え方が、短期間で浸透していったことが伺える<sup>20)</sup>。

## 5. 市民健康路のコースの変遷

次に市民健康路のコースの変遷について整理する。パンフレットに掲載されたコースは、1938年秋版が26コース(A)、1939年初夏版が29コース(B)、1940年初夏版が54コース(C)、同年秋版が60コース(D)、1941年初夏版が66コース(E)、1942年に追加されたのが9コース(F)であり、それぞれの重複分を整理すると全103コースとなった<sup>21)</sup>。表-2は、各コース距離と利用路線、徒歩行程の始点・終点となる駅、景園地や風致地区、国立公園などの地域制の緑地との対応、1936年に東京鉄道局が実施した懸賞応募に当選したハイキングコース(G)との対応を整理したものであり、図-11は東京50km圏でこれを図示したものである。

### (1) コースの構成

まずは表-2に基づいて、コースの構成を概観する。図-12はコースの歩行距離から市民健康路の構成を見たものである<sup>22)</sup>。5-10km、10-15kmはほぼ同量で推移しているが、15km以上については1939年秋に3件、39年初夏に4件と全体に僅かであったが、1940年以降は5-10km、10-15kmと15km以上のコースがほぼ同量であり、後半になるに従い、中長距離のコースが増加していることが分かる。

図-13は、表-2に示した各時期の市民健康路についてコースと都市・緑地計画計画との対応を示したものである。全コースの約半数が景園地を含んでおり、特に高尾、飯能、大山、鎌倉などが位置する40-60km圏内の景園地が一番多く、常に増加していることがわかる。一方、風致地区は開始時から大きな変化はみられない。

表-3は、市民健康路のコースにおける路線と駅の利用の状況について整理したものである。往路と復路とで異なる駅を利用するよう設定されているものが、利用駅の選択肢があるものも含め、全体の7割以上を占める。1938-39年は、異なる鉄道会社間の乗継では省線各駅から私鉄始発駅までの移動、往

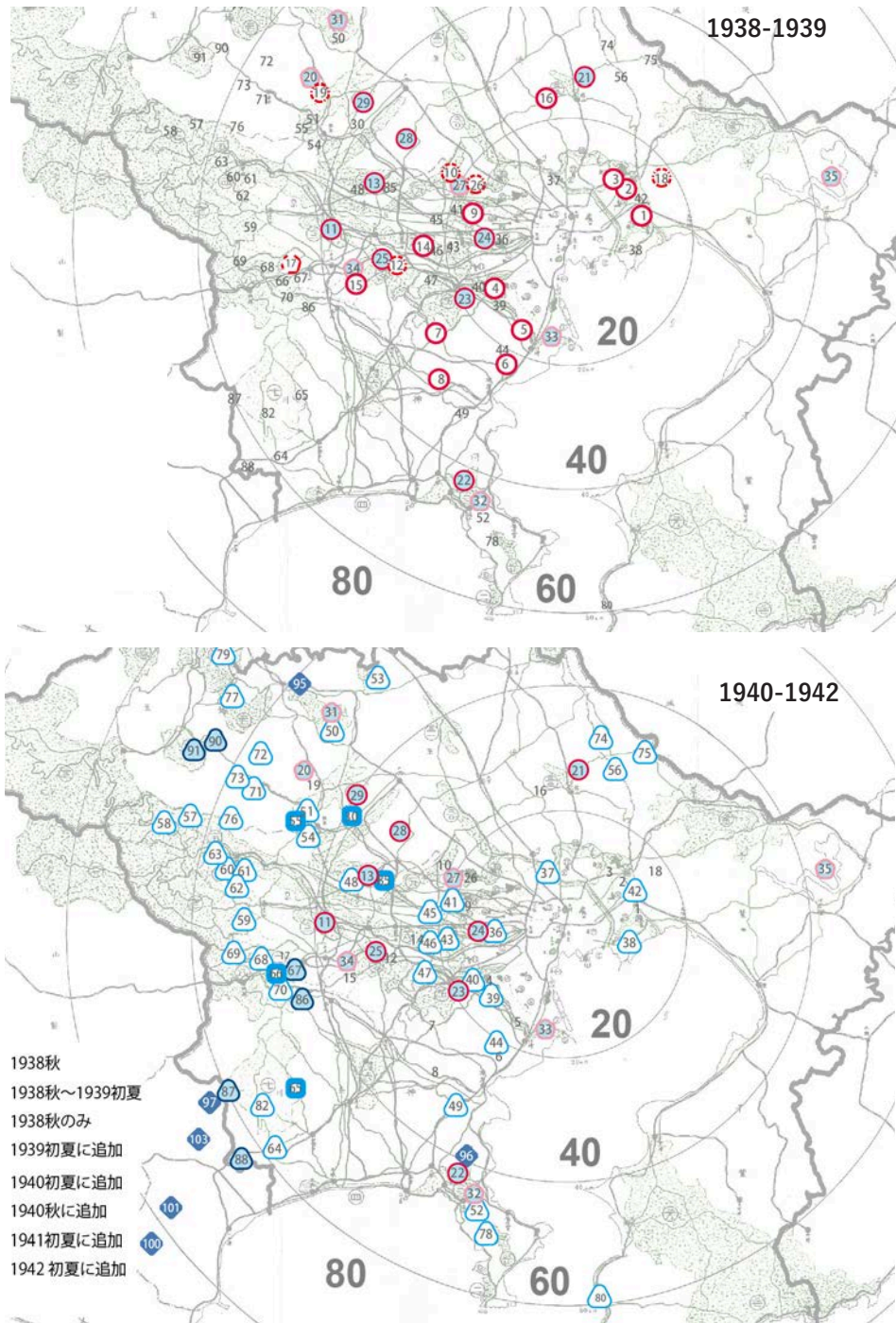


図-11 市民健康路各コースと東京緑地計画との対応（東京緑地計画協議会「東京緑地計画図」に追記し作成）  
 囲み数字は表2のIDと対応する。コースおよそ中央部に配置している。83,84,89,92,93,94,98,99,102は表示範囲外。

表-2 1938年から1942年に選定された東京市・東京鉄道局の市民健康路のコースの利用交通機関と東京緑地計画との対応

ID	コース名	距離(km)	利用駅 ※1	利用路線 ※2	緑地計画	市民健康路パンフレット ※3								
						A	B	C	D	E	F	G		
1	江戸川河港	10	市川、本八幡	省線		1	1							
2	東葛飾	3.5	金町、市川	省線	江戸川風致	2	2							
3	水元水郷	12	金町、亀有	省線	江戸川風致 水元(大公園)	3	3						○	
4	松陰神社と九品仏	5.2	渋谷、大井町	省線-玉川電車、目蒲線	多摩川風致	4	4							
5	新田神社・矢口渡	4.8	武蔵新田、川崎	目蒲線、省線	多摩川風致	5	5							
6	鶴見川総持寺	9.7	大倉山、鶴見	東横電車、省線	総持寺風致	6	6							
7	都筑丘陵	12	中山、柿生・溝の口	省線、小田急、南武電車		7	7						○	
8	七騎が原	7	中山、二俣川	省線、神中鉄道	鶴ヶ峰風致	8	8						○	
9	西郊緑地帯	9	石神井公園、吉祥寺	武蔵野電車、省線	石神井・善福寺風致	9	9							
10	野火止平林寺	8	保谷、志木	省線-武蔵野電車、東武東上線	武蔵野景園地	10								
11	瀧山丘陵	9.2	南拝島、東秋留野	省線 一五日市鉄道	瀧山景園地	11	10	28	26				○	
12	多摩聖蹟	4.6	府中、中河原・多摩聖蹟	省線-京王電車、南武電車	南多摩景園地	12								
13	貯水池めぐり	9	村山貯水池、村山貯水池際	省線-多摩湖鉄道、西武電車、武蔵野電車	狭山景園地	13	11	24	25					
14	聖蹟遺蹟	10.7	武蔵小金井、京王多摩川	省線-京王電車	南武蔵野景園地	14	12							
15	南多摩丘陵	13	豊田、新原町田	省線小田急	南多摩景園地	15	13						○	
16	氷川神社と安行植木村	9	大宮、赤羽・川口・蕨	省線	大宮公園風致	16	14							
17	武相国境	6.6	橋本、浅川	省線-藤沢バス	高尾景園地	15								
18	八柱霊園と中山法華寺	10.5	金町、京成中山	京成電車 -京成バス	法華経寺風致	17								
19	高麗神社	21.9	豊岡町、高麗	武蔵野電車	霞が関景園地	18								
20	高麗神社・物見山(D以降山根野水池)	14.2	高麗、東毛呂	武蔵野電車、 越生鉄道 東武東上線	霞が関景園地	23	35	41	41					
21	古利根水郷	14	越谷駅、武里駅	東武電車		19	16	22	23	22				
22	六国峠越え鎌倉	15.5	金沢文庫、湘南逗子	京浜・湘南電車	鎌倉景園地	20	22	25	26	24				
23	多摩河原と枳形城址	9.8	身延山別院、稲田倉戸	玉川電車、小田急電車	多摩川風致	21	21	7	7	7				
24	大宮八幡・井の頭	10.5	永福町、井の頭公園	帝都電鉄	和田堀風致	22	20	3	2	2				
25	南多摩御聖蹟廻り(A:南多摩蓮光寺)	11.1	中河原、高幡	京王電車	南多摩景園地	23	18	17	19	19				
26	大泉風致地区	7.5	大泉学園、成増	武蔵野鉄道、東武東上線	大泉風致	24								
27	大泉風致地区・平林寺	11.6 /10.3	大泉学園、志木・清瀬	武蔵野電車、東武東上線	大泉風致	29	14	14	14					
28	三富開拓遺跡	16.7	所沢飛行場前、入間川・入曽	西武電車		25	19	19	22					
29	入間川	15	入間川、南大塚	西武電車	霞が関景園地	26	17		24	23				
30	水富・入間川べり	10	入間川	西武電車	霞が関景園地			23						
31	岩殿山・笛吹峠	17	高坂、武蔵嵐山	東武東上線	物見山景園地	24	34	40	40					
32	神武寺・瀧取山	6.2	追浜、神武寺	京浜・湘南電車	鎌倉景園地	25	26	27	25					
33	羽田空港・川崎大師	7	稲荷橋、川崎大師	京浜・川崎電車	六守(大公園)	26	13	13	13					
34	野猿峠越へ	13.4	高幡不動、片倉	京浜・川崎電車	南多摩景園地	27	21	21	21					

ID	コース名	距離(km)	利用駅
35	印旛沼・成田	21.6	臼井・佐倉・大佐倉、成田
36	和田堀風致地区めぐり	5.2	山谷、阿佐ヶ谷
37	荒川河畔・西新井大師	10.5	赤羽、王子
38	丸瀧・海楽園	12.8	今井
39	二子玉川・丸子多摩川	5.1	よみうり遊園、多摩川園前
40	津田山・砦	4.1	溝の口、砦
41	石神井・武蔵岡	9.5	上井草、西武柳沢
42	江戸川堤・国府台	6.3	柴又、市川国府台・京成中山
43	井の頭公園・深大寺	9.1	井の頭公園、調布
44	太尾公園・ミツ池	8.4	大倉山、網島温泉
45	小金井堤	8	東伏見、花小金井
46	武蔵野史跡めぐり	7.4	柴崎、多磨霊園
47	弁天洞窟・多摩丘陵	5.9	矢野口、西生田
48	高嶺丘陵	9.5	武蔵大和田
49	弘明寺観音・高原バラダイス	7	弘明寺、井土ヶ谷
50	お杉子母子山・赤沼林道	7.6 /9.1	坂戸町
51	天覧山・多摩圭山	11	飯能
52	安針塚・双子山	17.5	軍需部前、湘南逗子
53	松山高原・八丁湖	15	武州松山
54	七国峠越え阿須山	13.8	飯能、仏子
55	朝日岳・赤根ヶ峠	10	飯能
56	運河辺めぐり	8	運河、野田町
57	川苔山	21	御嶽
58	日原溪谷(鍾乳洞)	20	御嶽
59	刈寄山	18.3	武蔵五日市
60	日の出山・御嶽神社	15.3	澤井、御嶽
61	奥多摩・養澤鍾乳洞	21.8	御嶽、武蔵五日市
62	御嶽 大獄山・馬頭刈山	26	御嶽、武蔵五日市
63	大獄山・鋸山	21	御嶽
64	鶴巻温泉・弘法寺	7.5	鶴巻温泉、大森野
65	物見峠・札掛溪谷	18	厚木、大森野
66	十三州見晴台	2.2	御陵前
67	前高尾	12.7	御陵前
68	高尾山 裏高尾	9.6	御陵前
69	近傍 高尾縦走	14	御陵前、東八王子
70	南高尾	10.6	御陵前
71	豆口峠・天王山	18.1	吾野
72	奥武蔵高原	18.5	吾野

利用路線	緑地計画	市民健康路バンフレット ※3						
		A	B	C	D	E	F	G
京成電車			28	33	39	39		
西武電車	和田堀風致		1	1	1			
王子電車			2	3	3			
城東電車			4	4	4			
多摩川線、東横本線	多摩川風致		5	5	5			
玉川電車	多摩川風致		6	6	6			
西武鉄道	石神井・善福寺風致		8	9	9			
京成電車	法華経寺・国府台風致		9	8	8			
帝都電車、京王線一帝都電車	井の頭風致 深大寺（大公園）		10	10	10			
東横電車・目蒲電車	三ツ池 大倉山風致		11	11	11			
西武鉄道			12	12	12			
京王電車	南武蔵野景園地		15	15	15			
小田急、南武電車	多摩景園地		16	16	16			
多摩湖電車・バス	狭山景園地		18	20	20			
京浜電車	保土ヶ谷・弘明寺風致		20	17	17			
東武東上線・バス	物見山景園地		27	31	29			
武蔵野電車	飯能景園地		28	32	30			
京浜・湘南電車	塚山風致		29	29				
東武東上線	吉見景園地		30	36	34			
武蔵野電車	飯能景園地		31	33	31			
武蔵野電車	飯能景園地			34	32			
省線一総武鉄道			32	35	33			
省線一青梅電気鉄道	日原景園地		36	42	42			
省線一青梅電気鉄道	日原景園地		37	43	43			
省線一五日市鉄道	秋山景園地		38	44	44			
省線一青梅電気鉄道	御嶽景園地		39	45	45			
省線一青梅電気鉄道	御嶽景園地		39	45	45			
省線一青梅電気鉄道	御嶽景園地		39	45	45			
省線一青梅電気鉄道	御嶽景園地		39	45	45			
小田急電車			40	46	27			
小田急電車、バス	大山景園地			55	53			
京王電車、バス	高尾景園地		41					
京王電車、バス	高尾景園地				38			
京王電車、バス	高尾景園地		41	38	37			
京王電車、バス	高尾景園地		41	54	52			
京王電車、バス	高尾景園地		41	37	36			
武蔵野電車			42	48	46			
武蔵野電車			43	49	47			

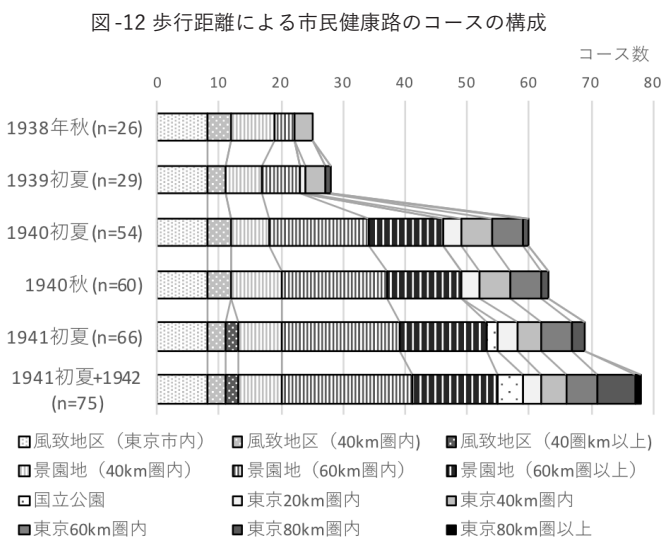
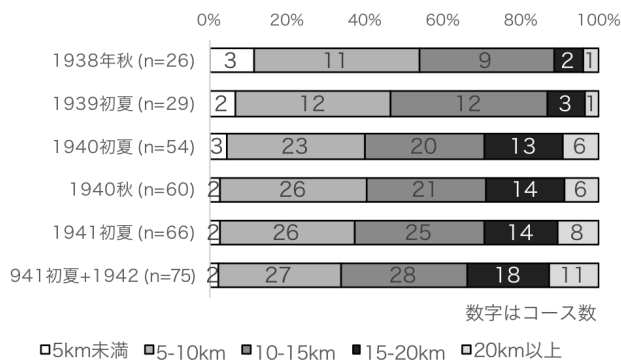
ID	コース名	距離(km)	利用駅	利用路線	緑地計画	市民健康路バンフレット ※3							
						A	B	C	D	E	F	G	
73	子の権現・伊豆ヶ岳	20.3	吾野	武蔵野電車				44	50	48			
74	江戸川堤・清水公園	6	清水公園、川間	省線一総武鉄道				45	47	28			
75	利根川・鬼怒川べり	16	蓮河、野田町	省線一総武鉄道				46	51	49			
76	棒ノ峰・高水三山	18	飯能、豊岡町	武蔵野電車	下奥多摩景園地			47	52	50			
77	比企三山	15.5	小川町	東武東上線	笠山景園地			48	53	51			
78	衣笠城址・大楠山	15.1	横須賀中央、軍部駅前	京浜・湘南電車	大楠山景園地			49	30				
79	登谷山・釜伏峠	15/13	小川町、金尾・玉	東武東上線	秩父口景園地			50	56	56			
80	東京湾横断・鶴山	9.1	浜金谷、保田	京浜・湘南電車、汽船（省線）				51	57	57			
81	陣見山・鐘撞堂山	13.8/12.3	玉淀	東武東上線	秩父口景園地			52	58	58			
82	大山・ヤビツ峠	10.5	伊勢原、大森野	小田急電車、バス	大山景園地			53	59	59			
83	三原山 伊豆大・大島公園	11.4	東京芝浦	汽船	大島景園地			54	60	64			
84	島 海岸遊歩道・大島公園	4.5	東京芝浦	汽船	大島景園地			54	60	64			
85	狭山丘陵	6/8	東村山、村山野水池前	西武電車	狭山景園地				18	18			
86	津久井溪谷	7	高尾山麓、辻倉・八王子	京王電車	津久井景園地					35			
87	丹澤表尾根縦走	24	大森野、渋沢	小田急電車	大山景園地					54			
88	滋野丘陵	15	大森野、新松田	小田急電車						55			
89	栃木大平山	18.5/23.5	栃木、新大平下・静和	東武鉄道	大平山風致					60			
90	武川岳より双子山	14	吾野	武蔵野電車・バス	武甲景園地					61			
91	武甲山	17	吾野	武蔵野電車・バス	武甲景園地					62			
92	足利行道山	12.3	足利市	東武電車	風致地区					63			
93	日光鳴虫山	16	東武日光	東武電車	日光国立公園					65			
94	霧降牧場	13.6	東武日光	東武電車	日光国立公園					66			
95	武蔵嵐山・下里観音	10.5	武蔵嵐山、小川町	東武東上線	物見山景園地					○			
96	杉田梅林・日下丘陵	9	杉田、屏風ヶ浦	東京急行品川線、湘南線	鎌倉景園地					○			
97	鍋割山	31	渋沢	東京急行小田原線						○			
98	古賀志山	21.5	東宇都宮、北鹿沼	東武鉄道						○			
99	雷神神社と霊林	19.2	柳生、茂林寺前	東武鉄道						○			
100	神山・駒ヶ岳	17/21	強羅、小涌谷	東京急行小田原線、登山鉄道	富士箱根国立公園					○			
101	明神・明星ヶ岳	17.9	大雄山、強羅	東京急行小田原線、大雄山鉄道、登山鉄道	富士箱根国立公園					○			
102	三義山	11.2/10.2	静和、佐野町・藤岡	東武鉄道						○			
103	高松山・松田山	16.7	新松田	東京急行小田原線、富士山麓バス						○			

※1 「、」は往路、復路の利用駅の区分。利用駅が複数提示されている場合には・を用いた。  
 ※2 乗り継ぎの場合には－を用いた。また、利用路線はコースが初出時の鉄道会社、路線名を記載している。  
 ※3 A～Gはそれぞれ次のバンフレットに該当する：A 市民健康路（26コース） B 市民健康路二十九コース  
 C 市民健康路五十四コース D 市民健康路六十コース E 市民健康路（66コース） F 市民健康路新コース  
 G 蕨賞応募コース

復で異なる鉄道会社の路線の利用として、省線と南武電車と京王電車、武蔵野電車と東武東上線の組み合わせが見られる。1940年以降は「奥多摩御岳」(60,61,62,63)での立川駅での省線から五日市鉄道と青梅鉄道、「運河辺めぐり」(56)の柏での省線から総武鉄道との乗継が加わるが、その他の省線と私鉄の連絡はなくなり、私鉄では小田急電車と南武電車(47)の組み合わせが加わっている。一方で、往路復路とも利用駅が同一となるものは、主に1940年以降に追加された御陵前駅から高尾、御嶽駅から日原、吾野駅や飯能駅から伊豆ヶ岳や武甲山といった山地のコースとなっている。

表-3 市民健康路の各コースにおける交通機関と駅の利用状況

	往路復路で利用駅が			計	
	同一	異なる	選択肢有		
利用 路線	単一鉄道会社	16	33	8	57
	複数の路線・鉄道会社	0	11	1	12
	鉄道会社間の乗継	4	12	0	16
	複数の路線・鉄道会社、 会社間乗継	0	3	1	4
	単一鉄道会社 +バス	9	5	0	14
計	29	64	10	103	



(2) 市民健康路のコースの内容とその変遷

次に表-2と表-1の文献に基づき、事業主体の変化から3時期に分けてコースの内容とその変遷を整理する。

(i) 1934～1937年：東京鉄道局によるハイキングコースの開発

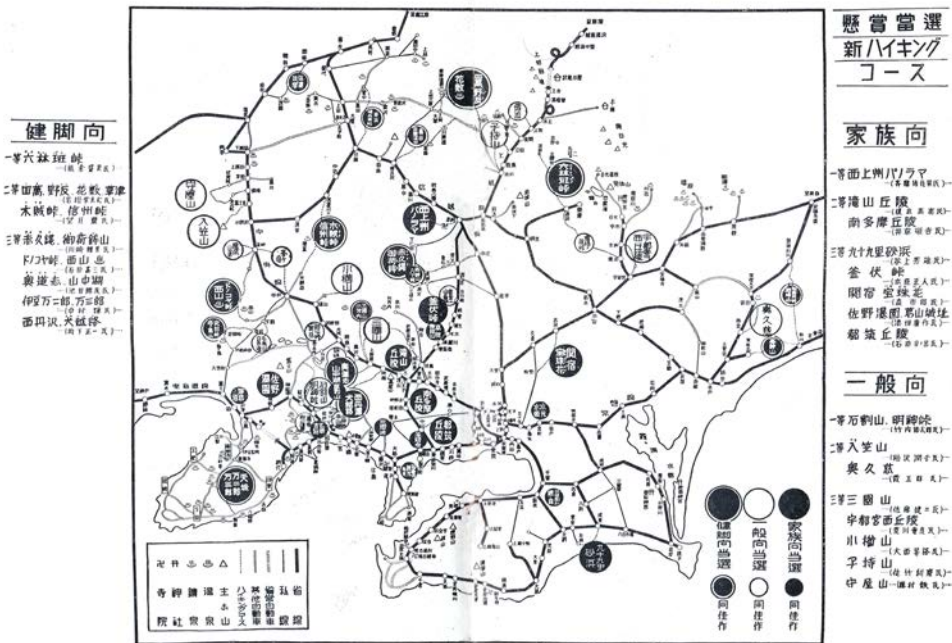
市民健康路に先立つ東京鉄道局のハイキングコースとして、まず、1934年に東京日日新聞と大阪毎日新聞に連載された各鉄道局選定のハイキングコースがある<sup>14)</sup>。この選定コースは、同年に開始されたハイキング割引の対象となり、鉄道省推奨コースとして各種紙面でしばしば紹介されている<sup>23)</sup>。また、東京鉄道局は、1936年秋に、東京を中心としたハイキングコースの懸賞応募を実施している。これは「未だ知られざる或いは新味のあるハイキングコース」について、日帰りの家族向、日帰りまたは1泊の一般向、1～2泊の健脚向の3つのカテゴリーを一般に公募したものであり、応募された1182通に

ついて、東京鉄道局の旅客課員の現地調査を経て全51のコースが選ばれた<sup>24)</sup> <sup>25)</sup>。選定されたコースは懸賞当選コースとして翌1937年5月に各種メディアで発表され、一部がハイキング割引のコースとして採用された。

例えば、1937年秋のハイキング割引には、家族向の「滝山丘陵」(11)、「南多摩丘陵」(15)、一般向の「奥久慈」「宇都宮西丘陵、脚向の「六林班峠」「ドコヤ峠」「西丹沢犬越路」と13コース中7コース<sup>26)</sup>、1938年春には、「西上州パノラマ」「水元水郷」「蘇我古蹟」の3コース<sup>27)</sup>が採用されている。

(ii) 1938～1939年：東京鉄道局・東京市の推奨・推薦コース

表-2に示す1938年秋版の1～16までの16コースは東京鉄道局の推奨コース<sup>28)</sup>、17～26の10コースは東京市の推薦コースある<sup>3)</sup>。両者は割引切符の発売所が異なり、前者は省線各駅と百貨店内の鉄道案内所、日本旅行協会、後者は各鉄道会社の指定駅



で販売されている。東京鉄道局の推奨コースのうち5コース(3,7,8,11,15)は前述の懸賞当選コースの家族向のコースから選定されている。

1939年は、東京鉄道局の推奨コースが15に減少、東京市推薦のコースが14に増加し、ほぼ同数となっている。東京市の昭和14年度の年報によると、1938年度の期間中の利用者が55,000名余であり<sup>29)</sup>、1939年度には増加傾向にある利用者に対し、従来のコースを変更すると共に新コースが追加されたとある<sup>30)</sup>。具体的には、東京鉄道局から「武相国境」(17)、東京市から、「岩殿山・笛吹峠」(31)、「神武寺・鷹取山」(32)、「羽田空港・川崎大師」(33)、

「野猿峠へ」(34)、「印旛沼・成田」(35)が追加され、「八柱霊園と中山法華寺」(18)が削除された。コースの変更では、豊岡町駅・高麗駅間の「高麗神社」(19)から、高麗駅・東毛呂駅間の「高麗神社・物見山」(20)への変更があり、「南多摩連光寺」(25)は、コース名を京王電車のパンフレットで用いられていた「南多摩御聖蹟廻り」に変更され、内容が重複する「多摩聖蹟」(12)が削除されている。また、大泉学園駅・志木駅間の「大泉風致地区・平林寺」(27)の追加に対し、内容の重複する保谷駅・志木駅間の「野火止、平林」(10)と大泉学園駅・成増間の「大泉学園風致地区」(26)が削除されている。



図-15 市民の健康路(京急湘南電車S19)

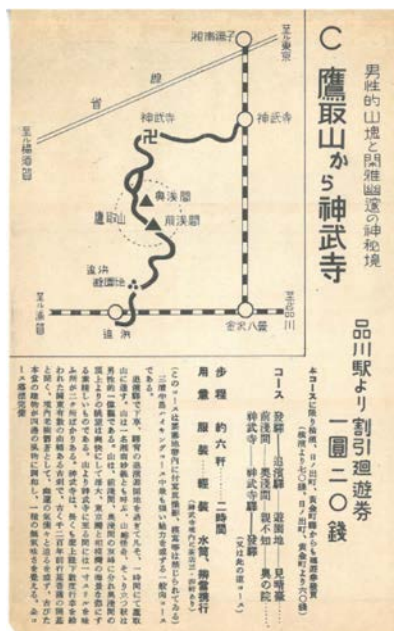


図-15 鷹取山・神武寺コース  
(市民の健康路 京急湘南電車S19)



図-16 京王沿線ハイキング(京王電気軌道S18)

### (iii) 1940～1942年：東京市観光課による選定コース

1940年に東京市観光課が発行した「東京市選定市民健康路 54コース」では、コースが、子連れの散歩程度から一般のハイカー向けに及ぶとともに、時下の国策の輸送に協力するために私鉄を主としたことが説明されている。具体的には「貯水池廻り」(13)を除く鉄道局推奨の14コースが消え<sup>31)</sup>、新たに39コースが追加されたものであり、コース数が大幅に増加している。

1940年初夏からの市民健康路の特徴として、1936年から東京府が自然公園の整備を進める、奥多摩(60-63)と伊豆大島(83-84)、京王電車が観光地開発を進める高尾(66-70)からのコースが加わったこと、また、物見山景園地(50)、飯能景園地(51,54)大山景園地(82)、天王山(71)や奥武蔵高原(72)伊豆ヶ岳(73)など、奥多摩や高尾の位置する東京60km圏の山地のコースが多く追加されたことが挙げられる。更に遠方では、日原景園地(57,58)や秩父口景園地(79,81)など80km圏のコースもみられる。20km圏では、多摩川河原と多摩丘陵のコース(39,40,47)、「和田堀風致地区めぐり」(36)、「西郊緑地帯」(9)に替わるものとして「石神井・武蔵關」(41)、「井の頭公園・深大寺」(43)、「小金井堤」(45)、「武蔵野史跡めぐり」(46)など北多摩の武蔵野の風景地、「江戸川河港」(1)「東葛飾」(2)「水元水郷」(3)に替わる江戸川沿いのコースとして「江戸川堤」(42)、王子電車による「荒川河畔・西新井薬師」(37)、城東電車による「丸濱・海樂園」(38)など、削除されたコースを補いながら、新しいエリアを追加している。他には、40-50km圏に総武線による利根川の水郷のコース(56,74,75)や、京浜電車による横浜・横須賀のコース(49,52,78)が追加されている。

1941年は、小田急電車からの丹沢の縦走(87)と東武東上線のもの見山(95)、武蔵野電車からの双子岳や武甲山(90,91)など登山に近い健脚向コースに加え、東武鉄道の足利(92)や日光の国立公園(93,94)が追加され、さらに範囲が広域となっている。

1942年に追加されたのは、東武線の「古賀志山」(98)「雷電神社と館林」(99)、「三轟山」(102)、箱根や松田山など80km圏以上コースが大半だが、40km圏に「杉田梅林・日下丘陵」(96)という京浜・湘南電車のコースも含まれる。

## 6. 考察

### (1) 市民健康路事業の変遷とレクリエーション活動の場の提供

まず、市民健康路のコースの設定範囲についてみると、1938～1939年は「武蔵野を背景とした足代往復1円以下のコース」として、主に東京20～40km圏内、武蔵野台地と多摩丘陵、及び江戸川沿いに限られていたものが、1940年には奥多摩や高尾山をはじめとする東京50～60km圏のコースが多く追加され、1941～42年には、日光・箱根の国立公園や神奈川県西の山地、北関東の景勝地など東京80km圏のコースが追加されるというように、段階的にその範囲を拡大している。一方で、1940年には「都筑丘陵」「万騎ヶ原」「鶴見総持寺」など横浜市内の家族向けのハイキングコースが無くなっている<sup>32)</sup>。つまり、市民健康路がねらいとするものが、東京鉄道局の管区の都市住民を想定した家族向けのレクリエーションから、東京市民を対象とする家族向けの散策から近郊の景勝地への小旅行、本格的な登山までの多様なレクリエーション、或いは心身鍛錬へと移行したものと捉えられる。特に1941～42年の変化は、戦時下の体制で東京鉄道局が扱えなくなった、1～2泊の登山やスキー旅行の広報の代替が求められたものとも考えられる。

また、コースの変遷について、東京緑地計画景園地の利用状況の変遷としてみると、1938年には鎌倉、南多摩、南武蔵野などの7箇所であったものが、1940年には19箇所、最終的には21箇所、コース数でみると、10から44にまで増加しており、景園地が新コース開発の主な対象となっている。従って、市民健康路におけるコースの変遷は、東京緑地計画



が一つの目標とした市民に対する広域的な野外レクリエーション活動の場の提供において、その実質的な整備の状況を示すものとして考えられる。

## (2) 市民健康路における鉄道利用の特徴

東京府観光協会は、都市郊外の観光地整備の方策の1つとして、「観光ルートの設定並びに各種交通機関との連絡強調」を訪客施設の整備の項目として挙げている。鉄道会社間の連携について、1937年に行われた南多摩郡での観光地域開発に関する座談会で、往復同じ路線の利用を望むことが観光客を誘致する上で不利になることが、鉄道各社の共通の理解として議論されている。武蔵野中央電気軌道から、省線、京王、小田急との連携が必要であること、高尾登山鉄道から片道のみ割引切符が好評であったこと等の報告を受け、鉄道局旅客課からは、「往復共自分の方の路線を利用してもらいたいと云ふ様な考へは5年程前から持って居ません。(略)武蔵野一体に向ってもさういう考へを持って居る次第であります」など、他社を含めた観光ルートを積極的に検討する姿勢が示されている<sup>33)</sup>。実際に、東京鉄道局が参加していた1938-39年の市民健康路では、省線による郊外電車へのアクセスを基本としたネットワークが形成されており、広域的なレクリエーション計画の基盤としての鉄道のあり方を具現化したものと捉えられる。

私鉄各社については、市民健康路に積極的に自社のコースを提供していること、また、京浜・湘南電車のように東京市・東京鉄道局推薦のハイキングコースとして、パンフレットを作成するなど、レクリエーション利用の誘客に本事業が利用されていることが伺える。しかしながら、鉄道会社間の連絡については、多摩川右岸の河川沿いと丘陵のコース(12,23,47)での小田急電車あるいは京王電車と南武電車、大泉学園・平林寺(10,26,27)や山根貯水池(20)などで武蔵野電車と東武東上線の間で行われている程度である。そのうち1940年以降に追加されたのは「弁天洞窟・多摩川丘陵」(47)のみであり、この

意味において交通機関の連絡によるハイキングコースの開発は、東京鉄道局が事業から手を引いた以降には進展が見られない。一方で、例えば、京浜・湘南電車が当初からの六国峠越え鎌倉、神武寺・鷹取山、羽田空港・川崎大師の3コースに加え、1940年に弘明寺観音・高原パラダイス(49)、安針塚・二子山(52)、衣笠城址・大楠山(78)、1942年に杉田梅林・日下丘陵(96)と、路線を組み合わせながら多様なハイキングコースが提供されており、市民健康路の事業を通じて、徐々にレクリエーション活動の場を提供するという観点から沿線環境の充実ははかられてきた状況が読み取れる。

## 7. まとめ

本研究では、1938年から1942年にかけて東京市及び東京鉄道局により実施された市民健康路について、背景となる鉄道省及び厚生省の施策を把握した上で、市民健康路のコース内容とその変遷から、東京を中心とする観光・レクリエーション計画の実現、観光ルートとしての鉄道利用の特徴、鉄道会社の誘客の手段としての市民健康路の利用について考察した。

市民健康路としてのコースの選定は、厚生省の体力向上の国策と連動したハイキングの適地であるという公認を与えることであり、例えば東京緑地計画という野外の保健、慰楽、休養に供する風景地としての景園地をレクリエーションの場として市民に浸透させる方策として、戦時下において私鉄各社が沿線でのレクリエーション利用を誘客する手段として活用された。

施設整備や農山村地域である地元地域との調整など、市民健康路の各コースにおける観光地開発の状況、また、名古屋や京阪地区、仙台など市民健康路の他都市での展開については今後の課題としたい。

## 補注及び引用文

- 1) 梅田定宏 (2002) : 「日帰り行楽地」多摩の誕生 : 郊外行楽地の誕生 多摩市ハイキングと史蹟めぐりの社会史 : パルテノン多摩, 78-87
- 2) 「戦時体制の時局下においても、国民による健康増進、精神鍛錬、銃後に備える体位向上として、スキー場や温泉地、海山、観光地へのハイキングが大々的に掲げられ遊覧客を誘致」されており (中田武男 (1938) : 風景地の開発と農山漁村の振興 : 都市公園 4 (2)), 雑誌「旅」では、1934 年以降ハイキングの紹介とともに、流行の状況とハイカーへのマナーを喚起する記事が多く見られる (三島章道 (1934) : 正しいハイキングの心 11 (9), 茂木慎雄 (1941) : ハイカーへの抗議 (旅行道徳再検討) 18 (7) など).
- 3) 東京市公報 : 本市推薦の健康路十種 11月28日割引切符販売 : 1938年10月13日付け (1939), 2160-2161
- 4) 皆方訓久 (1997) : 戦前の東京の風致地区における風致保全実態とその評価 : ランドスケープ研究 60 (5), 451-454
- 5) 真田純子 (2004) : 東京保健道路計画の計画思想に関する研究 : ランドスケープ研究 67 (5), 423-428
- 6) 真田純子 (2003) : 東京緑地計画における環状緑地帯の計画作成過程とその位置づけに関する研究 : 都市計画 38 (3), 601-606
- 7) 稲葉克己・渡辺貴介 (1886) : 戦前の関東圏における観光関連鉄道路線の展開と誘客策に関する研究 : 日本土木史研究発表会論文集 6, 98-102
- 8) 東京市 (1942) : 夏に鍛へよ市設案内所市民健康路新コース : 市週報, 170
- 9) 高橋定一 (1934) : 国民保健の旗幟を高く掲げて : 旅 11 (6), 22-25
- 10) 鉄道省 (1933) : 昭和8年度 鉄道省年報, p.107
- 11) 鉄道省 (1934) : 昭和9年度 鉄道省年報, p.101
- 12) 朝日新聞 : 行楽特別列車全廃 5 割引青年徒歩旅行, 1938.9.7 朝刊 11 面
- 13) 川原道正 (1940) : 旅行の新体制, 旅 17 (10), 6-7
- 14) 鉄道省 (1934) : 昭和9年度 鉄道省年報, p.111
- 15) 厚生省体力課 (1938) : 歩け・走れ : 国民精神総動員中央連盟, 26
- 16) 東京市 (1939) : 14 年度年報・保健編, p.35
- 17) 東京市 (1941) : 昭和16年度年報・厚生編 (二), 39-40
- 18) 例えば、1940年1月に川崎大師への恵方ハイキング、2月に明治神宮前と多摩御陵、大國魂神社への敬神ハイキング、3月には久地梅林方面への観梅と探史ハイキングが実施されている。
- 9) 例えば、1939年度は70,000部の徒歩旅行宣伝リーフレットが配布されている (前掲書14) に同じ p.49).
- 20) 1941年2月5日付朝日新聞夕刊3面では「事業完遂ハイク」として、町会隣組の親睦のためのハイキングが紹介されており、同年3月の雑誌「旅」では、茂木慎雄が「三都中心 隣組の旅行案内」として、井の頭公園・深大寺、平林寺・大泉学園、矢野口の付近、大宮氷川神社、多摩川上水沿、荒川堤・江戸川堤、村山貯水池を紹介している。
- 21) 高尾山に合せ、伊豆大島、奥多摩御嶽の各コースに含まれるルートを1つのコースとして数えた。
- 22) 1コースで2ルート以上のものもあることから、コースではなくルート数で数えた。ルートの総数は111である。
- 23) 若葉薫る5月の郊外 鉄道省が推薦するハイキングコース (東京日日新聞 1935.4.27 朝刊 5面) など。また、東京緑地計画の決定に際しては、37箇所の景園地の探勝のコースを紹介するなど (茂木慎雄 (1939) : 東京緑地計画景園地の探勝 : 公園緑地 3 (2-3)) 時局に合わせたハイキングのあり方を継続的に研究していたことが伺える。
- 24) 鉄道省 (1936) : 昭和11年度 鉄道省年報, p.116
- 25) 東京鐵道局 (1937) : 懸賞当選ハイキングコース, 72
- 26) 東京鐵道局 (1937) : 鍛えよ銃後の秋 山野跋涉!, 24
- 27) 東京鐵道局 (1938) : 新緑案内 (パンフレット)
- 28) 鐵道省旅客課 (1938) : 国民健康徒步行路, 旅と伝説 131, 37-41
- 29) 東京市 (1939) : 14 年度年報・総務編 : 47-49
- 30) 前掲書 14) に同じ p.48
- 3) 「瀧山丘陵」(15) については1941年から再度掲載されている。
- 32) これらのコースは1940年に横浜市産業部商工課から発行された「市民ハイキング案内」の中に、家族向けのコースとして掲載されている。
- 33) 東京府観光協会 (1939) : 観光地開発 (南多摩郡) に関する座談会, 23-30

# 東京の散策路 事業における 都市ストック の創出と継承

A Viewpoint for the Creation and Inheritance of a Walking-Trail in Tokyo  
as an Urban Legacy

岡村祐・片桐由希子（2019）：散策路事業における都市ストックの創出と継承の視点（特集：健康な都市に向けたランドスケープデザイン）、ランドスケープ研究、83(3)、pp.288-291 / 片桐由希子（2015）：散策路から見る東京の観光・レクリエーション地域の開発、首都大学東京観光科学PBL 運営委員会：観光を科学するPBL：東京都区部における新しい観光の提案、pp.33-36  
上記論文を合わせて加筆・再構成し、図版を追加

## 1. 東京都における散策路事業の展開

以下の表は、1930年代以降の東京都における主な散策路に関する事業や計画をまとめたものである。

1920年代後半、関東大震災後に郊外への鉄道路線の延伸と居住地の拡大が急激に進み、鉄道会社は沿線の住宅地開発と併せて行楽場として、史蹟や多摩御陵へのアクセスや関連施設の整備、二子玉川園（多摩川第二遊園地、1922）や多摩川園（1925）、豊島園（1926）、京王閣（1927）などの遊園地を整備された。

この拡大する都市と交通網の発達に対し、都市の適正な規模を保ちながら、「帝都市民の保健、休養、体育等の方面に必要な緑地施設の充実をはかること」を目的として1939年に策定されたのが東京緑地計画である。

東京緑地計画の計画範囲は、山の手戦主要駅及郊外電鉄始発駅を起点として片道1時間、運賃1円で達する範囲（およそ半径50キロ圏内）といった日帰りレクリエーションの圏域を想定したものであ

表-1 東京都における主な散策路事業と計画

			概要
行楽道路 1935	都市計画	歩車兼用道路 88路線 2771km 遊歩道路（東京府のみ） 92路線 1111km	市内からの公園・景園地などの行楽地を結ぶ連絡道路とともに、慰楽道路として公園相互の連絡や景園地内での探勝を目的とした徒歩旅行のための遊歩道が計画された <sup>1)</sup> 。遊歩道路は38年時点では68路線、39年に下記の保健道路の15路線を含む24路線の遊歩道路が追加決定されている <sup>2)</sup> 。
保健道路 1938	東京地方委員会	244km 15路線	東京市民の健康増進、体力向上のために経費をかけず（50銭程度）に、空気と風致のよい環境で歩行運動を行うための道路施設の計画。路線は主に河川・水路沿いに設定され、健康運動に精神的訓練を加味することをねらいとし、休憩所として社寺や史跡に接した107の広場が計画された <sup>3)</sup> 。
市民健康路 1939-1942	都市計画	全103コース 1939:26コース 1941:66コース	厚生省による徒歩運動奨励のもとで、東京市及び東京鉄道局が実施した事業で、東京近郊の徒歩旅行のコースの選定と初夏と秋の割引運賃の設定が実施された <sup>4)</sup> 。
歴史と文化の 散歩道 1984-2018	東京地方委員会	241km 13コース	歴史・文化資源を結ぶ散歩道として、コース上の案内板と標識が設置され、ガイドブックが作成された。2018年に標識の劣化や周辺環境の変化による表示内容の齟齬を理由に事業の維持・広報を終了、標識は市区の意向を確認しつつ、原則撤去が決定している <sup>5)</sup> 。
武蔵野の路 1985-	東京市市民局体力課	270km 21コース	長期計画「マイタウン東京」（1982）の「スポーツ・レクリエーション活動の促進と施策の体系的な整備を計る施策」として東京の外周にあたる臨海、河川、丘陵を周回できる遊歩道の整備事業、施設、標識の整備とパンフレットの作成が実施された <sup>6)</sup> 。現在の整備・運用は市区にまかされている。
かたらいの道 1986-	東京都生活文化局	141km 9コース	武蔵野の路同様、長期計画に位置付けられた施策であり、多摩丘陵地の都立自然公園区域を中心に、野外レクリエーション拠点として7箇所のピクニック広場、広場やその他の施設を結ぶ遊歩道が整備された <sup>7)</sup> 。当初遊歩道は武蔵野の路と一体的に整備するものとされ、91年の総合実施計画以降、かたらいの道の名称が使われるようになっていく。
雑木林のみち 1988-	東京都建設局	10コース	多摩東部の武蔵野の風景をレクリエーションの場として活用することを旨とした事業で、散策と自然観察のための小道と説明板、リーフレットが整備された。雑木林や湧水に対する保全施策への展開をねらいとしており、保全地域への指定の他、地元市と連携した環境整備や保全・啓蒙活動等が検討されている <sup>8)</sup> 。
トーキョー ウォーキング マップ 2016-	東京都環境局	21区 19市町村 (2019年9月順次追加)	都内基礎自治体の散策路の情報が集約されており、路線や最寄駅や時間、シーンからのコース検索、ウォーキング継続のコツ、健康ウォークの開催情報などのコンテンツを提供するポータルサイトであり、オリンピックを見据え、インバウンド観光に向けた英語版も用意された。公開に際しては、都営地下鉄駅で歩くことの楽しさを呼びかける広報が行われている <sup>9)</sup> 。

る。都市の拡大に対する郊外の風致の保全や利用については、1930年から33年にかけては武蔵野、善福寺、石神井、洗足、江戸川、多摩川、和田堀、野方、大泉などの郊外の景勝地に対する風致地区の指定、1933年には東京多摩地域・千葉・埼玉・神奈川の史跡、名勝、天然記念物等が多く立地する地域が将来の自然公園として景園地に指定されている。東京緑地計画はこれらを緑地として地域計画に位置付けたものであり、景勝地を貫く中小河川沿いに、歩行者専用道路と馬車道からなる緑道を整備し、都心からのネットワークを形成することが計画された<sup>3)</sup>。

「市民健康路」は、1938年から1942年ごろにかけて、旅行の保健化を進める鉄道省、旅客獲得に期待する鉄道会社とともに実施されたプロジェクトで、鉄道駅を起点・終点としたコースが選定され、行楽シーズンには割引切符を発売された。最終的に100余選定されたハイキングコースは、東京緑地計画の計画範囲、風致地区や景園地として位置付けられた緑地と重なるものであり、東京緑地計画の広域レクリエーション計画が実態化されたものとも捉えられる<sup>4)</sup>。

戦後の急速な市街化により、1960年代後半までには緑地地域や近郊地域など、戦前からのグリーンベルトによる都市拡大制御の施策は解除され、周辺区部における自然・田園的な環境は大きく失われた。一方、自然や健康に対する関心の高まりから、公害対策としての緑化や都市公園の整備に目が向けられるようになった。「明治の森高尾国定公園」から「明治の森箕面国定公園」を結ぶ「東海自然歩道」は、1969年に、厚生省から構想が発表され、環境庁が整備した最初の長距離自然歩道である。これは自然と文化財を訪ねる歩道の環境として、歩道や橋、園地や標識や休息地を整備する、都道府県を整備・管理主体とした補助制度事業である。1982年からの「首都圏自然歩道（関東ふれあいの道）」の事業では、高尾から奥多摩までの7コースが整備された。

1980年代、東京都ではマイタウン東京構想として「安心していきいきと暮らせ、故郷と呼べる街」を目標とする長期計画を策定しており、その一環として複数の散策路事業が実施された。

その一つは、都内に残されている歴史的・文化的資源を系統的に結ぶ「東京歴史と文化の散歩道」で

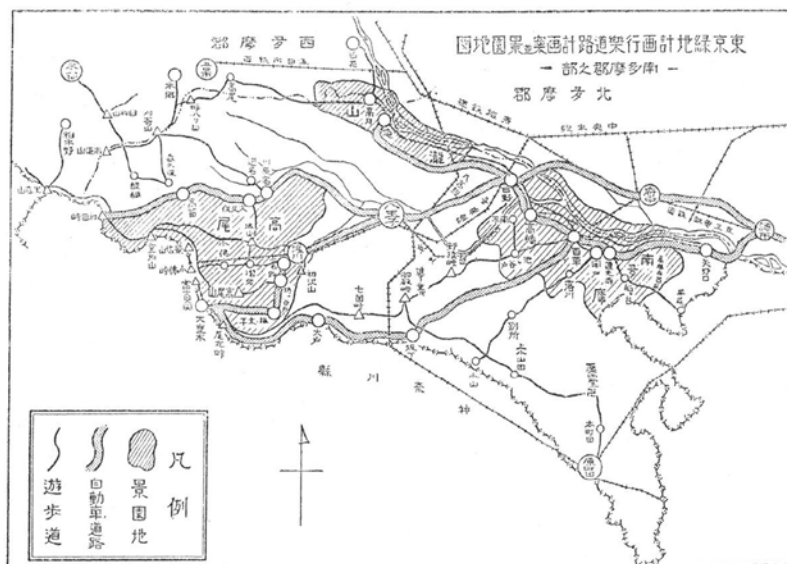


図-1 東京緑地計画行楽道路計画並びに景園地図 南多摩郡之部

1983年から1996年にかけて、案内板と標識が設置、パンフレットによる周知が行われた。それぞれ鉄道駅を起点とした2-5kmの23のコースで、そのうち16コースは、皇居を中心とした都心部のネットワークの体をなしている。

二つ目は、「武蔵野の路の整備基本計画（1985）」と「かたらいの道（1986）」であり、「マイタウン東京」における「スポーツ・レクリエーション活動の促進と施策の体系的な整備」の施策の一つであった<sup>6)</sup>。地域の自然・歴史・文化にふれながら、「武蔵野の路の整備基本計画」は、東京の外周にあたる臨海、河川、丘陵を周回するもので、全長270kmのうち、90kmは既存の緑道やサイクリングロード、残りの180kmを整備する計画であり、臨海部では海上バスの利用が構想されている。地域に根ざしたものとするために21のコースに区分され、自然歩道やむさしの森構想、新東京百景、各河川事業、首都圏自然歩道を初めとする周辺散策コースと連結し、広域的な水・緑のネットワークの形成を目指したものであり、道路施設や標識の整備、パンフレットの作成が行われている。

三つ目は、多摩東部に残された雑木林を中心とし

た武蔵野の風景をレクリエーションの場として活用することを目指した「雑木林のみち」で、1988年頃から開始された事業であり、「雑木林や畑が比較的残っていること」「半日程度で散策してまわること」「電車などの交通の便がよいこと」といった視点から選定されたコースである<sup>8)</sup>。事業のねらいとしては、雑木林や湧水に対する保全施策へが展開であり、保全地域への指定の他、地元市と連携した環境整備や保全・啓蒙活動等が検討されている。

「トーキョーウォーキングマップ」<sup>10)</sup>は、2016年に東京都福祉保健局が開設した、都内区市町村が設定している散策路を集約したポータルサイトである。当サイトでは、「区市町村」「主要路線」「歩く時間」「シーン」から、自分に合ったコースを検索することができ、各コースに関しては、グーグルマップ上もしくは、各自治体作成のPDF形式のマップが閲覧できる。各区市町村作成のマップでは、ルート付近の見どころが紹介されるとともに、距離、消費カロリー、歩数、METSなどの共通のデータが示されている。また、コンテンツとして、歩行運動の方法（準備、心構え、服装や歩き方）に日常的な健康アドバイスなどを加えた解説が提供されており、ウォーキ

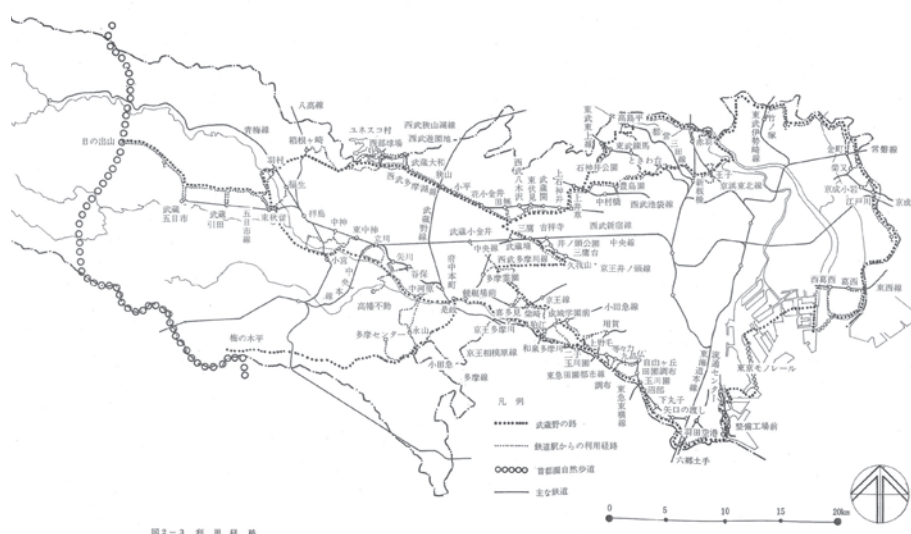


図2-3 利用経路

図-2 武蔵野の道 選定コース（出典：武蔵野の路整備基本計画報告書）

ングの導入を促すつくりとなっている。各都立公園に関連するコースのリスト，建設局河川部作成の河川沿いの散策路マップも掲載されている。当サイトの役割は，ポータルサイトとしての情報収集であり，各散策路の政策的位置づけ，ルート設定，整備，プログラム化は各自治体に委ねられている。

## 2. 野猿峠コースにおける散策路事業の成立構造

東京西郊多摩丘陵の尾根道を通る野猿峠コース

(約13km)は，当時人気を博した「市民健康路」の1つである。当該コースは，東京の郊外住宅地において，往時の姿を一部変えながらも，全体としては1920年代から現代にまで継承されている稀有な散策路である<sup>10)</sup>。

当該地では1920年代に地元野鳥料理屋と鉄道会社(現・京王電鉄)によってルート開発がなされた後，「市民健康路」として位置づけられ，活況を呈した。東京緑地計画において南多摩摩園地(4080ha)

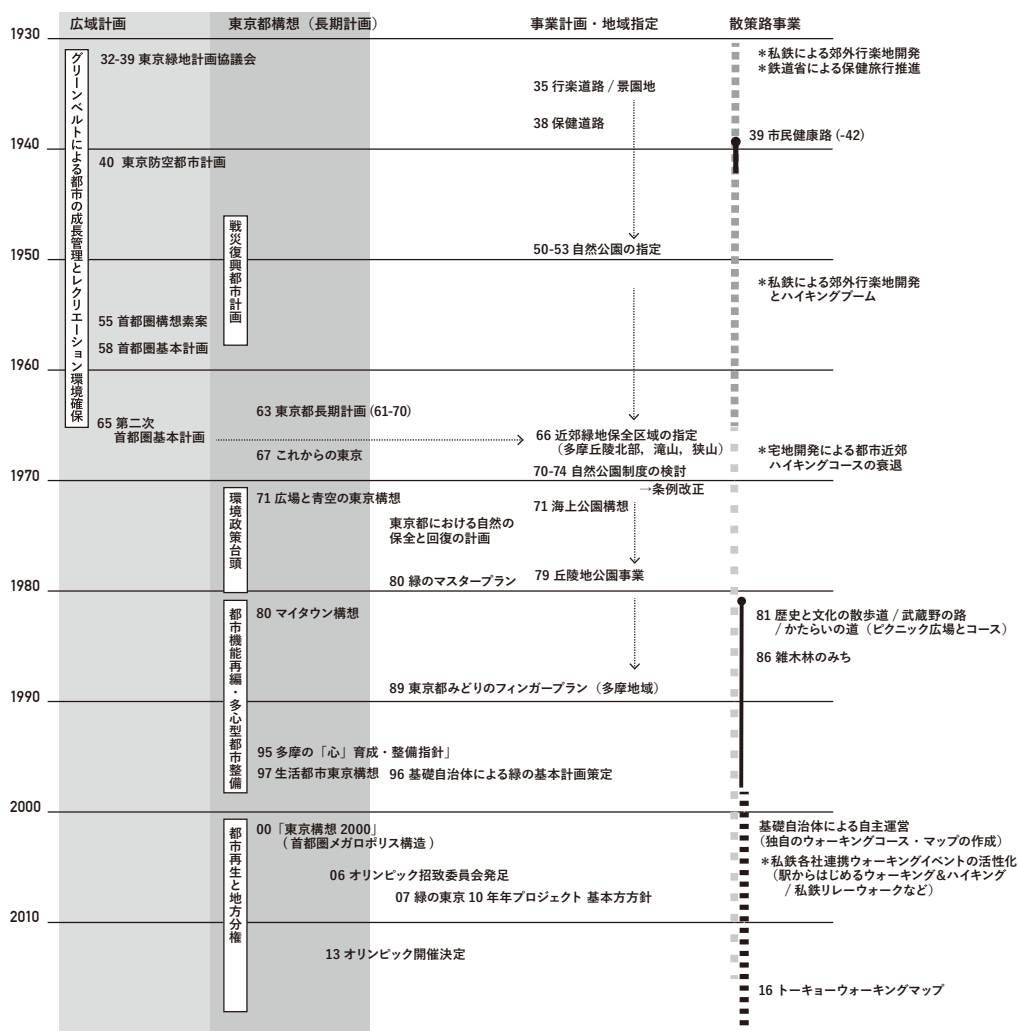


図-3 広域計画・東京都の長期計画と散策路事業

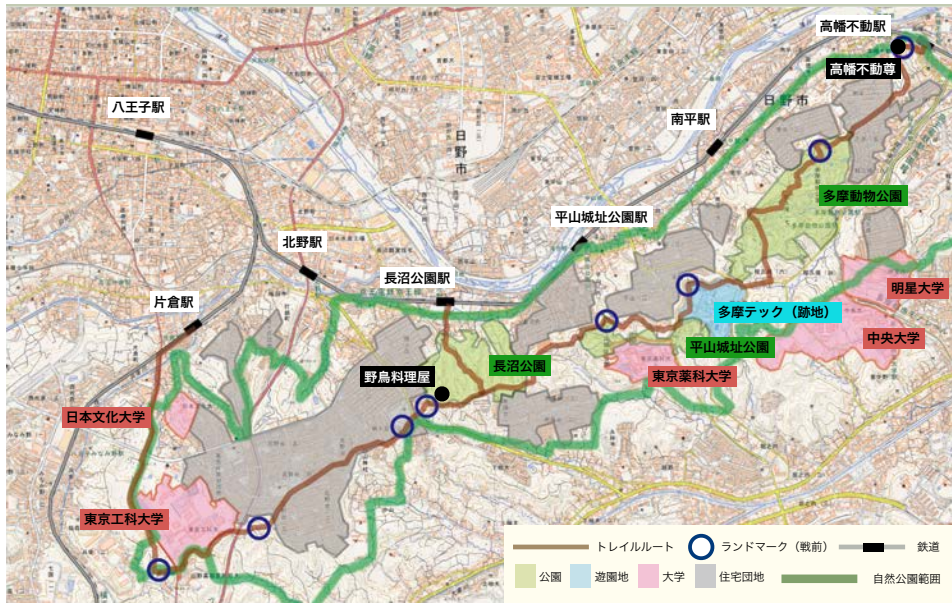


図-4 野猿峠コースのルート及び周辺土地利用・施設

に位置付けられていたコース周辺の緑地は、戦後1950年に、多摩丘陵自然公園（1959ha）として都立公園の指定を受けるとともに、1967年には首都圏近郊緑地保全法に基づき、多摩丘陵北部近郊保全区域（264ha）に指定される。当時ハイキングは、都市近郊の手軽な日帰りレクリエーションとして若者を中心に流行しており、京王電鉄も平山城址公園の開設や都心からの割引チケットを導入するなどプロモーションに力を入れたことから、野猿峠コースは「ロマンスコース」の名で呼ばれ、都市住民の格好の観光目的地となった。

1970年代になると、膨張する大都市東京の人口の受け皿として、多摩丘陵自然公園の指定区域内でも大規模住宅団地の開発が進んだ。東京都は、自然公園の指定区域を丘陵地公園として用地買収し、都市公園化（1980年長沼公園、平山城址公園）を進めたが、丘陵の尾根道としての散策路の緑は分断されてしまう。さらには、モータリゼーションによる若者の観光嗜好の変化もあり、行楽地としての野猿峠コースはガイドブックから姿を消すこととなる。

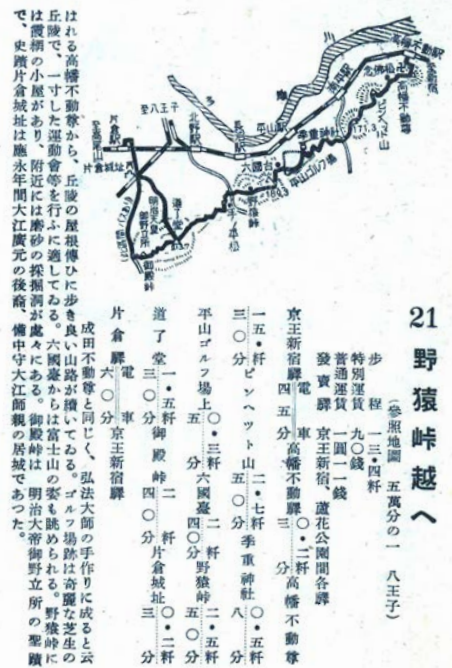


図-5 1940年に東京市が発行した「市民健康路 東京市選定54コース」に掲載された野猿峠コースの案内



再び野猿峠コースが注目されるのは、地域の歴史文化や自然環境が再評価される1980年代後半である。マイタウン東京構想に位置付けられた「かたらいの道」に、当該コースが設定され、ピクニック広場や施設の再整備を行なわれた。

その後、事業主体は都から地元自治体に移り、案内板の設置やマップの発行を行うとともに、近隣住民にとっての健康増進のための手軽な散策路としての活用が促進されている。

### 3. 広域レクリエーションの場から地域住民の散策の空間へ

野猿峠コースでは、時代とともに、利用目的や政策的な位置づけを地域や都市住民のニーズに応えながら徐々に変化させながら、近年の地域の健康目的の散策路へと至った経緯を顧みることができる。

都市近郊の散策路事業は、行政における政策意図だけでなく、各時代の都市住民（来訪者）と地域のニーズ、そして両者を橋渡しする鉄道会社の取り組みによって成立してきたといえる。

都市住民のニーズとは、余暇活動や健康増進などの市民のライフスタイルや流行のなかから生み出されるアクティビティに対する要望である。都市住民は、戦中期は銃後の観光・レクリエーション機会として、戦後1950年代から60年代にかけては、若者の間のファッションの表現の場として、こぞって日帰りのハイキングに出かけている。地域のニーズとは、郊外・行楽地開発による地域経営や、自然・文化資源の保全活用等の環境形成への要望である。散策路事業は、その実現に向けた取り組みのなかで、多様な地域資源のネットワークを可視化する、シンボリックな存在として位置づけられる。そして、この

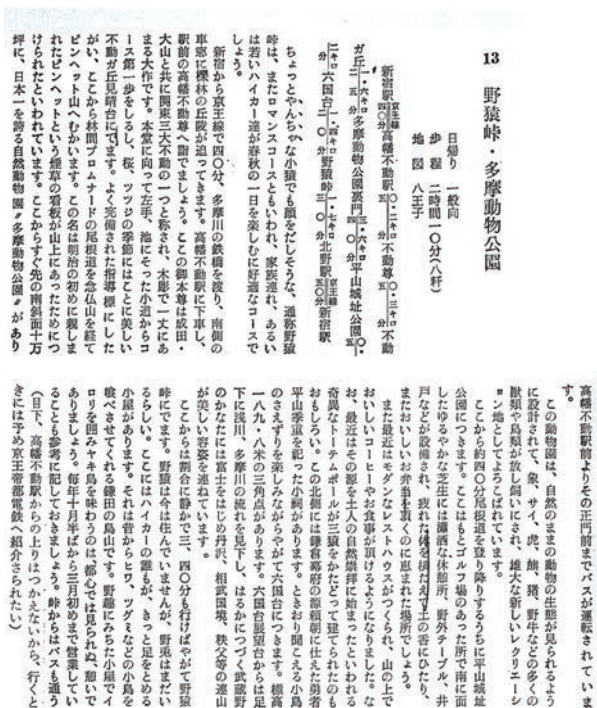


図-6 1962に発行された東京附近ハイキング（明文堂編集部）に掲載された「野猿峠・多摩動物公園」のコース案内



図-67 市街地「多摩丘陵」ロマンスコース 跡かたない自然 うなるブルドーザー 朝日新聞 朝刊（1969/04/09）

都市住民の求めるアクティビティと、地域側の環境形成への要望から整備された空間や資源のマッチングにより、具体的な散策シーンが生まれてきた。

1960年代までは、都市部と都市近郊を結ぶ鉄道会社は、乗客獲得のためのプロモーションや商品開発にとどまらず、遊園地など自らが観光施設開発に乗り出してきたことにより、観光地経営の一環として散策路が成立していた。都市スケールでのネットワークを構築しようとする行政の政策的意図、都市住民の大きなニーズが消失した現状においては、地域のニーズと空間や資源を結びつける役割を担うものは地元自治体および地元の団体となり、鉄道会社は沿線のプロモーションの材料として利用する、といった形に構造が変化しているといえる。

## 引用文献

- 1) 都市計画東京地方委員会 (1938) : 東京緑地計画, 全国都市問題会議編 : 都市計画の基本問題 (下) 113-142
- 2) 真田純子 (2004) : 東京保健道路計画の計画思想に関する計画, ランドスケープ研究67-5, 423-428
- 3) 都市計画東京地方委員会 (1938) : 東京保健道路計画の計画, 全国都市問題会議編 : 都市計画の基本問題 (下) 143-168
- 4) 片桐由希子・岡村祐 (2017) : 東京市・東京鉄道局による「市民健康路」事業の展開, ランドスケープ研究80-5, 493-497
- 5) 東京都生活文化局文化振興部 (2018) : 歴史と文化の散歩道事業について, <[http://www.seikatubunka.metro.tokyo.jp/bunka/bunka\\_seisaku/0000000236.html](http://www.seikatubunka.metro.tokyo.jp/bunka/bunka_seisaku/0000000236.html)>, 2019年9月15日参照
- 6) 東京都建設局総務部企画室 (1985) : 武蔵野の路整備基本計画報告書, 183
- 7) 東京都西部公園事務所 (1996) : 事業概要, 52-53
- 8) 東京都環境局 : 雑木林のみちについて <[http://www.kankyo.metro.tokyo.jp/nature/natural\\_environment/tokyo/thicket\\_way/thicket\\_way.html](http://www.kankyo.metro.tokyo.jp/nature/natural_environment/tokyo/thicket_way/thicket_way.html)>, 2019年9月15日参照
- 9) 東京都福祉保健局 : トーキョーウォーキングマップ <<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/walkmap/index.html>>, 2019年9月15日参照
- 10) Okamura Y. and Katagiri Y. (2019): Why and How have Walking-Trail Booms Occurred —On the Yaen Mountain Pass Route in the Tama Hills, Tokyo—: 4th International Conference on “CHANGING CITIES: Spatial, Design, Landscape & Socio-economic Dimensions”, Chania, Crete Island, Greece, 24-29 June 2019.

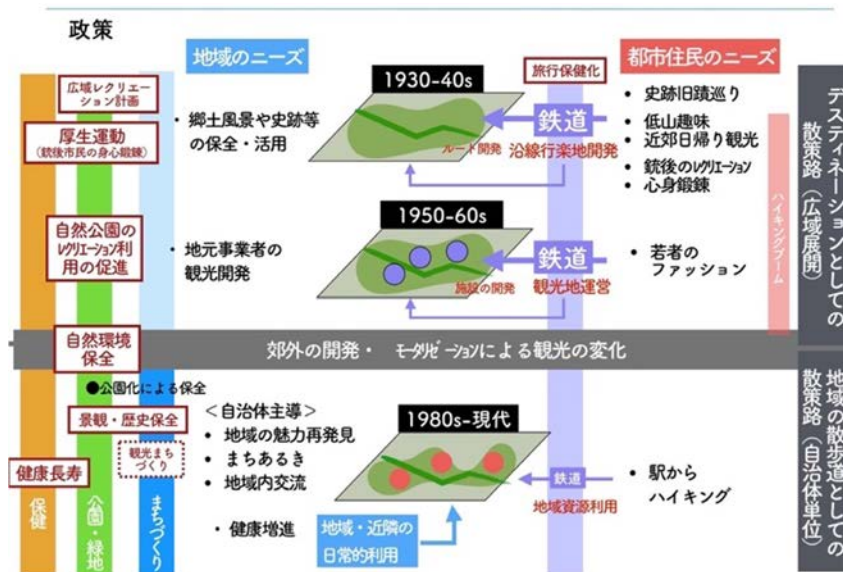


図-8 野猿峠コースにおける散策路事業の変遷

# 埼玉県飯能市 天覧山周辺の 散策路が土地 利用計画およ び空間像に与 えた影響

Improvement, development and preservation for the walking trails and its surrounding area around Mt. Tenranzan, Hanno City, Saitama Prefecture

岡村祐・片桐由希子（2022）：埼玉県飯能市天覧山周辺の散策路と周辺地域の整備・開発・保全に関する一考察，ランドスケープ研究，85（5），pp.619-624  
上記論文に図版追加

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景・目的

大都市近郊の自然風景地は、都市近郊の気軽な観光レクリエーションの場として、保全ならびに利用のための開発が行われてきた。品田（1974）<sup>1)</sup>による東京からの日帰り行楽地の範囲の変遷図では、郊外鉄道が発達する1930年代には、都心約30-50km圏にその範囲が広がったことが示されている。この時代に策定された東京緑地計画では、鉄道での日帰りのアクセスによる利用を前提とした都市住民の行楽の場として、将来的な自然公園を想定した景園地が設定された。しかしながら、高度経済成長期以降、これらの地域は宅地開発の対象となったことから、自然環境あるいはレクリエーションの場としての広がりや保全することを目的とした自然公園法や古都保存法、近郊緑地保全制度に基づく区域指定、あるいは都市公園としての整備が行われてきた。

このような自然環境をレクリエーションの場として都市住民に提供する手段として実施されてきたも

の1つが散策路事業である<sup>2)</sup>。岡村・片桐(2019)<sup>3)</sup>は、東京都による散策路事業の変遷として、各時代の社会的背景や都市住民のニーズに応じて繰り返し実施されてきた経緯を整理している。事業を通じて整備され、その後長年にわたり利用されてきた散策路においては、空間自体とともに地域の文化としての価値が培われ、散策路のメンテナンスや周辺の景観の保全など、公園・緑地自体の保全も含めた空間の継続性に対しても影響を及ぼした可能性がある。

そこで、本研究では、大都市近郊に位置する散策路の事例として、保全および開発の波と対峙してきた埼玉県飯能市天覧山付近の散策路を取り上げ、近代の形成期から消失の危機を乗り越え現代に継承される散策路と、それを取り巻く公園・緑地や宅地開発に関する構想・計画の変遷を明らかにする(第3章)。さらにこれを踏まえ、散策路とそれを含む周辺地域の公園・緑地の整備・開発・保全との関係性について分析・考察する(第4章)。なお本研究において、構想とは地域の将来像の概念や方向性が示されているもの、計画とは対象、方法、プロセス等実

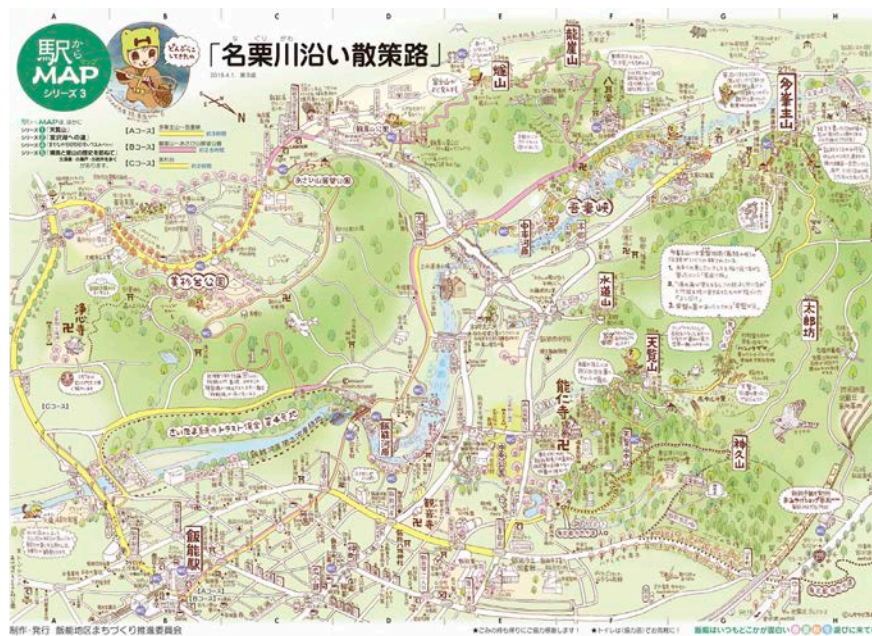


図-1 飯能地区まちづくり委員会 「駅からMAPシリーズ 名栗川沿い散策路」

行手段が明確に示されているものとする。

## (2) 研究の方法

本研究では、散策路とその周辺の土地利用計画、あるいはこれらを含む緑地保全や都市開発に関する都市政策の歴史の変遷を明らかにするために、埼玉県立図書館、埼玉県文書館、飯能市立図書館、飯能市立博物館等において資料収集を行った。加えて、飯能市周辺の地方紙「文化新聞」<sup>4)</sup>を通読し(1948年～現在)、地域情報の網羅的の把握に努めた。地図・図面上で散策路と周辺地域の整備・開発・保全に関する区域指定等の空間変容を把握し、これに各種文献・記事内容を重ね合わせることで実態に迫った。

## (3) 既往研究

都市近郊における散策路と観光地域開発との関係に着目した研究として、多摩地域を対象とし観光地域としての発展過程を記したパルテノン多摩(2002)<sup>5)</sup>や、奈良県山の辺の道を対象に、観光開発や景観保全の文脈のなかに散策路整備の変遷を捉えた山口(2013)<sup>6)</sup>・山口ら(2014)<sup>7)</sup>、鉄道事業者による散策路事業に関する片桐ら(2017)<sup>8)</sup>があげられる。また、散策路(フットパス)を生かした地域づくりや市民運動の観点から神谷(2014)<sup>9)</sup>が町田市など各地の事例を記述している。

本研究が対象とする飯能市天覧山付近の散策路は、鉄道事業者の参画や自然風景地の観光利用という面では、上記既往研究と共通のフレームワークで捉えられるが、とりわけ高度経済成長期以降、大規模な住宅団地開発が迫るなかでの、散策路(既存・新設)と都市・緑地計画との関係性に着目する点において、研究の新規性を見出すことができる。

## 2. 研究対象地飯能の概要

埼玉県飯能市は都心から約50kmに位置し、池袋

からの所要時間は西武池袋線で40-50分程度である。3(3)で後述するように、1970年代以降、当市は「10万人都市構想」を掲げ、増大する首都圏の人口の受け皿として、住宅団地の開発を推し進め、2005(平成17)年には総人口は84,982人に達したが、その後は少子高齢化に伴い減少に転じている(2020(令和2)年79,553人)<sup>10)</sup>。

飯能市は近代以降、多様な自然、歴史、文化を観光資源とし、都市住民のための観光レクリエーション都市としての地位を築いてきた。近年、法に基づきエコツーリズムを推進し、ユニークなエコツアーを提供するとともに、ツアー実施者の育成にも力を入れるなど、行政と市民が一体となった取り組みを展開している<sup>11)</sup>。

大正期から現代に至るまで、飯能市における主要な観光アクティビティはハイキングであり、戦後は市の総合振興計画においても重要施策の一つに位置づけられてきた(表-1)。この環境的基盤となっているのが、市域の4分の3を占める森林であり、中心市街地から徒歩20-30分ほどでアクセスできる所に入間川(名栗川)や飯能河原を挟んで対峙する天覧山(標高195m)・多峯主山(同271m)および朝日山(同218m)・龍崖山(同246m)が立地する(図-2)。天覧山と多峯主山を巡るハイキングコースは、主に二本の散策路(天覧山から見返り坂を経由して多峯主山に至るアップダウンのあるルート(南側散策路)と、天覧山から神久山・太郎坊を経由して多峯主山に至る比較的なだらかなルート(北側散策路))で結ばれ、ハイカーに人気を博すとともに、市民に大事に整備され、利用されてきた。一方で、大都市近郊かつ中心市街地至近という立地は、当該の環境の保全に困難を生じさせるものであった。本研究では、主にこの4山によって囲まれるエリアを対象に、これらを結ぶ散策路とその周辺地域の空間形成・変容を調査する。なお、本稿掲載の図面において、各山の位置関係を明確にするために、天・多・朝・龍のアイコンを付している。

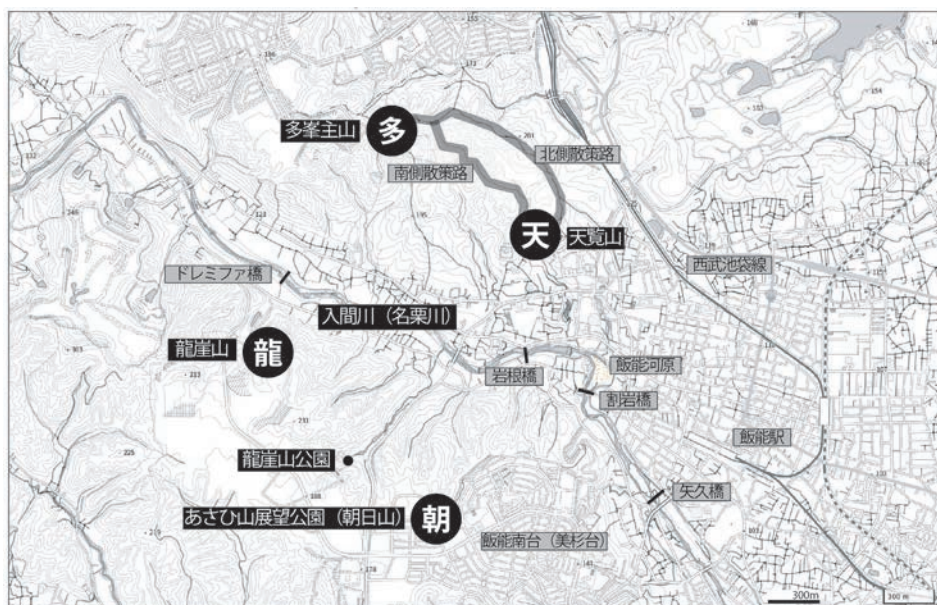


図-2 研究対象地の概略図 国土地理院基盤地図に筆者加筆

表-1 飯能市総合振興計画における散策路に関する項目

策定年	名称	内容
1975年	総合振興計画	・ 散在する観光資源を有機的に結ぶハイキングコースを整備し、道標、休憩所、公衆便所などを設置
1986年	第2次総合振興計画	・ 首都圏自然歩道に関連した各種観光コースを設定 ・ コース拠点に、案内・解説標識等の整備
1991年	第2次総合振興計画後期	・ 首都圏自然歩道等のハイキングコースの適切な維持管理、環境整備 ・ 観光コースの整備における案内・解説標識等の整備
1996年	第3次総合振興計画	・ 自然の回廊計画の観光活用 ・ グリーンフロント拠点の観光やレクリエーション利用の増進 ・ 自然とふるさとふれあいの道の整備促進 ・ 自然観察路の整備推進 ・ 緑と清流のネットワーク構想を推進する体制の確立
2001年	第3次総合振興計画後期	・ 自然の回廊計画の観光活用 ・ グリーンフロント拠点の観光やレクリエーション利用の増進
2006年	第4次総合振興計画	・ 人々の健康志向や癒しの志向に応えウォーキングコースやハイキングコースなどの整備
2011年	第4次総合振興計画後期	・ 健康志向へのニーズに対応した、ウォーキングコースやハイキングコースの整備 ・ 歩きやすさと回遊性を重視し、ハイキングコースや散策コース、観光トイレ等の観光基盤整備を推進
2016年	第5次総合振興計画	・ 市街地を取り囲むように点在する交流スポットをつなぐ「都市回廊空間」を新たに形成 ・ 観光客が安全・快適に楽しむことができるよう、指導標の設置やサイクリング環境の整備、ハイキングコース、観光トイレ等の整備を推進

### 3. 散策路とそれを取り巻く周辺地域の 構想・計画の変遷

#### (1) 散策路の祖型－飯能遊覧地設計 1910-1920年代

明治末年、飯能・池袋間に武蔵野鉄道敷設計画<sup>12)</sup>が具体化した飯能町では、観光開発に着手し飯能遊覧地委員会を設置した。1912(明治45)年には、林学者本多静六を招聘し、遊覧地の企画・立案に関する講演会を開催している<sup>13)</sup>。残されている講演録<sup>14)</sup>からは、天覧山付近を第一区域、多峯主山付近を第二区域とし、それぞれ展望台や名所等の施設整備、散策路の計画<sup>15)</sup>、そして植栽計画について詳細に述べていたことが読み取れる。本多案はその後、地元有志の力でほとんどの項目が実施されたとされる<sup>16)</sup>。この講演録には図面は付されていないが、後年1919(大正8)年に埼玉県の調査に対する回答文書として残されている資料<sup>17)</sup>の付図では、天覧山か

ら多峯主山に至る二本の散策路の存在を確認することができる(図-3)。

同時期1913(大正2)年、入間川を隔て天覧山の向かいに位置する朝日山に明治神宮を誘致する運動<sup>18)</sup><sup>19)</sup>が町を挙げて行われている。山口(2005)の分析に拠れば、他候補地と比べて詳細な計画であり、地形、植栽、景観の特徴を踏まえた具体的な検討がなされた。周知のとおり最終的に明治神宮は代々木の地に決定されるが、この計画で注目されるのが、朝日山に広がる神域へと至る参道の役割を果たす入間川の神橋の存在であり、実現の暁には、天覧山、多峯主山、そして朝日山を最短経路で結ぶ動線が確保されることとなっていた。詳細は3(3)で後述するが、これが後年の架橋の布石となる。

なお、武蔵野鉄道は1915(大正4)年に開通し、加えて高松宮の天覧山登山が報じられたこともあり、東京方面からの来訪者は増加していった<sup>20)</sup>。



図-3 飯能遊覧地略図 引用文献<sup>17)</sup>

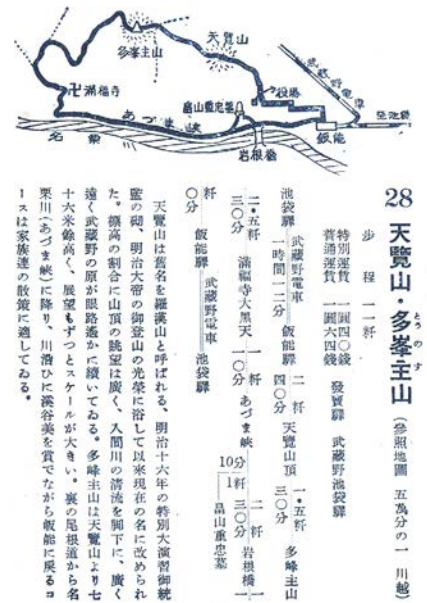


図-4 東京市1940年発行の市民健康路のパンフレットにおける天覧山・多嶺主山のコース案内

## (2) 散策路の定着—都市住民のレクリエーション地の形成（景園地・市民健康路・自然公園） 1930-1960年代

1930年代になると、大都市近郊の低山、緑地、湖沼等を対象としたハイキングが人気の観光レクリエーションとなり、さらに戦時体制下では厚生運動と結びつき、銃後の観光として、官民あげての様々なキャンペーンが実施された（図-4）<sup>21)22)</sup>。

1929（昭和4）年、吾野線の開通以降武蔵野鉄道もマップの発行や割引切符の販売によって、低山登山やハイキングによる誘客に力を入れ、大幅に旅客輸送を向上させた<sup>23)</sup>。

戦前期に発行された武蔵野鉄道による一連のハイキングマップ<sup>24)</sup>（図-5）では、天覧山、多峯主山、入間川（名栗川）左岸を結ぶ定番コースに加え、入間川右岸側の朝日山もコースに含むものもある（図-3中・下）。入間川右岸側への移動については、前述の明治神宮誘致計画で神橋が設置された場所から上流側の岩根橋、あるいは下流側の矢久橋が利用されている。神橋の位置には、1937（昭和12）年に割岩橋という名称の橋の建設計画が浮上し、建設工事が進められたものの台風被害に遭い完成には至らなかった<sup>25)</sup>。

終戦後、1951（昭和26）年、自然公園法の制定により、埼玉県立奥武蔵自然公園が開設（21,839ha）される。これは、戦前の東京緑地計画（1935（昭和10）年）に位置づけられた飯能景園地<sup>26)</sup>を継承するものであり、自然の保護と活用の両立が重視された。市販のガイドブック<sup>27)</sup>で紹介されているコースは、入間川の左岸側の天覧山・多峯主山を回遊するものとなっている。戦後のハイキングブームもあいまって、飯能では多くの観光客を集めた。



図-5 武蔵野鉄道発行のハイキングマップ  
出典：引用文献<sup>24)</sup> 飯能市立博物館所蔵



1970年代後半，埼玉県は，県内の自然公園等を対象に野外レクリエーションの活性化を目的として，「ふるさと歩道」の事業を推進している。県内全20コースのうち2コースが飯能市内で設定され，地名板や解説板の設置等の整備が実施された<sup>28)</sup>。うち1コース（山峡に歴史を訪ねるコース）は，天覧山・多峯主山を巡る定番ルートに加えて，入間川を渡り右岸側に散策路が設定され，川を挟んでのループ状の回遊を促すものとなっている（図-6）。

### （3）散策路の拡張—保全緑地のネットワーク化（ふるさと歩道・市民公園・県民休養地） 1970-1980年代

1975（昭和50）年，飯能市は，総合振興計画基本構想において「十万人都市構想」を掲げた。既に1970（昭和45）年に新都市計画法に基づき線引き（市街化区域と市街化調整区域の区域区分）が行われたが（図-7上），市の方針を受けて1977（昭和52）年，埼玉県は上記構想のための都市開発を可能とする都市計画の見直し，すなわち，一部市街化調整区域の市街化区域への編入を検討し，手続きを進めていた。また，西武鉄道等の民間不動産会社による土地の買収も既に進められていた。これに対し市民側は猛反発し，「天覧山付近の自然を守る会」を結成し，市長選での対立候補の擁立，署名運動，市議会及び県議会への請願等の反対運動を展開した。



図-6 ふるさと歩道 出典：引用文献<sup>28)</sup>

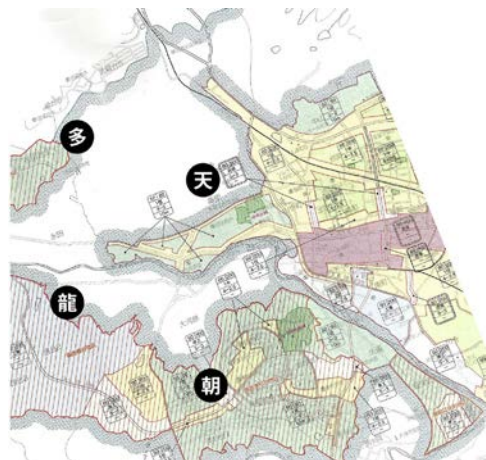
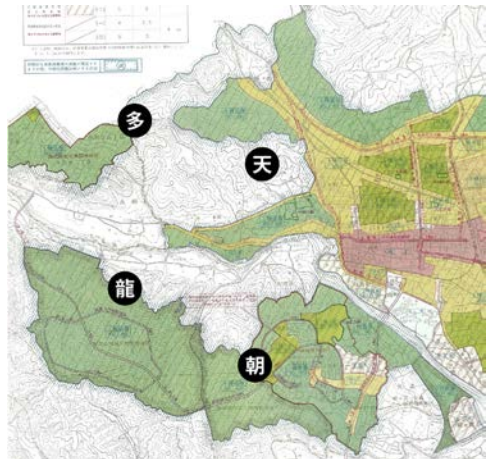
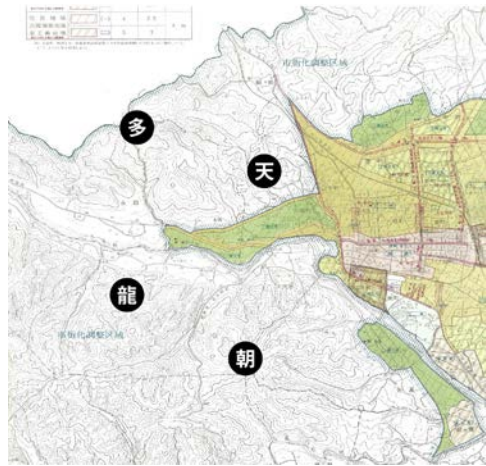


図-7 区域区分の変化  
（上：1978年／中：1995年／下：2020年）  
出典：引用文献<sup>32)</sup> 散策路（北側・南側）の位置を筆者加筆

「天覧山付近の自然を守る会」がその後刊行した書籍<sup>29)</sup>に拠れば、どこまでを市街化調整区域の範囲として維持するのか、その一連の主張の拠り所となったのが、天覧山と多峯主山を結ぶ二本の散策路の存在であった。市民団体側の請願文の主張は、オリエンテーリング等のレクリエーション空間としての広がり確保や動植物（とくに固有種ハンノウザサ）の生態系保全の観点から「西武線西側全域」の保全であったが、市議会における決議では、具体的な範囲は明示されなかった。これに続く県議会への請願文では、「二本の散策路」が明記され、これはそのまま採択された。しかしながら、最終的に西武鉄道側が示した開発計画は、南側散策路（天覧山→見返り坂→多峯主山）は残すものの、北側散策路は完全に開発予定地に含むというものであった。1978（昭和53）年、飯能市都市計画審議会上記開発計画を踏まえた区域区分案を決議し、翌年県は都市計画決定した（当初案の100haのうち24haは市街化調整区域として維持）（図-7中）。

このように飯能市や埼玉県は、都市開発を誘導する一方で、残された自然環境を生かした緑地・公園

整備のための総合的な計画の立案や事業に取り組むことになる。飯能市は「市民公園」を構想し、埼玉県は県内自然公園のレクリエーションの場としての利用施設の整備を促す「県民休養地」を飯能エリアに適用した。1978（昭和53）年、飯能市は市民公園案として、グランドや文教施設が立地する中央公園の建設や、天覧山・多峯主山、そして入間川対岸に位置する朝日山をネットワークさせる計画を公表した。1980（昭和55）年に市から提示された計画案（総面積108ha）（図-8）では、山を巡る散策路のほか、前述の入間川の兩岸を結ぶ神橋／割岩橋の位置には、「吊り橋」の整備が明示された。

一方、埼玉県は1981（昭和56）年、1444.6haを対象にした県民休養地計画基本計画を策定した（図-9）。こちらは前述の市民公園では範囲外であった龍崖山周辺や、天覧山・多峯主山を結ぶ南側散策路以南のエリアも含むものであり、既設の「ふるさと歩道」を幹線に、展望台や広場を整備する事業が盛り込まれた<sup>30)</sup>。

両者の関係を整理すると、基本的にはコンセプト、計画対象範囲、事業内容は重複するものとなってお

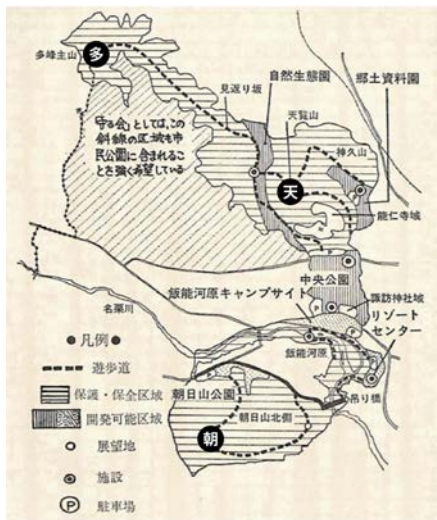


図-8市民公園計画案（1980年）  
出典：引用文献<sup>29)</sup>

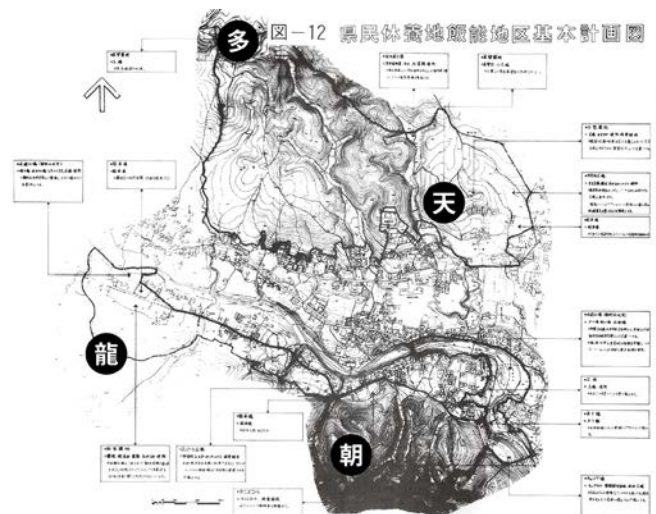


図-9 県民休養地基本計画図（1981年）  
出典：引用文献<sup>30)</sup>

り、「市が国の補助金を受けて用地買収をすすめ、県が諸施設をつくる」<sup>31)</sup>というスキームが構築されていたことが分かる。1982（昭和57）年には予算が措置され、天覧山頂上・中段広場の整備、1985（昭和60）年には念願の割岩橋の架橋が実現し、都市開発が進む中で、残された緑を有効に活用しながら、天覧山・多峯主山を結ぶ既存の散策路の改良や、入間川対岸へのネットワーク拡張という空間像が具現化されたことが確認できる。

#### （４）散策路の再拡張—都市開発との共生（ビッグヒルズ構想・自然の回廊）1990-2010

前節での線引き論争の一因となった西武鉄道による団地開発は、即座に事業化に移されることはなかったが、住宅・都市整備公団による土地買収が進められていた入間川右岸の飯能南台地区（飯能美杉台）（約105ha）、飯能南台第二地区（約49ha）、飯能大河原地区（約105ha）における開発は、「ビッグヒルズ」と命名され、1982（昭和57）年に事業

計画の認可を受け、1989（平成元）年にはまちびらきが行われている。

公団は開発に際し、飯能市と協働で、「レクリエーション空間のあるまちづくり研究会」を設置し、1992（平成4）年には、建築や都市計画等の有識者を著者に連ねた「飯能・ビッグヒルズまちづくり読本」<sup>33)</sup>を発行している。ここでは空間構造やライフスタイルを主題に、当該地の豊かな水と緑を生かし、「水と緑の回廊」「骨格空間」「構造的緑地」といった空間的概念を含む「自然回廊」が提唱された。開発地区外の環境資源（天覧山、多峯主山、飯能河原など）を結ぶ広域的な歩行者ネットワークを形成するものであり、天覧山、多峯主山、朝日山、龍崖山という4山のネットワーク化という空間像が、構想として改めて打ち出されたものと言える（図-10）。

その後、1996（平成8）年に策定された飯能市第3次総合振興計画では、策定過程において、「自然の回廊」計画を含めるかが議論されたが<sup>34)</sup>、最終的には「緑と清流のネットワークづくり」の一項目と



図-10 自然の回廊 出典：引用文献<sup>39)</sup>

して「自然の回廊の整備促進」が記載されるに留まり、根幹をなす空間像としての位置づけは得られていない。1999（平成11）年策定の都市計画マスタープランにおいては、当該地の緑のネットワークを表す用語として「緑の拠点（グリーンフロント拠点）」が使われており、ここでも空間像としての「自然の回廊」の行政計画上の位置づけが落とされたことが推察できる。

住宅団地の開発は、都市再生機構に引き継がれ、2011（平成23）年にはあさひ山展望公園（面積約3.6ha）、2013（平成25）年には周辺散策路とともに龍崖山公園（面積約3.8ha）が新設され、4山を巡る新たな回遊ルートが整備された。これは、標高の低い山裾の土地を結ぶように設定された「ふるさと歩道」のルート（図-6）とは異なり、アップダウンのある本格的なハイキング路（龍崖山コース8km）も含む散策路として提供されている。

一方、西武鉄道は1995（平成7）年に、武蔵丘分譲地の開発計画の事業申請を行っている（72.9ha・2679戸の住宅団地）。これに加えて、市からは、1970年代末の市民活動の末に区分された市街化調整区域内に、小中学校及びアクセス道路（幅員12m）の計画が公表された（図-11）。当計画は、天

覧山と多峯主山を結ぶ北側の散策路の消失をもたらすだけでなく、横断道路による南側散策路の切断を意味するものであった。

これに対して、市民は「NPO法人天覧山・多峯主山の自然を守る会」を設立し、反対運動を展開している。1996（平成8）年、オオタカの営巣が発見されたことも受け、市民団体は「天覧山・多峯主山付近の自然保護推進に関する要望書」を県知事へ提出した。その後関係者による協議が続けられた結果<sup>35)</sup>、当該地域は同年、飯能市環境保全条例により景観緑地に指定され、譲渡や伐採等に対する規制が加えられている（図-12）<sup>36)</sup>。

2005（平成17）年、西武鉄道は、事業採算性や自然保護の面から計画断念を公表し<sup>37)</sup>、市街化区域であった当該地域は、2006（平成18）年に市街化調整区域へ変更、すなわち逆線引きが行われ（図-7下）、2008（平成20）年には、森林保全地域「飯能・西武の森」（77ha）<sup>38)</sup>に指定され、案内図や道標が整備された。また、上記NPO法人は、天覧山裏の緑地について、2009（平成21）年に個人地主より581㎡、2017（平成29）年に西武鉄道より793㎡を買取り（トラスト保全）、積極的な保全活動を展開している。

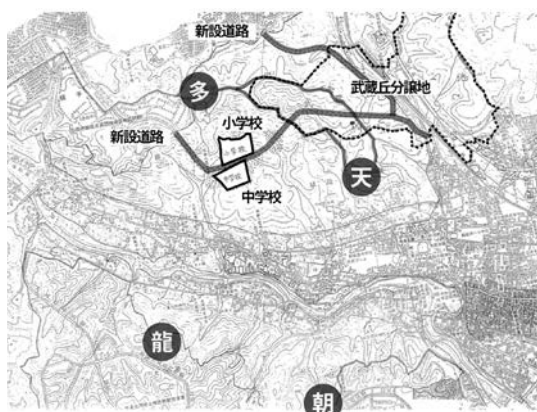


図-11 市街化調整区域内における小中学校及び道路の計画 出典：引用文献<sup>40)</sup>  
散策路・計画道路・学校の位置を筆者加筆



図-12 景観緑地の範囲 出典：引用文献<sup>41)</sup>  
指定区域（点線）・散策路の位置を筆者加筆

#### 4. 考察：散策路と周辺地域の整備・開発・保全との関係

前章では、多峯主山・天覧山と入間川の「2山1川」、あるいはこれに龍崖山・朝日山を加えた「4山1川」の空間構成に即した散策路とそれを取り巻く周辺地域の公園・緑地の構想や計画の変遷を明らかにした。これらは、対象やその内容から以下の3つに整理することができる。まず、散策路を含む地域の将来像の概念や方向性を示した「構想」であり、「遊覧地設計」「自然の回廊」が該当する(A)。次に、対象、方法、プロセス等の実行手段を明確にする「計画」として、散策路を計画対象に含む「ふるさと歩道(県立自然公園)」「市民公園」等(B-1)、散策路を直接の計画対象に含まないものとして、「区域区分(線引き)」「武蔵丘団地計画」等(B-2)が挙げられる。本章ではこれを踏まえ、散策路がこれらの構想・計画において周辺地域の整備・開発・保全に対してどのように機能してきたかを考察する。

##### (1) 空間イメージを視覚化する散策路の整備

散策路を含まない構想(A)・計画(B-1)も、

早い時期に形成された多峯主山・天覧山を結ぶ既存の定番散策路のコース(「遊覧地設計」で構想された散策路が後年整備)を延伸し、より大きなネットワークを形成するような将来像が描かれた。具体的には、定番コースを朝日山へと延伸する市民公園計画案(1980年)、その定番コースから入間川右岸側を回遊させる「ふるさと歩道(県立自然公園)」(1978年)及び県民休養地基本計画(1981年)、そして定番コースと龍崖山、朝日山の4山をネットワークさせる「自然の回廊」(1992年)である。その後、これらの公園・緑地の構想・計画が基盤とした「2山1川」「4山1川」の空間イメージを具現化する散策路の新設・改修、橋の新設、展望施設の設置などの整備事業が実現し、これらを体感できるものとして実体化され、さらにハイキングマップ等を通じより広く周知されていった。

##### (2) 開発計画見直しの一因となり得る散策路の存在

散策路は、本質的に尾根道や谷筋・川沿いといった自然地形を可視化するものであることから、保全・開発のエリアなどの範囲の設定とも親和性が高く、



写真-1 多峯主山からの眺望

散策路を直接的に計画対象に含まない計画（B-2）に対して、その範囲設定を検討する際の材料になり得ると考えられる。

研究対象地においては、天覧山と多峯主山を結ぶ、北側散策路と南側散策路の2本のルートは、開発計画地の範囲や都市計画の区域区分の判断材料となってきた（1979年都市計画決定）。

この区域区分の境界設定は、全面的な市街化を進めたい開発促進側と、レクリエーションや生態系保全の観点からのエリア全域の市街化調整区域化を主張する開発抑止側との折り合いをつけるための妥協の産物として、実体ある空間としての既存散策路が境界として利用されたものであり、必ずしも散策路が緑地保全に対して優位に機能したものとは言えない。とはいえ、後年の「武蔵丘分譲地」の計画に付随する開発側や行政側から提示されていた当該散策路を分断する道路の計画案に対して、計画変更という譲歩を引き出した実績もあり、緑地の空間的なまとまりを維持する上で、一定の抑止力になり得たと解釈することができる。

## 5. 結論

本研究では、大都市近郊に位置する飯能市天覧山を含む「4山1川」の地形的特徴を持つ地域において、近代以降の散策路を含む周辺地域の整備・開発・保全の変遷を明らかにした。

戦前期から高度経済成長期においては、観光地としての開発の一環として「定番コース」が設定・整備された。住宅開発へと都市政策の重心が移されるなか、散策路は空間、政策の両面から宅地と緑地の境界に位置づけられるようになった。90年代に入り環境や景観に配慮した住宅団地開発が進められたこと、地元市民による運動が面的な緑地保全という成果を得たことにより、最終的には「4山1川」の空間構造を際立たせるような散策路のネットワークが強化された。戦前期に形成された大都市近郊の散策路の多くが市街化により消失していくなか、飯能市では、一世紀以上にわたり散策路が空間としても発展的に継承され、構想・計画が描く地域の特徴的な空間像を明確なものにし、ときに地域の環境を悪化・低減させる恐れのある構想・計画に対する抑止力としても機能してきたものといえる。



写真-2 龍崖山からの眺望

飯能市では、2016年に第5次総合振興計画や観光ビジョンにおいて「都市回廊」という新たな都市空間像が示された。これは、本稿の対象地と、周囲の観光レクリエーションエリア(メツァ(宮沢湖)やあけぼの子どもの森公園等)をつなぎ、都市機能と自然環境とが調和するまち、交流を生み出すまちを目指すものである。概念としての「都市回廊」を空間として実体化する上で、これまでの散策路の設定・整備で得られた経験を活かすことができるのではないだろうか。多くの都市が人口的、経済的に縮退してゆくなか、このような散策路とそれを軸とした自然環境の広がり、地域の魅力を向上するための重要な空間的ストックの1つとして再評価されるべきものであると考える。

## 補注及び引用文献

- 1) 品田穰 (1974)：都市の自然史：中央公論社、85
- 2) 散策路事業とは、散策路という空間の整備に加え、テーマやストーリー等により散策という行為への価値付け、事業主体による情報発信・誘客の取り組み(鉄道会社によるキャンペーン、マップ配布、WEBでの周知等)によって構成されるものである。
- 3) 岡村祐・片桐由希子 (2019)：散策路事業における都市ストックの創出と継承の視点：ランドスケープ研究83(3)、288-291
- 4) 文化新聞は、1950年創刊で、埼玉県飯能市及び日高市を主な発行エリアとする日刊の地方紙である。
- 5) パルテノン多摩編 (2002)：郊外行楽地の誕生：ハイキングと史蹟めぐりの社会史：パルテノン多摩、95pp
- 6) 山口敬太 (2013)：近代における奈良・山辺の道の形成とその背景：ランドスケープ研究(オンライン論文集)6(0)、25-32
- 7) 山口敬太・繁田いづみ・川崎 雅史 (2014)：奈良・山辺の道における景観保全の展開とその保全思想：ランドスケープ研究(オンライン論文集)7(0)、1-8
- 8) 片桐由希子・岡村祐 (2017)：東京市・東京鉄道局による「市民健康路」事業の展開：ランドスケープ研究80(5)、493-497
- 9) 神谷由紀子 (2014)：フットパスによるまちづくりー地域の小径を楽しみながら歩く：水曜社、196pp
- 10) 飯能市 (2016)：令和元年版統計はんのう ウェブサイト <<https://www.city.hanno.lg.jp/article/detail/4361>>、2020.4.15 公開、2021.9.17 参照
- 11) 武正憲・伊藤弘他 (2021)：飯能市のエコツーリズムによる市民ガイド養成およびツアープログラム開発手法：ランドスケープ研究増刊技術報告集2021、146-151
- 12) 飯能市郷土館 (2015)：西武鉄道飯能池袋間開通100周年記念特別展武蔵野鉄道開通：飯能市郷土館、14-17
- 13) 飯能市史編集委員会 (1988)：飯能市史通史編：飯能市、511-521
- 14) 飯能遊覧地委員会(1912)：林学博士本多静六君講演：飯能町遊覧地委員会、38pp
- 15) 散策路に関して、以下のように記述されている。天覧山山頂より西に下る坂道に関しては、「松林の中に六尺～九尺の道を走蛇形につくる」、西谷池から富士見台に至る山道に関しては、「西谷池より見返坂を経て富士見台に至るまでは、幽邃なる山路。松林をつくり、所々に山桜、楓をあしらい誘い用にするのがよろしい。両側はドウダン、ツツジ等を補植する必要がある。ここの道は六尺から九尺でよろしい。
- 16) 小松崎甲子雄 (1968)：飯能の明治百年：文化新聞社、125
- 17) 埼玉県土木課 (第一部) (1919)：入間郡飯能町飯能遊覧地公園調査表同郡長ヨリ回答(埼玉県立文書館所蔵)
- 18) 山口輝臣 (2005)：明治神宮の出現：吉川弘文館、112-134
- 19) 山口 前掲書に拠れば、天覧山は1883(明治16)年に明治天皇の行幸があった地としての由緒を踏まえ、明治神宮誘致計画では外苑としての位置づけが与えられていた。
- 20) 小松崎 前掲書、125
- 21) 赤沢史朗他編 (1993)：文化とファシズム：戦時期日本における文化の光芒：日本経済評論社、高岡裕之：観光・厚生・旅行ーファシズム期のツーリズムー、9-52
- 22) 片桐他 前掲書
- 23) 飯能市郷土館 前掲書、29ならびに加藤寛之 (2021)：「奥武蔵」の誕生：地域と大学ー城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要1、4-15
- 24) 図-3には、左から「天覧山(多峯主山)遊覧コース御案内」「飯能天覧山附飯能付近ハイキングコース」「飯能天覧山」の3葉のマップを掲載した。いずれも飯能市立博物館所蔵。年代の記載はないが、1945年2月に休止した天覧山駅が描かれており、それ以前のものと同推察される。

- 25) 地元紙「文化新聞」では、1961年5月から8月にかけて、割岩橋の架橋は1960年代にも地元からの強い要請があったものの実現には至らなかった旨報道されている。
- 26) 茂木慎雄（1939）：東京緑地計画景園地の探勝：都市公園3（2・3），118-131では、飯能景園地について以下のような特徴が述べられている。「飯能町を繞る地帯で天覧山で名栗川，高麗川等の谷を含んでいます。天覧山へは池袋から出る武蔵野線或は八高線東飯能驛が最も近い。山上は好展望臺で，山麓に料亭東雲亭があります。あるいて維新の大蹟能仁寺を訪れ名栗川の谷に臨む飯能の町にお出でなさい。このコースは千數百年の朝鮮移民の村に在る高麗神社や聖天院を結ぶコースと合わせて行はれます（後略）。」
- 27) 例えば、「東京中心特選ハイキング」（1952年，朋文堂），「東京近郊ハイキングコース」（1955年，萬華社）等。
- 28) 埼玉県環境部自然保護課：ふるさと歩道 飯能河原・多峯主山コース
- 29) 天覧山付近の自然を守る会（1980）：緑のまちと市民たちー市民が守った飯能の自然：三一書房，207pp
- 30) 埼玉県環境部自然保護課・財団法人国立公園協会（1981）：県民休養地基本計画策定に関する調査報告書
- 31) 文化新聞1982年4月15日1面「自然の大パノラマ公園化へ」
- 32) 国際地学協会発行（1978・1995・2020）：飯能市都市計画図（首都圏都市計画シリーズ埼玉県）
- 33) 住宅都市整備公団首都圏都市開発本部武蔵丘陵開発事務所・計量計画研究所都市イベント企画会議（1992）：飯能・ビッグヒルズまちづくり読本：住宅都市整備公団首都圏都市開発本部武蔵丘陵開発事務所
- 34) 文化新聞1994年9月2日1面「市・公団が自然の回廊計画 実施踏査し資源再確認 第3次総振の位置づけ検討」
- 35) 経緯は以下のWEBサイトおよび文献に詳しい。NPO法人天覧山・多峯主山の自然を守る会：ホームページ <<http://tenranzan.net/index.html>>，2021.9.10 更新，2021.9.17 参照 日本ナショナル・トラスト協会編（2006）：天覧山・多峯主山 一帯（飯能市）が調整区域に：ナショナル・トラストジャーナル21，16-19
- 36) 景観緑地の区域は，2019（令和元）年度現在119haとなっている。
- 37) 朝日新聞2005年1月22日朝刊埼玉版27面「飯能の宅地開発，西武鉄道が断念「採算・自然保護で困難」」
- 38) 「飯能・西武の森」の範囲は「景観緑地」に含まれ，景観緑地は，西武鉄道所有地の他の民有地と公有地から構成される。
- 39) 折原夏志他：インターネット記事 ビッグヒルズ「飯能：自然の回廊計画」による地域の活性化 <<http://www.uit.gr.jp/members/thesis/pdf/honb/407/407.pdf>>，2021.9.17 参照
- 40) 天覧山・多峯主山の自然を守る会（1996）：埼玉県立奥武蔵自然公園 天覧山・多峯主山付近の自然保護推進に関する要望書
- 41) 飯能市環境緑水課提供「景観緑地指定区域図」



# 鎌倉景園地 の散策路と 緑地保全



図-1 1 六国峠越えコースの紹介 出典：引用文献<sup>1)</sup>

多摩三浦丘陵の北端部は、明治初期までは武蔵と相模の国境、現在は横浜と鎌倉の市界となっている。八州見、十国見といわれた円海山や六国峠など、古くから東京湾ごしの房総半島から相模湾、伊豆半島、富士山までの眺望が得られる名所と知られていた。

この丘陵の景観地の環境を、都市のレクリエーションのインフラとして明確に位置付けたのが「東京緑地計画」である。鎌倉五山とハイキングの好適地であった鎌倉アルプスを擁する地域として、将来の自然公園の候補地である「景園地」に選定され、神奈川県風景地事業により遊歩道などの整備が行われた。

京急湘南電気鉄道では、昭和5(1930)年ごろから三浦半島のハイキングコースの提供をはじめている。鎌倉の景園地には、金沢文庫から能見台跡、六国峠(天園(てんえん))を經由し、永福寺跡の谷から鎌倉市街地に抜け、逗子駅に至る六国峠コース、天園から建長寺の半僧坊社あるいは明月院に至る鎌倉北尾根を縦走する天園(別名鎌倉アルプス)コースなどが整備された。観光案内書では、風景に加え、道標が親切で歩きやすいことが特徴として挙げられており、鉄道会社だけでなく地元の団体も含めた様々なステイクホルダにより、散策路としての整備が進められたことが推測される。

戦後、昭和33(1958)年に策定された首都圏基本計画において、鎌倉景園地は首都圏のグリーンベルトとして設定された近郊地域に包含されたが、高度成長期の開発圧力を抑制することはできず、特に横浜市金沢区、栄区の丘陵斜面では1960年に入ると次々と大規模な宅地開発が行われた。1970年5月6日の朝日新聞東京版の夕刊の記事では「ハイク道ぞたずた一土地開発“死に道”ばかり」として「北鎌倉東慶寺から最明寺跡、十王岩を通して鎌倉湖に抜ける代表的なハイクコース「鎌倉アルプス」は、今泉付近で大規模な宅地造成が進んでいるため断ち切られてしまった。(中略).... ハイクのはずがいつの間にか「こんな家が欲しいわね」という住宅建設下見のコースとなりかねない」と、行楽地案内書や地図の差し替えが追いつかない速さで、ハイキングコースが失われていく状況が報じられている。

古都鎌倉をとりまく緑は、1966から67年にかけて歴史的風土保存区域・特別保存地区、1969年には、前年に策定された第2次首都圏基本計画に基づき、横浜市と鎌倉市にまたがる約1000haが「円海山・北鎌倉近郊緑地保全区域」に指定され、都市住民の「環境保全や保健休養の場を提供する地域」としての位置付けが明示された。

1976年に発行された鎌倉歴史散策<sup>2)</sup>での天園ハ

片桐由希子(2020): エッジシティの豊かな自然からまちの魅力を再考する, 都市パラダイム研究会: 大都市郊外戸建住宅地を住み続ける 横浜湘南エリア・エッジシティのケーススタディ報告, pp.33-36 を加筆修正

イキングコースの紹介は、「前方は海、足下から北方一帯は大きな造成住宅地（今泉付近）」「路の左、金網の向こうは横浜市。古都保存法で守られている鎌倉側と対照的な光景が比較できる」とあるが、70年以降、横浜市においても自然公園の候補地としての景園地を継承するような保全・整備が進められている。横浜市では、1971年に緑地保全と市民の憩いの場づくりを目的に森林の所有者と契約を結ぶ「市民の森」を創設しており、当該地区では、上郷(1972)・釜利谷(1973)・峯(1974)・氷見沢(1977)・瀬上(1979)・荒井沢(1998)・金沢(2011)がその指定を受けている。また、1970年代後半から1990年代前半にかけて整備された金沢自然公園・動物園、環境省の事業である自然観察の森(1986)の整備が進められた。また、開発によって分断されたハイキングコースは、今泉地区や庄戸や桂台地区などの住宅地を起点とする散策路として整備された。また、

環境への意識の高まりから、環境保全や里山保全の市民活動の活動の場となってきた。2012年には、円海山周辺を中心に、周囲の河川や農地、公園などを含めたエリアを「つながりの森」とし、生物多様性を育て、自然を楽しむ場としての活用するためのアクションプランが策定されている<sup>3)</sup>。

近年当該地域では、鎌倉のオーバーツーリズムと周辺の住宅地の住民の高齢化にほる利用状況の変化とともに、2019年の台風では倒木や土砂崩れなどが多数発生し散策路が大きな被害を受けるなど、維持管理に関する課題も変化している。

### 補注及び引用文献

- 1) 野村蘆江(1943): 図説東京附近健民鍛練コース, アトラス社, p.100
- 2) 安田三郎・永井路子・山田諱巳男(1976): 鎌倉歴史散策(カラーブックス), 保育社
- 3) 横浜市環境創造局(2012): 「つながりの森」構想, p.34



写真：天園ハイキングコース

(上 鎌倉市街地への眺望・下左 天園コースの案内 下中 浄明寺地区からの入り口 下右 隣接する住宅地 今泉4丁目(鎌倉市))

# 海外規範事例 と国内展開組 織の関係性か らみた散策路 事業の計画技 術移転の特徴

Characteristics of Technology Transfer in Walking Trail Projects  
Based on the Relationship between Overseas Normative Cases  
and Domestic Deployment Organizations

岡村祐・片桐由希子（2023）：海外規範事例と国内展開組織の関係性からみた散策路事業の計画技術移転の特徴，ランドスケープ研究（オンライン論文集），16，pp.133-140  
上記論文に図版追加

## 1. はじめに

散策路事業は、大都市郊外の自然公園の利用促進を狙いとした遊歩道の整備や、歴史と文化の散歩道に見られるような地域資源のネットワーク化を狙いとしたルートの設定などハード面を重視したことから、市民の健康づくりや観光客の回遊促進など利用のためのプログラム提供といったソフト面を重視した地域的な取り組みへと展開している<sup>1)</sup>。そのなかで、海外事例の理念や計画・運営手法を参照し、当該技術を国内に導入し全国的に展開するという点に着目すると、環境省による東海自然歩道等の「長距離自然歩道」<sup>2)</sup>、全国各地で散策路が整備された旧建設省の「ウォーキング・トレイル事業」<sup>3)</sup>といった各省庁の事業をベースとしたものや、「フットパス」<sup>4)</sup>、「クアオルト健康ウォーキング」<sup>5)</sup>、「オルレ」<sup>6)</sup>、「ロングトレイル」<sup>7)</sup>といった国内への導入を図る民間組織や、基礎自治体あるいは地域組織の取り組みから全国展開してきたものが存在する。

散策路事業以外の観光・レクリエーションのプログラムで、事業の理念や地域特性を踏まえたコンテンツの作成、サービスの組み立てについて、海外事例から技術的な移転を行なったものでは、野外博物館エコミュージアム<sup>8)</sup>や分散型宿泊施設アルベルゴ・ディフーズ<sup>9)</sup>などが挙げられる。これらの海外事例に由来する取り組みに関しては、既往研究とともに、関係団体のウェブサイト等の広報媒体によって、規範となった海外事例の紹介、取り組みの経緯や内容と組織・体制の構築といった基本的な計画技術<sup>10)</sup>の移転（以下、技術移転と表記）の状況が明らかにされている。一方、技術移転の手法に関しては、萩市でのエコミュージアムの取り組みをモデルとした海外への観光開発技術の移転について、その手法と成果を検証した村上ら<sup>11)</sup>の研究があるが、移転先としての日本国内の社会的な状況や、地域資源への適応という視点から、技術移転の内容や導入・展開のプロセスについて論じたものはない。

以上の背景を踏まえ、本研究では、海外事例に由

来する散策路事業における技術移転に着目し、海外事例と日本国内での展開組織との関係性から散策路の計画技術（第3章で詳述）の特徴を明らかにし、当該事業を継続的な取り組みとするための技術移転の手法を考察することを目的とする。

## 2. 研究方法

### (1) 研究対象

前章でも触れたとおり、海外事例を参照し国内に導入され、広く展開されている散策路事業は複数存在するが、本研究では、海外事例（以降、海外規範事例）と国内での展開組織との間に明確な関係性が確認できた「フットパス」（英国パブリック・フットパスと日本フットパス協会）、「オルレ」（済州オルレと九州オルレ認定地域協議会）、「クアオルト健康ウォーキング」（ドイツ気候性地形療法と日本クアオルト研究所）の3事例を対象として選定した。各事例の概要は以下のとおりである。

#### 1) フットパス

英国におけるパブリック・フットパスは、法に基づく「歩く権利」が認められた道路であり、英国民に田園地域での余暇活動の場を提供し、英国における歩く文化の発展に寄与してきた<sup>12)</sup>。パブリック・フットパスの多くは農地や山林など私有地に属するが、総距離は全英で約22万km、うち17万kmは徒歩のみ通行可能な「フットパス」である。国指定のナショナルトレイルは全長約3800kmに及ぶが、それ以外は地域・都市レベルのパブリック・フットパスとして、網の目のように全国に広がっている<sup>13)</sup>。

国内展開組織である日本フットパス協会は2009年に設立され、事務局を町田市観光コンベンション協会が務め、2023年3月時点で14の自治体会員、45の団体会員が所属し<sup>14)</sup>、会員間の交流、非会員へのフットパスの普及に取り組んでいる。

## 2) オルレ

韓国済州島の済州オルレは、サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼の道から着想を得た徐明淑氏が、社団法人済州オルレを設立し、2007年に最初のコースを整備し、2012年に完成した散策路事業である。現在島を一周する21の正規コース（計346.5km）と離島等を巡る5の追加コースが設定され、済州島を代表する観光コンテンツとして国内外の来訪者を惹き付けている<sup>15)</sup>。

日本では、九州全域と宮城県内でオルレが展開されているが、本稿では、先行事例であり、広域的に展開する九州オルレを対象とする。国内展開組織に相当するのは九州オルレ認定地域協議会であり、2012年に当協議会構成員である自治体が提供する4コースからスタートし、数次に渡るコースの追加を経て、現在は17コース17自治体（最大時21コース20自治体）となっている。

## 3) クアオルト健康ウォーキング（気候性地形療法）

ドイツでは、クアオルトと呼ばれる公的な医療保健が適用される療養地が国によって指定され、医療機関、各種施設、それらの周辺環境が整備されている。クアオルト医学（療養地医学）の一つに、少ない運動リスクで運動効果を高める運動療法「気候性地形療法」があり<sup>5)</sup>、地域によっては、この気候性地形療法に基づく徒歩運動を行う場として専門家により鑑定を受けたコースが設定されている。

主たる国内展開組織は、上山市での気候性地形療法の導入や、温泉クアオルトを目指したまちづくりの実績を踏まえて設立されたクアオルト研究所である。研究所は、気候性地形療法に基づく徒歩運動に準ずる「クアオルト健康ウォーキング」の普及を図り、石川県珠洲市、岐阜県白川村、大分県由布市など、各自治体の健康増進施策の一部として、20自治体で提供され、全国的な展開をみせている<sup>16)</sup>。

## (2) 調査・分析方法

本研究では、第3章において、散策路事業に関する報告書やガイドラインに基づき散策路事業の計画技術の要素を明確にする。

次に、第4章から6章では、選定した事例における国内展開組織の取り組みについて、組織事務局へのヒアリング調査、調査時提供資料及び、既存の文献資料の調査に基づいて整理する（表-1）。ヒアリング調査は、半構造化インタビューの形式で、散策路事業の導入の目的と経緯、活動を展開するための体制・仕組みづくり、活動を支えるための社会的な位置付けの3点に関する考え方と取り組みの状況について、海外規範事例の計画技術及び関連組織との関係性を含めて情報収集を行った。海外規範事例については、既存の文献や組織の公式ホームページ（HP）等を用いて情報を収集し、「オルレ」については、ヒアリング調査も実施した。

上記調査で得られた情報に基づき、4章ではフットパス、5章ではオルレ、6章ではクアオルト健康ウォーキングに関して、事例ごとに海外規範事例、国内展開組織、国内展開先との関係性を交流、計画技術の提供・参照という点で記述・図化し（図-1～3）、さらに、前述した散策路の計画技術の要素に沿って、国内事例と海外規範事例との比較分析を行う（表-3）。この分析結果を踏まえて、考察（第7章）では、海外規範事例と国内展開組織との関係性に基づき、各散策路事業の性格付けを行い、実際に導入された計画技術の特徴を明らかにし、結論（第8章）では、当該事業を継続的な取り組みとするための技術移転の手法を考察する。

## 3. 散策路事業の計画技術

散策者に対するハード・ソフト両面にわたる環境やサービスの提供、そして運営に関する持続的な仕組みなど、散策路事業の体系的な技術移転という本研究の関心に基づき、計画技術の要素を把握するこ

とを試みた。国内への散策路事業の導入を見据え、海外事例を体系的に整理した「ウォーキング・トレイルのみちしるべ (1997)」<sup>35)</sup>、国内のフットパス導入先進地域の事例を紹介し、フットパスコースの作り方の提示した「フットパスによるまちづくり」<sup>4)</sup>、ロングトレイルシステムの構築を試みた「ロングトレイルの維持管理・運営システム構築の考え方」<sup>36)</sup>を参照した結果、散策路事業の計画技術の要素として①道路施設、②案内システム、③運営・マネジメント、④資金確保、⑤法制度上の位置づけの5項目に整理することができた(表-2)。

①道路施設は、散策空間の物的環境に関する要素であり、Aネットワーク計画(コース設定)及びB道路環境の小項目に区分した。②案内システムは、散策者の利便性や安全性向上に資する要素であり、A地図・ガイドブック、Bガイド、C案内標識の小項目に区分した。③運営・マネジメントは、散策路の日常的な管理や普及の取り組みと、それらを支える仕組みであり、Aボランティアの育成・運用、B安全管理、Cイベントの開催の小項目に区分した。④資金確保は、空間の整備や運営に関する財源に関する要素であり、⑤法制度上の位置づけは、当該散策路事業が依拠する法制度や社会的規範に関する要素である。

表-1 ヒアリング調査の概要及び主な参考資料

フットパス	海外	<文献調査> ランブラーズ協会 HP <sup>17)</sup> / Walkers are Welcome HP <sup>18)</sup> / 平松 (1999) <sup>12)</sup> / 重松ら (1993) <sup>13)</sup> / 塩路 (2016) <sup>19)</sup>
	国内	<ヒアリング調査> 町田市観光まちづくり課 (東京都町田市) <sup>20)</sup> 日本フットパス協会理事・事務局 (東京都町田市) <sup>21)</sup> <文献調査> 日本フットパス協会 HP <sup>14)</sup> / 神谷ら (2014) <sup>4)</sup> / 日本フットパス協会提供資料 <sup>22)</sup>
オルレ	海外	<文献調査> 済州オルレ HP <sup>15)</sup> / 小笠原 (2015) <sup>23)</sup> / 安 (2019) <sup>24)</sup> <ヒアリング調査> 社団法人済州オルレ事務局 (韓国済州道西帰浦市) <sup>25)</sup>
	国内	<ヒアリング調査> 九州観光機構/九州オルレ認定地域協議会事務局 (福岡県福岡市) <sup>26)</sup> <文献調査> 九州オルレ HP <sup>27)</sup> / 李 (2019) <sup>6)</sup> / 九州観光機構提供資料 <sup>28)</sup>
クアアールト健康ウォーキング	海外	<文献調査> 小関ら (2006) <sup>29)</sup> / 小関ら (2012) <sup>5)</sup> / ドイツ治療スパ協会 (2021) <sup>30)</sup>
	国内	<ヒアリング調査> 日本クアアールト研究機構事務局 (山形県上山市) <sup>31)</sup> 上山市温泉クアアールト協議会 (山形県上山市) <sup>31)</sup> 上山市市政戦略課クアアールト推進室 (山形県上山市) <sup>32)</sup> <文献調査> 日本クアアールト研究所 HP <sup>16)</sup> / 太陽生命クアアールト健康ウォーキング HP <sup>33)</sup> / 小関ら (2012) <sup>5)</sup> / 上山市及び小関氏提供資料 <sup>34)</sup>

表-2 散策路事業の計画技術の要素

大項目	小項目	ウォーキング・トレイル研究会 (1997)	神谷ら (2014)	環境省 (2023)
①道路施設	A. ネットワーク	ネットワーク計画	フットパス・コースをつくる フットパス・拠点を整備する	路線設定と道づくり 拠点施設の整備・運営
	B. 道路環境	舗装と環境計画	<該当なし>	<該当なし>
②案内システム	A. 地図・ガイドブック	地図・ガイドブック	フットパス・マップをつくる	データブックとマップブックの制作・販売
	B. ガイド	ガイドの養成・活動内容	おもてなしの体制を整える	<該当なし>
	C. 案内標識	案内標識	フットパス・サインを整備する	<該当なし>
③運営・マネジメント	A. ボランティア育成・運用	管理主体とボランティア	<該当なし>	運営団体の設立 地域連携による管理 運営体制の構築
	B. 安全管理	非常連絡・救急体制	<該当なし>	歩道状態把握のための 管理台帳 危機管理体制の構築
	C. イベント開催	イベントの運営・PR	フットパス・ウォークを開催する	
④資金確保		道路整備の補助金・民間財源等	<該当なし>	運営団体の資金調達
⑤法制度上の位置づけ		<該当なし>	<該当なし>	長距離自然歩道 (環境省)

## 4. 事例1：フットパス（国内展開組織：日本フットパス協会）

### （1）海外規範事例と国内展開組織の関係性

日本フットパス協会は2009年2月に創設されたが、設立発起団体となる北海道黒松内町、山形県長井市、東京都町田市、山梨県甲州市（旧勝沼町）をはじめ国内複数地域では、協会の設立以前より、地域づくりの手段として、民間組織の主導による英国パブリック・フットパスに着目した散策路事業が実施されていた<sup>4) 37) 38) 39) 40)</sup>。日本フットパス協会が設立以来重視しているのは、会員である自治体や団体間の交流であり、年1回の全国大会を開催している。海外規範事例との関係に関しては、協会の事務局の中核を担ってきた町田市のフットパスのメンバーを中心に、設立当初に英国側のカウンターパートを模索するなかで、英国フットパスに関わるナショナル・トラスト、ランブラーズ協会、あるいはWalkers are Welcome (WaW)<sup>41)</sup>との交流が始まり、設立総会や大会での招待講演や現地訪問を経て、個人・組織としての信頼関係を築いた。特に、WaWのキーパーソンの下には日本の多くのフットパス関係者が訪問していたが、2018年にはWaWの会長らが訪日するなど双方向の関係が築かれ、お互いに認め合う、いわばカウンターパートのような存在になったと、日本フットパス協会理事の神谷由紀子氏は評している<sup>21)</sup>。

### （2）導入された計画技術の特徴・海外規範事例との比較

散策路事業としての具体的な計画技術に関しては、日本フットパス協会が、「会員民主制」（神谷ら、2014）を謳っているように、協会自体が方針や施策を示すことはなく、会員の各地の取り組みに依拠するものとなっている。

表-3に示すとおり、計画技術の要素別に海外規範事例と比較していくと、まず、①道路施設に関して、英国では、いかなる道路幅員、舗装の道でもパ

ブリック・フットパスになり得るが、土地所有者や占有者には耕作制限や歩行支援装置（木戸や踏み板等）の設置義務が課せられ、自治体には路面上の植生管理が求められるなど、歩く権利を守るためのしくみが設定されている<sup>12)13)</sup>。これに対し、日本フットパス協会では、「森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径（こみち）【Path】<sup>13)</sup>」という機能面に関する定義のみを示し、整備状況や距離、ネットワークなど空間的要件は示していない。

②案内システムも同様に、日本フットパス協会としての方針・施策は存在せず、各地域の取り組みに依拠している。英国では、自治体にはパブリック・フットパスの位置を明示した確定図の作成や公開が法律で義務付けられ、英国陸地測量部 [Ordnance Survey] によってパブリック・フットパスの位置を示した公的な地図が発行される。案内標識（サイン）については、Right of Wayの種別ごとに色が決められており、地方自治体には、一般道からパブリック・フットパスに入る地点における道標設置が義務

付けられているが、パブリック・フットパス内の案内標識やガイは、地域固有の取り組みに依拠している<sup>12)13)</sup>。

③運営・マネジメント、④資金確保、⑤法制度についても、日本フットパス協会としての方針・施策は存在せず、地域ごとの取り組みとなっている。日本フットパス協会の将来活動イメージを記した神谷ら（2014）<sup>4)</sup>は、「目標はナショナルトラスト」であり、会費や寄付を原資に「最終的には資産を持てる組織になってほしい」としているが、現段階では、英国のランブラーズ協会やナショナルトラストのような、資産の保有や権利を主張するといった具体的な活動は行われていない。



図-1 フットパスの技術移転の関係者相関図



写真-1 パブリック・フットパスの状況 (町田市)  
 左上: フットパスの拠点小野路里山交流館/右上: 未舗装の道  
 左下: 環境保全地域を通り抜けるフットパス/右下: 案内サイン



## 5. 事例2：オルレ（国内展開組織：九州オルレ認定地域協議会）

### （1）海外規範事例と国内展開組織の関係性

日本へのオルレの導入は、2011年に九州観光推進機構（現九州観光機構）と社団法人済州オルレの業務提携に始まる。これを推進したのが機構スタッフの韓国女性である（その後、済州オルレ日本支社長の任に就く）<sup>6)</sup>。韓国からのインバウンド客誘致を期待する機構が旗振り役となり、その後オルレコースを有する自治体から構成される九州オルレ認定地域協議会が組織されている。協議会は、済州オルレに対して、オルレのブランド使用料として毎年100万円を納め、協議会は、自治体からの会費収入（40万円）で運営され、協議会の運営事務局（2022年度はみやま市）、広報、（同唐津市）国内向けPR（同佐伯市）、海外向けPR（同南島原市）については参加自治体間での持ち回り制で分担し、機構は事務局補佐および経理を担当している<sup>26)</sup>。

九州オルレでは、オルレの特徴である散策ルートの設定条件や案内標識やグッズなどに関するデザインに関して海外規範事例である済州オルレによる厳格な品質・ブランド管理が行われている。散策ルートのコースは、道幅や舗装や人工的な設置なども含む散策路の環境について、済州オルレ職員による厳格な審査を経る必要があり、一度認定されたとしても、各コース2年に1度、更新のための審査がある。協議会では、済州オルレでは明文化はされていない審査の視点について「全般」「景観」「危機回避」「公共性」「その他」などに分類された25項目の独自の予備的なチェックポイントとして整理し、助言を行っている<sup>26)</sup>。

### （2）導入された計画技術の特徴・海外規範事例との比較

①道路施設に関しては、済州オルレでは、散策路としてのコース設定要件として、表-3に示すとおり、できるだけ古道を使いアスファルト舗装の道は

通らない、環境へ配慮するなど6項目が設定されている。上記のとおり日本国内でもこの要件が適用される。また、済州島ではオルレ専用の観光案内所の設置、島内を周遊する公共交通バスとの連携、散策者が利用できるトイレの確保など、散策のためのインフラが整えられていることが魅力要素の

一つとなっているが、九州オルレではルート上の施設の協力など部分的な対応にとどまっている<sup>42)</sup>。

②案内システムに関して、済州オルレでは韓国語、日本語、英語に対応したガイドブック（マップ）の販売・配布や、散策路沿いには野生馬「カンセ」をモチーフにした標識や青とオレンジのリボンによる案内サインの設置によって、誰もが安心して散策できる環境を提供している<sup>23)24)</sup>。九州オルレでも同様に、全コースを統合した冊子タイプの地図と各コースを所管する自治体や観光組織等が作成するリーフレットタイプの地図が発行されている。コース上の案内サインも、済州オルレ同様のリボンや「カンセ」の標識が設置され、済州オルレに馴染みのある韓国からの散策者がストレスなく利用できるようになっている。ガイドについては、済州オルレでは、「オルレアカデミー」で教育・育成されたボランティアがその任に当たるが、九州オルレではガイドの育成は自治体ごとに行われるものとなっている<sup>26)</sup>。

③運営・マネジメントに関しては、済州オルレでは、オルレを守る人を意味する「オルレジキ」が、それぞれ割り当てられたコースの維持保守の任務にあたるボランティアをベースとした散策路の整備や維持管理の仕組みが構築されている。さらに、清掃活動を兼ねたクリーンオルレが、毎月第2土曜日に実施されている<sup>23)24)</sup>。九州オルレでは、運営面では依然として、各地の散策路提供者である行政の役割が大きい。済州オルレのような、展開組織による統一されたボランティアの育成と活用の仕組みについては、勉強会が行われたという段階である（2022年1月）<sup>28)</sup>。

年1回のウォーキングフェスティバルは、済州オルレ及び九州オルレの両者で実施され、とくに済州

オルレでは散策路沿いの住民と国内外からの訪問者との交流機会となっている<sup>23)24)</sup>。

④資金確保については、済州島では個人や法人からの寄付、上記の案内サイン等を生かした商品などデザイン性の高いグッズの販売、韓国本土企業による1社1オルレによる地域ビジネス創出など、マネ

タイズの仕組みが整えられている<sup>23)24)</sup>。一方、九州オルレでは、上記の通り行政主導の取り組みであり、民間企業も含めたマネタイズの仕組みは構築できていないのが現状である<sup>27)</sup>。なお、双方とも散策路事業に関する⑤法制度上の位置づけはない。

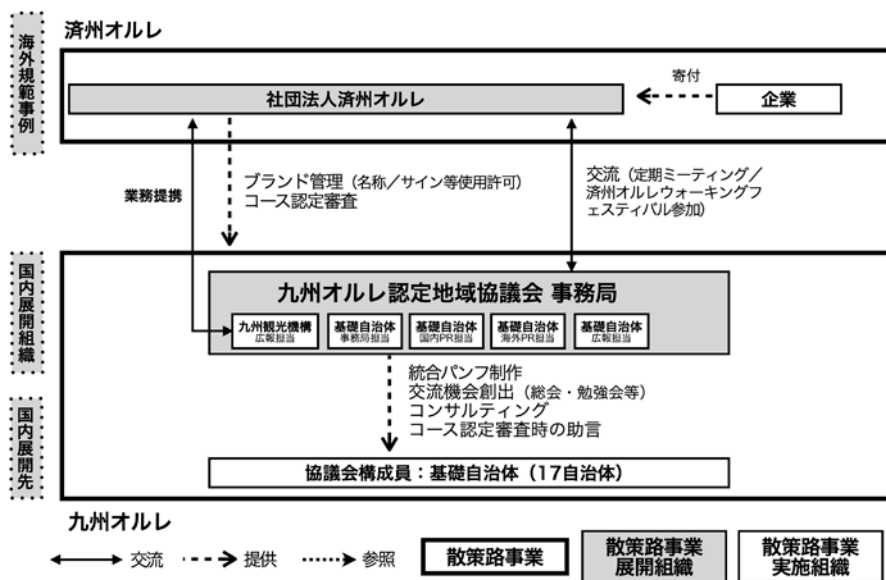


図-2 オルレの技術移転の関係者相関図



写真-2 オルレの状況 (九州各地)  
左：回遊を促すスタンプラリー／中：展望台 (ビューポイント) 右：既設の自然歩道

## 6. 事例3:クアオルト健康ウォーキング(国内展開組織:クアオルト研究所他)

### (1) 海外規範事例と国内展開組織の関係性

気候性地形療法を取り入れた日本国内での散策路事業の展開には、上山市が先行的取り組みとなる。上山市では2008年ごろからドイツにおける温泉療養地づくりを参照し、気候性地形療法プログラムの導入や観光商品の造成、まちづくりの指針の策定など、各種施策を展開してきた<sup>43)</sup>。気候性地形療法の散策路については、ミュンヘン大学気候学のアンジェラ・シュー教授の鑑定を受けた8コース、それに準ずる「クアの道」9コースが整備され、専門ガイドが案内する「毎日ウォーキング」が提供されている(上山市住民は参加無料)。

この上山市での実績を足がかりに、全国展開の試みがなされ、滞在型健康保養地の整備を目指す自治体から構成される「クアオルト協議会」、これを学術的に支援する研究者の集まり「クアオルト研究機構」、そしてクアオルト健康ウォーキングの普及を主目的とした「株式会社日本クアオルト研究所」が2016年に設立された<sup>16)</sup>。「日本クアオルト研究所」は、市職員として上山市での一連の取り組みを担当した小関信行氏が、退職後に設立したものであり、国内展開組織として、各地でのコース(=クアの道)の認定やガイド養成、クアオルト構想の策定などの実務的な事業を支援し、その品質の担保に関与している。

### (2) 導入された計画技術の特徴・海外規範事例との比較

①道路施設の計画技術として、ドイツの規範事例では、医学的エビデンスに基づき、コース設定の要件として、「4)異なった海拔高度の場所に歩道を設置する」「6)日陰を多くする」等の気候条件をコントロールする要素や「7)歩道の表面を多様にする」「9)歩道の途中に、短時間の休憩所をつくる」等の運動をコントロールする要素など計12項目が設定

されている(表-3)<sup>44)</sup>。ドイツ治療スパ協会30)によれば、現在ドイツ国内における34のクアオルト(健康保養地)で、この気候性地形療法に資する散策路コース(Heilklima-Wandern)が提供されている。著名な高原リゾート地であるガルミッシュ=パルテンキルヒェンもその一つであり、地域内に32のコースが整備されている<sup>5)</sup>。

一方、日本では上山市以外にシュー教授の鑑定を受けたコースはないが、「日本クアオルト研究所」が、日本の風土や日本人の特性に合わせて調整した10項目の要件に沿って、全国20自治体69コースを「クアの道」として認定している(2023年4月現在)。また、気候的な条件を満たした健康保養地を前提とした気候性地形療法について、既設の公園施設などを活用した「街なかスタイル健康ウォーキング」<sup>45)</sup>といった、日常的に利用できる都市型プログラムへの応用は日本独自の計画技術である。また、散策路の前提となる保養地に関して、ドイツではドイツスパ協会(Deutscher Heilbäderverband)により、クアオルトの健康保養地や自然治癒療法などに関する定義や品質が設定されているが<sup>46)</sup>、日本クアオルト協議会では健康保養地としての地域づくりの目標として、健康、医療、環境、景観、環境・産業、計画・連携の6領域60項目からなる「日本型クアオルト指標」を提示している<sup>47)</sup>。

②案内システムとして、ドイツでは、ガイドは医療もしくは運動の資格を持つ気候療法士が行うことが決められている。これに対し、日本クアオルト研究所は、気候性地形療法や運動生理学を学び試験に合格した認定セラピスト(有償ガイド)だけではなく、実践指導者(有償ガイド)や普及員(無償ガイド)というカテゴリーを設け、ガイドの裾野を広げる仕組みを構築している。また、地図、総合案内板、方向指示板も、研究所の監修により、クアの道のための共通の様式で制作されている<sup>33)</sup>。

日独間での大きな違いは、③運営・マネジメントと⑤法制度上の位置付けである。ドイツの気候性地形療法ウォーキングは、単独の散策路事業ではなく、

「クアオルト」に指定された地域において、医学や運動生理学のエビデンスに基づき提供される、治療メニュー（プログラム）の一つであり、医療保険の対象になる。

一方、日本国内では、上山市の構想のようにまちづくりへの位置付けがあっても医療外活動となる。これに対し、上山市でのクアオルト健康ウォーキングに健康チェックや食事指導などを組み合わせた、厚生労働省が進めるスマート・ライフ・ステイ（宿泊型新保健指導）<sup>48)</sup>を導入するなど、ヘルスツーリズムのコンテンツとしての信頼性を高めるための取り組みも進められているほか、2020年からは、クアオルトのプログラムへの参加や日常的なウォーキングなどをポイントの対象と位置付けた「かみの

やま健康ポイント事業」が導入されている。

④資金確保に関しては、クアオルト健康ウォーキングは、主に自治体による健康づくりの取り組みや、企業の健康経営に向けての活動の一環として実施されているため、コースなどの基盤を整備し、人材を確保するなど、事業を継続するための予算の確保が重要となる。クアオルト研究所では2016年から保険会社太陽生命との連携し、開始した「クアオルト健康ウォーキングアワード」は、受賞自治体に対して、コース調査、「クアの道」の認定、看板・標識の設置、ガイド養成などの人材育成、ウォーキングイベントの実施の、ノウハウや資金面での支援を行うことで、国内展開先での活動の持続発展につなげている<sup>33)</sup>。

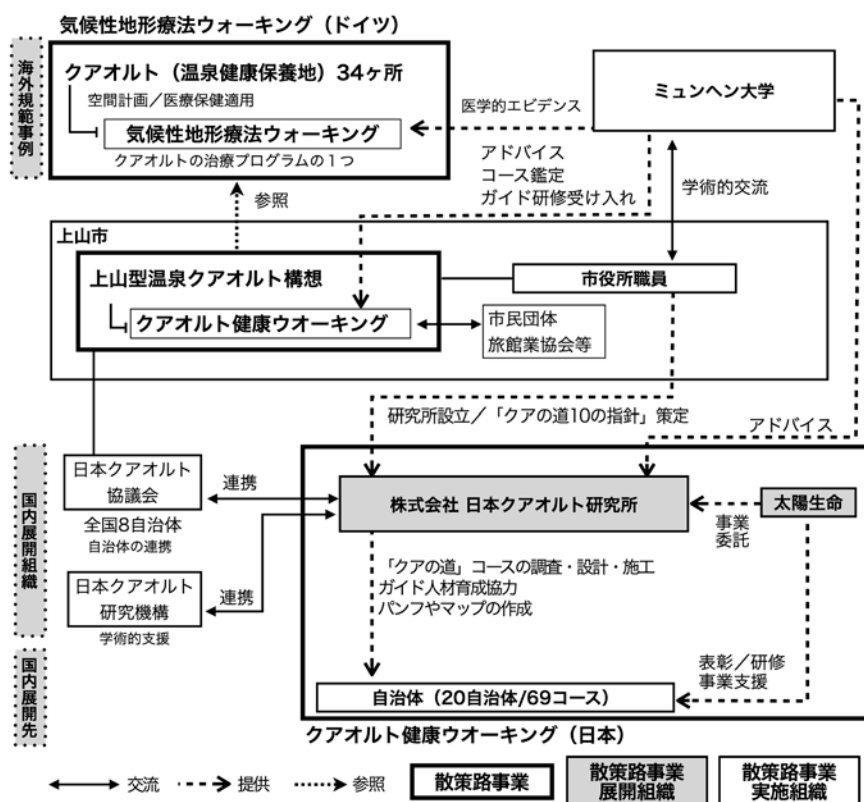


図-3 気候性地形療法（クアオルト健康ウォーキング）の技術移転の関係者相関図

表 - 3 調査対象事例の散策路事業に関する  
計画技術の概要

		フットパス	
		イギリス	日本
関連する主な団体		ナショナル・トラスト ランブラーズ協会 Walkers are Welcome (WaW)	日本フットパス協会 (14 自治体、45 団体加盟)
コース数・距離など		全英22万km (うちFootpath 17万km)	データなし
① 道路施設	A ネットワーク (コース設定)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 散策路としての空間的要件 (幅員や舗装等) はないが、法によりRight of Wayの種類 (Footpath: 徒歩のみ通行可 / Bridleway: 徒歩, 乗馬, 自転車のみ通行可 / Byway: 主に徒歩, 乗馬, 自転車で通行可だが, 農林業者の自動車通行可) や, 国立公園・田園アクセス法に基づく確定図 (definitive map) への記載や修正など, 歩く権利を守るための手続きが規定</li> <li>■ 15本のナショナルトレイルの他, 地域ごとにパブリック・フットパスがネットワークされている</li> </ul>	<p>具体的な空間的要件は示されていないが, 以下の定義が示されている</p> <p>「森林や田園地帯, 古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径 (こみち)【Path】」</p>
	B. 道路環境整備	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 耕作制限や木戸や踏み板等設置の義務 (土地所有者・占有者)</li> <li>■ 路面上の植生管理義務 (道路当局)</li> <li>■ 道の点検, ゲートの設置, 植生管理等の日常的維持管理 (ランブラーズ協会 / WaW)</li> </ul>	■ 国内展開組織としての方針・施策なし (地域ごとの取り組み)
② 案内システム	A. 地図・ガイドブック	■ パブリック・フットパス地図の発行 (英国陸地測量部)	■ 国内展開組織としての方針・施策なし (地域ごとの取り組み)
	B. ガイド	■ 地域ごとの取り組み (ボランティア活用など)	
	C. 案内標識	■ 一般道からパブリック・フットパスに入る地点に道標設置 (道路当局)	
③ 運営・マネジメント	A. ボランティア	■ ボランティアポータルサイト「Assemble」を設置し, ボランティアの登録や情報共有 (ランブラーズ協会)	■ 全国大会開催 (年1回) / 地域毎のイベント
	B. 安全管理	■ 地域ごとの取り組み	
	C. イベント開催	■ ウォーキングイベント (ナショナル・トラスト / ランブラーズ協会 / WaW)	
④ 資金確保		■ 散策路の維持管理に対する公的補助	■ 国内展開組織としての方針・施策なし
⑤ 法制度上の位置づけ		■ 通行権の法的保証	

オルレ		クアオルト健康ウォーキング	
韓国済州島	日本	ドイツ	日本
社団法人済州オルレ	九州オルレ認定地域協議会 九州観光機構	ミュンヘン大学	株式会社日本クアオルト研究所 太陽生命
島内1周21コース(計350km) +離島5コース	九州各県 18 コース (平均 11.5km)	全国 34 のクアオルト(温泉療養地) で提供	20 地域 69 コース
1) 出来る限りアスファルトは避ける 2) 失った古道をさがす 3) 新しい道を作る際は環境に優しい方法。人工的設置物も抑制する 4) 新しい道の幅は1mを超えない 5) 新しい道を造成・補修する時は、軍・民など様々な人力を参加させる 6) 私有地はオルレが所有せず、通過できるよう調整する	■左同  その他、審査対策用に、「全般」「景観」「危機回避」「公共性」「その他」25項目の独自のチェックポイントを設定	【気候性地形療法 歩道の要件】 1) 30kmの歩道 2) 種々の長さの異なった歩道を整備 3) 異なった勾配の歩道を用意する 4) 異なった海拔高度の場所に歩道を設置する 5) 歩道は生活道路から十分離れたところに設置する 6) 日陰を多くする 7) 歩道の表面を多樹にする 8) 治療用歩道は、患者の集合地点から比較的近い場所に設置する 9) 歩道の途中に、短時間の休憩場を 10) 休息所を作る 11) 部分浴施設を作る 12) 正確な地図を作る  ※前提として、クアオルトの健康保養地や気候性地形療法に関する定義や品質を設定	【クアの道10コース設定の指針】 1) 地域の起点となる場所から、東西南北の山を利用 2) 近くの山にある神社の参道や農道、林道を利用 3) 基本的に舗装されていない道 4) 上りの勾配を利用 5) 上りは、涼しくなるよう森の中や林のなかのコースを選択 6) 所々に、眺望がひらけ自分の住んでいる所や遠くの場所を眺めて、心が解放される場所を探す 7) 暑さを感じる場所の近くに水場がある 8) コース幅は、二人が並んで歩ける幅があれば最適 9) 同じ道を戻るのではなく、ぐるっと回ってスタート地点に戻るようなコース 10) 体力に合わせて歩けるコース  ※健康保養地としての地域づくりの目標として6領域60項目からなる「日本型クアオルト指標」を設定 ■国内展開組織としての方針・施策なし
■ボランティア活動による維持管理/オルレチギ(オルレを守る人)による担当コースの維持保守/クリーンオルレ(定例の清掃活動) ■観光案内所の設置、島内を周遊する公共交通バスとの連携、散策者が利用できるトイレの確保等のインフラ整備	■国内展開組織としての施策なし(地域ごとの取り組み)	■地域(クアオルト)ごとの取り組み	■国内展開組織としての方針・施策なし
■ガイドブック ※外国人向け(日本語・英語)は無料	■統合パンフ(協議会発行)+コース別マップ(自治体発行)	■地域(クアオルト)ごとの取り組み(正確な地図の作成)	■統一フォーマットのマップ制作(心拍測定ポイント、ビューポイント、トイレ等)
■アカジャポン(オルレアカデミーを通じたボランティアガイド)	■検討中	■気候療法士(医療か運動の有資格者)	■クアオルト・セラピスト(有償) ■実習指導者(有償) ■普及員(無償)
■野生馬「カンセ」をモチーフにした標識/青とオレンジのリボン	■左同	■地域(クアオルト)ごとの取り組み	■総合案内板や方向指示板の設置
■道路整備・維持管理、ガイドを確保するためのボランティア育成システム	■検討中		■国内展開組織としての方針・施策なし
■オルレチギミ(オルレ守り人)	■コース設定のチェックポイント(上記)に「危機回避」追加		■コース設定の前提条件として、道の安全性や、事故発生時に迅速に救急搬送可能なことを明示。ガイドによる安全なペース調整。
■済州オルレウォーキングフェスティバル(年1回)	■九州ウォーキングフェスティバル(年1回)		■地域ごとの取り組みに依存(上山市では、毎日/早朝ウォーキング等イベント開催)
■個人や企業の寄付 ■1社1オルレ(企業が済州島の地域ビジネス協力)	■自治体の負担		■太陽生命クアオルト健康ウォーキングワードによる資金援助
■法的位置づけなし	■法的位置づけなし	■健康保険制度の適用対象	■健康保険制度の適用対象外 ■宿泊型新保健指導の活用(上山市) ■健康ポイント制度の導入(上山市)

## 7. 考察

本章では4～6章で記述した調査・分析結果に基づき、日本国内での展開組織のねらいと海外規範事例との関係性から各散策路事業の性格付けを行い（「〇〇型」と表現）、各事例における技術移転の特徴について、日本国内へ適応させるための調整や改善の状況も踏まえて考察する。

### （1）各散策路事業の性格付け

まず、「フットパス」に関して、図-1で整理したように、国内展開組織である日本フットパス協会は、地域の風景を楽しみながら歩くための環境を構築することを目的とし、歴史的にパブリック・フットパスが法制度のもとで継承されてきた英国国内で、同様の理念を持つカウンターパートを模索し、意見交換等の交流を重視した活動が行われてきた。英国側の各活動団体も、具体的な計画技術を日本に教示し提供するという立場ではなく、人的交流を重視した対応がなされてきた。したがって、技術移転元と移転先の関係性としては、計画技術の提供・導入する相手としてではなく、お互い理念を共有し合うカウンターパートと位置づけていることから、「相互交流型」としての性格を見出すことができる。

次に、「オルレ」に関して、図-2で整理したように、九州オルレが韓国からのインバウンド客誘致に向けて、散策路とそれを取り巻く環境のブランディングを目的とし、マーケティング戦略として済州オルレとの業務提携に乗り出したものと言える。これに対し、済州オルレは、コース設定やマップ作成からグッズ制作に至るまで、緻密に組み立てられた計画技術を提供するという立場にある。九州オルレはブランド使用料を支払い、コースの認定を受けることで品質を管理し、韓国からの利用者も違和感なく利用できるプログラムを展開することができている。したがって、両者の間には、技術移転元のノウハウを移転先に与えるかわりに、ロイヤリティを対価として支払うという関係性、いわば「フランチャ

イズ型」としての性格を見出すことができる。

一方で、「クアオルト健康ウォーキング」では、図-3で整理したように、上山市の将来構想として参照したドイツの温泉健康保養地のなかで、医学的根拠を持ったプログラムを提供するための施策として注目されたのが、気候性地形療法に基づくウォーキングであった。その提唱者であるドイツの大学教授と行政で中心的役割を担った職員との学術的交流の下で、コース設定やガイド育成の計画技術が導入され、これに基づき設立された国内展開組織が、国内におけるコース認定や計画技術の提供元となっている。したがって、温泉健康保養地としての基本的な理論や計画技術の根幹については、技術移転元から伝授されお墨付きを得ながらも、移転先の実情に合わせたアレンジを行う「免許皆伝型」としての性格を見出すことができる。

### （2）技術移転の特徴

「相互交流型」としての技術移転の特徴（表-3）は、散策路事業の基本理念は共有されるが、海外規範事例の散策路の①道路施設の設計や③運営・マネジメントに関する方針や施策に関し、具体的な計画技術の提供や導入が行われていない点が挙げられる。一方で、国内展開先となった地域間、あるいは、海外規範事例の関連組織との水平的な交流の定期的かつ継続的な開催といった「相互交流」が、それぞれの組織を持つ技術を参照する機会となっており、それぞれの地域の社会的状況や地域資源の特性に沿った、ゆるやかな技術移転につながっていることが推察される。

「フランチャイズ型」と「免許皆伝型」としての技術移転の特徴（表-3）は、海外規範事例の計画技術を踏襲するためのシステムの存在である。

特に、「フランチャイズ型」では、海外規範事例の側から、計画技術を確実に複製することが要求され、①コースの設定（道路環境）、②案内システムとしてのマップやサイン、そしてグッズなどのビジュアルコミュニケーションツールなど、空間や商

品として可視化されるものについては、一貫してブランド管理がなされている。国内でこれに適應するための調整として、コース認定を受けるためのチェックポイントの提示など、国内展開組織が補助的な技術を用意するといった対応がなされている。一方で、済州オルレの散策路の維持・管理のボランティアを含めた緻密な人材育成の仕組みなど③運営・マネジメントに関する計画技術については、それぞれの自治体行政が運営の主体となる九州オルレの体制においては、即時適應させることが難しく、慎重に導入を検討している状況がみられた。

「免許皆伝型」としては、海外規範事例から鑑定を受けるなど、①道路環境に関する計画技術の本質は踏襲しつつも、日本人の体力や環境を反映した独自の技術が構築されたことが特徴として挙げられる。具体的には、気候性地形療法のコース設定要件

についての「クアの道10のコース設定要件」としての再編や、気候性地形療法の指導ができる認定ガイドだけでなく、普及員（無償）という段階を設定し、日本で馴染みのあるボランティアガイドに近い立場で活動する段階を設けるなど、国内の状況に適應させるための調整を行い、国内での展開の裾野を広げている。これらは、「クアルト研究機構」での研究者による学術的なエビデンスの検証や、「クアオルト協議会」における自治体の実情を踏まえた活動促進など、国内展開組織が機能の分担を行ったことにより、実現されたものといえる（図-3）。一方、健康保険など⑤法制度による社会的な位置付けや、健康保養地への長期滞在といった習慣については海外規範事例のそれと同様の位置付けを得ることは容易ではなく、部分的な技術の導入にとどまっている。



写真-3 クアオルト健康ウォーキングの状況（上山市）  
 左上：歩行途中の健康チェック（脈拍計測）／右上：涼しく感じさせる林間散策路  
 左下：上り勾配の散策路／右下：スタート地点の説明看板



## 8. 結論

本研究では、海外規範事例と国内展開組織の関係性から、フットパス、クアオルト健康ウォーキング、オルレの3つの散策路事業における技術移転の事例を整理・性格付けし、重視される計画技術の要素の相違とともに、国内展開組織が、海外規範事例における中心的組織との持続的な関係性を構築しながら、日本の状況に合わせて計画技術をカスタマイズ（修正・改善）する役割を果たしている状況を明らかにした。

これらの調査分析及び考察を踏まえ、海外事例に由来する散策路事業の技術移転の手法の要点は、以下の4点に整理される。

第一に、「フランチャイズ型（オルレ）」や「免許皆伝型（クアオルト健康ウォーキング）」のように、インバウンド客誘致や健康増進など散策路事業によって得たい効果が明確なものは、海外規範事例と類似した散策の環境を再現する必要があるため、①道路環境に関する計画技術が核心的要素となる。具体的には、日本の環境や日本人の歩行特性に適合させるための空間的要件の調整を試みるなかで、技術移転元の定期的な審査・チェックを受けたり、医学的なエビデンスを得たりなど、散策路事業としての歩行環境の本質を損なわないための確認を丁寧に行うことで、この質が担保されている。

第二に、技術移転のプロセスにおいて、計画技術の要素の③運営マネジメント、④資金、⑤法制度等の散策路事業を支える仕組みは、即時完全複製を目指すのではなく、段階的に技術を導入することで、国内や地域の社会的状況や地域資源への適応が試みられる。実際、計画技術の確実な複製が求められる「フランチャイズ型（オルレ）」であっても、ボランティアの運用は、事業が開始されて10年ほど経過して、ようやくその機運が高まっている。また、「免許皆伝型（クアオルト健康ウォーキング）」では、気候性地形療法としての医療保険の適用を目標としながら、観光や健康増進の事業のなかで、代替手段

を模索しながら導入が進められている。

第三に、散策路を地域の習慣や文化として浸透させるために、散策路事業を物的空間の整備としてだけでなく、観光・レクリエーション分野の事業として捉えた展開が不可欠である。本研究の「相互交流型（フットパス）」「フランチャイズ型（オルレ）」「免許皆伝型（クアオルト健康ウォーキング）」いずれの事例においても、その手段として、②案内システムや③運営マネジメントの要素として、情報伝達ツール（地図やガイドブック）の作成や普及・交流活動（イベント）が、定期的かつ継続的に実施され、組織あるいは組織と利用者間でのコミュニティの形成に寄与している。

第四に、上述のとおり散策路事業として時間をかけて成熟させてゆく上で、海外規範事例と国内展開組織が継続的な関係性を持ち、技術移転の各局面において、必要な計画技術を提供・導入できることが必要である。本研究のいずれの事例とも、約10年以上の継続した取り組みとなっており、海外規範事例と個人や組織間の信頼関係を構築することで、「相互交流型（フットパス）」のように特定のタイミングでの交流や、「フランチャイズ型（オルレ）」のような継続的な審査・認定、「免許皆伝型（クアオルト健康ウォーキング）」のような監修や指導の機会を経ることで、国内への展開をより確実なものとしている。

以上の技術移転の手法が、政府機関や専門家が計画技術のガイドラインを作成し、各主体がこれに基づいて事業計画を策定するといった技術移転との相違であり、それぞれの散策路事業を継続的な取り組みとすることに寄与したものと考えられる。

なお、国内展開における計画技術の伝播状況や、事業を通じた環境整備やまちづくりにおける波及的な効果など、国内での計画技術の浸透までを視野においた分析については、今後の課題である。

## 謝辞

本研究は、科研費課題番号18K11844及び22H03855の助成を受けたものです。また、ヒアリング調査にご協力頂いた皆様に感謝申し上げます。

## 補注及び引用文献

- 1) 岡村祐・片桐由希子 (2019)：散策路事業における都市ストックの創出と継承の視点（特集：健康な都市に向けたランドスケープデザイン）：ランドスケープ研究, 83(3), 288-291
- 2) 環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室 (2017)：長距離自然歩道を歩こう：国立公園, 757, 3-5
- 3) 建設省道路局地方道課市町村道室 (1995)：ウォーキング・トレイル事業の創設：道路行政セミナー, 6(6), 15-19
- 4) 神谷由紀子他 (2014)：フットパスによるまちづくり地域の小径を楽しみながら歩く：水曜社, 196pp
- 5) 小関信行・アンジェラシュー (2012)：クアオルト入門 気候療法・気候性地形療法入門～ドイツから学ぶ温泉地再生のまちづくり～：書肆犀, 160pp
- 6) 李唯美 (2019)：日本におけるオルレの推進：CATS 叢書12 歩く滞在交流型観光の新展開, 69-85
- 7) 木村宏 (2017)：日本におけるロングトレイルの潮流：CATS 叢書11, 83-89
- 8) 大原一興 (1999)：エコミュージアムへの旅：鹿島出版会, 183pp
- 9) 神田将志・日高優一郎(2022)：岡山県矢掛町におけるアルベルゴ・ディフゾの発展プロセス－地域のマーケティングとアクターの生成－. マーケティングジャーナル, 41(3), 105-114
- 10) 下記河中他 (1993) では、計画技術に関して、『到達目標の設定』及びそれに至るための必要な諸活動の『制御の方法の選択・組み合わせ』を行うための『手法』と定義を行っているが、これは概念的・包括的な定義であり、本研究では、研究対象としている散策路事業における計画技術の対象や要素を明確にするために、第3章においてその内容を詳述する。河中俊・平野吉信 (1993)：開発途上国への計画技術の研究協力と技術移転の推進方策に関する考察：都市計画論文集 28 (0), 625-630
- 11) 村上佳代・西山徳明 (2015)：国際協力を通じたエコミュージアム観光開発技術による文化資源マネジメントの試みに関する研究 山口県萩市とヨルダン・ハシミテ王国サルト市を事例として：都市計画論文集, 50(3), 1188-1195
- 12) 平松紘 (1999)：イギリス緑の庶民物語：明石書店, 242pp
- 13) 重松敏則・入倉彩 (1993)：イギリスの自然歩道システムとその運営管理について：造園雑誌, 57 (5), 325-330
- 14) 日本フットパス協会：日本フットパス協会ホームページ <<https://www.japan-footpath.jp>>, 2023.4.1 参照
- 15) 済州オルレ：済州オルレホームページ <[https://www.jejuolle.org/trail\\_en#/](https://www.jejuolle.org/trail_en#/)>, 2023.4.1 参照
- 16) 日本クアオルト研究所：日本クアオルト研究所ホームページ <<https://kurort.co.jp>>, 2023.04.01 参照
- 17) The Ramblers' Association：ランブラーズ協会ホームページ <<https://www.ramblers.org.uk/>>, 2023.04.01 参照
- 18) Walkers are Welcome：WaW ホームページ <<https://walkersarewelcome.org.uk/>>, 2023.04.01 参照
- 19) 塩路有子 (2016)：英国におけるパブリック・フットパスと地域振興－Walkers are Welcome タウンの活動：阪南論集社会科学編, 51(3), 213－221
- 20) 町田市観光まちづくり課へのヒアリング調査は対面で2022年9月8日実施
- 21) 日本フットパス協会理事・事務局へのヒアリング調査は対面で2022年9月9日実施し、その後Eメールで数回のやり取りを行った。
- 22) 日本フットパス協会からは、コンサルティング用に作成されたフットパスの魅力や効用を示した資料を提供頂いた。
- 23) 小笠原正志・中嶋健 (2015)：民間非営利団体が創設し運営管理する済州島周回長距離トレイル「済州オルレ」徒歩旅行ブームの実態：スポーツ産業学研究, 25 (1), 61-73
- 24) 安殷周 (2019)：済州オルレを通じたコミュニティビジネス：CATS 叢書12 歩く滞在交流型観光の新展開, 47-68
- 25) 社団法人済州オルレ事務局（韓国済州道西帰浦市）へのヒアリング調査は対面で2019年10月23日実施
- 26) 九州観光機構および九州オルレ認定地域協議会事務局へのヒアリング調査は対面で2022年8月17日実施
- 27) 九州観光機構：九州オルレホームページ <<https://kyushuolle.welcomekyushu.jp>>, 2023.04.01 参照
- 28) 九州観光機構からは、2021年度事業実績、2022年度事業予算、コース認定審査時の一次視察チェックシートの資料提供を受けた。
- 29) 小関信行・高野公男 (2006)：ドイツ連邦共和国バー

- ト・ゼッキンゲン市における温泉療養地・クアオルトに関する研究：都市計画論文集 41(3), 451-456
- 30) Verband der Heilklimatischen Kurorte Deutschland e.V. (ドイツ治療スパ協会) : Heilklima -Wandern < [https://www.heilklima.de/download/hk-wanderfuhrer-2023\\_01.pdf](https://www.heilklima.de/download/hk-wanderfuhrer-2023_01.pdf) >, 2023.07.29 参照
- 31) 日本クアオルト研究機構事務局および上山市温泉クアオルト協議会へのヒアリング調査は対面で2020年11月1日実施
- 32) 上山市市政戦略課クアオルト推進室へのヒアリング調査は対面で2020年11月2日実施
- 33) 太陽生命：太陽生命クアオルト健康ウォーキングアワード <<https://www.kurort-award.jp>>, 2023.4.1 参照
- 34) 上山市からは「クアオルトかみのやま」に関する資料、小関氏からは日本型クアオルト指標、クアの道コース設定10の指針に関する資料の提供を受けた。
- 35) ウォーキングトレイル研究会 (1997):ウォーキング・トレイルのみちしるべーゆとり社会の歩く道づくり：ぎょうせい, 160pp
- 36) 環境省 (2023) : ロングトレイルの維持管理・運営システム構築の考え方 <<https://www.env.go.jp/nature/mankitsu-project/pdf/longtrail-maintext.pdf>>, 2023.04.01 参照
- 37) 小川巖 (2018) : 歩くを楽しむフットパス：歴史、文化、自然、そして農と食を結ぶ：エコ・ネットワーク, 119pp
- 38) 岡本卓也 (2019):「道」と「歩くこと」の社会心理学(1) : 国内のロングトレイル, フットパス, オルレの現状と可能性：信州大学人文科学論集 6, 95-121
- 39) 日本交通公社 (2010) : 特集 広がれ日本のフットパス：観光文化 199, 2-21
- 40) 神谷ら (2014) に拠れば、黒松内町では、ブナ林や農村景観を資源とした観光・交流施設をネットワークする環境整備を目指し、北海道を拠点にフットパスを推進していた環境市民団体エコ・ネットワークの勧めで官民協働のフットパスづくりが進められた。長井市では、最上川を対象とした「観光交流空間づくり事業 (国交省)」に選定され、NPO法人リバーツーリズムネットワークらが河川沿いのフットパスのルート整備などに取り組んだ。町田市では、従来環境保全活動に取り組んでいたNPO法人みどりのゆびが、英国のパブリック・フットパスを知り、ルートマップづくりやイベントなどを事業に取り込んでいった。甲州市 (勝沼町) では、景観や近代産業遺産を活かした地域活性化を議論するなかで、町田市の事例も参考にしながらフットパスづくりの機運が醸成された。
- 41) ナショナルトラストは1895年設立され、自然環境や歴史文化遺産の保全活動、国民から土地の寄贈を受け管理、公開している。ランブラーズ協会は、1935年労働者の「歩く権利」のキャンペーン団体として設立されもので、2022年現在、59の地域と485団体から構成され、新たな法制度の立案、フットパスへの自由なアクセスを阻害する要素の発見やアクション、各地の散策路の情報集約と発信など取り組んでいる。また、フットパスを基盤とした地域づくりの全国的ネットワークとしては、Walkers are Welcome (WaW) がある。WaWは北部イングランドに位置するヘブデンブリッジでの市民主体の活動をきっかけに、2007年に設立された比較的新しい組織であり、基準をクリアした100余りの地域がWaWタウンとして認定されている。WaWタウンでは、散策路の設定、フェスティバル等の散策奨励機会の提供、地域の商店との連携などボトムアップの運営が重視されている。
- 42) みやま市では、スタート地点となる道の駅内に案内所が設置されているが、公共交通でのアクセスが難しいため、タクシーの初乗り運賃助成を行っている。
- 43) 上山市：上山型温泉クアオルト事業 <<https://www.city.kaminoyama.yamagata.jp/site/kurort/>>, 2023.4.1 参照
- 44) 小関信行氏提供資料「ドイツにおける気候性地形療法用歩道の要件 (ミュンヘン大学シュー教授による)」
- 45) 日本クアオルト研究所：日本クアオルト研究所ホームページ (街なかスタイルクアオルト健康ウォーキング) < <https://www.kurort-japan.com/blank-12> >, 2023.7.3 参照
- 46) Deutscher Heilbäderverband e.V. (ドイツスパ協会) : Herzlich Willkommen in den deutschen Heilbädern und Kurorten <<https://www.deutscherheilbaederverband.de>>, 2023.7.31 参照
- 47) 日本クアオルト協議会：日本型クアオルトを目指して < <https://japankurort.jp/idea/> >, 2023.7.31 参照
- 48) 厚生労働省：宿泊型新保健指導 (スマート・ライフ・ステイ) プログラム <<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/sls/index.html>>, 2023.4.1 参照

# 2 討論

---

2023 造園学会ミニフォーラム @宮崎南九州大学 2023/06/18

## 都市近郊における散策路事業の展開とストックの 創出と継承

コーディネーター

片桐由希子（金沢工業大学）、岡村祐（東京都立大学）

話題提供

小関信行（日本クアオルト研究機構 事務局長）

李 唯美（社団法人済州オルレ日本支社長）

井澤るり子（美里フットパス協会会長、フットパスネットワーク九州議長）

コメンテーター

上田裕文（北海道大学） ※オンライン参加

## 1. はじめに

### ■ 散策路研究の経緯とこれまでの成果

私の方から今日のミニフォーラムの趣旨を説明させていただきます。

このスライドは私たちが進めてきた研究成果を示しております。もともと、散策路事業の歴史を調べようというところから研究が始まっております。首都圏に限らず大阪・近畿圏も、比較的大きな大都市圏近郊で散策路事業を進めるということが戦前から行われてきました。我々は東京に基盤がありましたので東京近郊の戦前期の散策路事業がどういうものだったかということから調査を始めました。

戦前、東京府では鉄道会社と東京鉄道局が連携し、市民健康路という事業行われておりました。ちょうど戦争が始まる時期に差し掛かる1938年から42年にかけて、こちらの図にある通り、関東近郊で103のコースが整備されました。空間的な整備だけでなく、プロモーションにかなり力を入れられていました。また、行きは京王電鉄、帰りは小田急電鉄など異なる事業者の路線を使った、回遊性のあるコース設定も考えられていました。

東京近郊では、戦後も散策路事業は続けられ、時代的には波がありますが、1980年代には、自然環境保全の観点から、また東京都生活文化局の事業として歴史や文化の資源をネットワークするという観点からの事業など、時代とともに、あらゆる人のニーズに沿って、様々な事業が展開されてきました。

そのなかで、我々は、散策路事業において大事なのは歩く場所、歩く空間があるということであると捉え、いくつかの散策路がどのように変遷してきたかという事例ベースの調査をやってきました。こちらは多摩丘陵の散策路の様子です。尾根道を歩くコースが1つであるのですが、その周辺では多摩動物園やテーマパークなど、様々な新し

#### これまでの研究経緯

科研費基盤 (C) 18K11844 「都市近郊における散策路事業の成立構

●片桐由希子・岡村祐 (2017) : 東京市・東京鉄道局による「市民健康路」事業の展開、ランドスケープ研究、80(5), pp.493-497

●岡村祐・片桐由希子 (2019) : 散策路事業における都市ストックの創出と継承の視点 (特集: 健康な都市に向けたランドスケープデザイン), ランドスケープ研究、83(3), pp.288-291

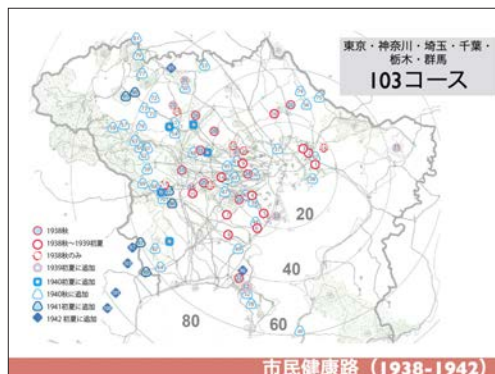
- 東京鉄道局及び東京市により、1938年秋-42年に実施された、鉄道を利用した徒歩旅行促進を目的としたキャンペーン
- 初夏と秋の行楽シーズンに、鉄道駅を起終点としたコースに対する市内からの特別料金の切符の販売、パンフレットや冊子

1938年秋-1939年 1940-1941年 1942夏 割引切符販売中



鉄道省と東京市  
・ 鉄道会社：東京横濱電鉄、玉川電気鉄道、京王電気鉄道、帝都電鉄、小田原急行鉄道、京浜電気鉄道、横浜・河津電鉄、東武鉄道、武蔵野鉄道、多摩湖鉄道、西武鉄道、五日市鉄道、南武鉄道、神中鉄道

東京市観光課→市役室内所  
・ 鉄道会社：(追加で) 王子電気鉄道、城東電気鉄道、青輪電気鉄道、駒沢鉄道



市民健康路 (1938-1942)

い観光レクリエーション施設がこの散策路を軸に展開ていきました。地域の形を作っていく一つのきっかけとして散策路があるということが見えてまいりました。

もう一つは埼玉県飯能の散策路です。こちらは明治・大正から有名なコースがあったのですが、時代が経るなかで、飯能全体を歩けるようにしていこうという動きが見られました。既存のコースを拡張する形で、市街地近郊の4山のネットワークが実現したり、住宅地開発が進んでいくのを抑止する役割として散策路が機能していたり、といったことも明らかにすることができました。ここから、散策路の存在が、周りの環境や総合的にその地域を捉えるという一つのきっかけになる、といったことを考察しました。

これらを総括したものがこちらの図になります。左側は代表的な時代ごとの政策的な目標を書いております。先ほど申し上げた戦前期は厚生運動の中で行われたり、あるいは戦後は自然公園の利活用の中で散策路というものが積極的に設定され、80年代90年代になってきますと環境の保全や歴史文化を促進して守っていくという中で散策路の位置付け、また近年では、それが健康増進となる。社会に対応する形で散策路事業が行われてきたと理解しております。

散策者を受け止める地域側の思いももちろんあるのですが、一方でその歩く人、都市側のニーズがあって、それをつなぐ鉄道会社の役割もありながら、地域側と歩く人のマッチングによってこういった事業が成立してきたと考察できます。

## ■ 散策路事業の特徴と計画技術

散策路事業ですが、全体を見てみますとまず一つはそのハード面がもちろん大事です。歩く環境としてどうなのかということ。あるいは何をネットワークしているのかということも大事になってきます。それからその一度整備されたものが将来の世代へどのように継承していくか、空間的な

名称	所管機関	規模
行楽道路 1935	都市計画東京地方委員会	多摩川沿道 83km 練馬277km 池袋沿道 62km 111km
保樹道路 1938	都市計画東京地方委員会	244km 15路線
市民緑道 1939-1942	東京市民団体の力	全103コース 1939年23コース 1941年66コース
歴史と文化の散歩道 1984-2018	東京都生活文化局	241km 13コース
武蔵野の道 1985-	東京都建設局	270km 21コース
かたはらの道 1985-	東京都建設局	141km 9コース
飯能の山 1988-	東京都建設局	10コース
トニーウォーク -ワンダマップ 2016-	東京都建設局 局	21区19箇所計 2019年9月現在

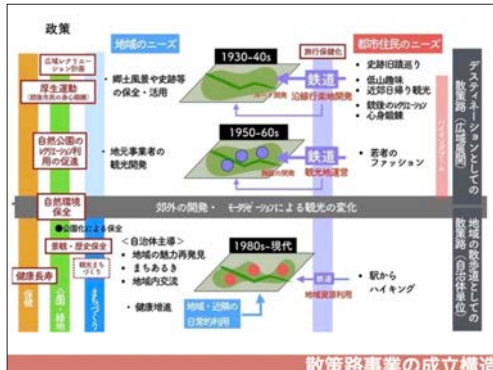
- 戦前期、観光レクリエーションの場として大都市近郊の自然風景地の保全・利用が進めらる⇒東京緑地計画景園地
- 高度経済成長期以降、宅地開発or緑地保全⇒自然公園法、近郊緑地、都市公園
- 自然環境を都市住民へレクリエーションの場として提供する手段として、各種散策路事業が実施（80年代）
- 歴史文化資源をネットワークする



多摩丘陵のレクリエーションの軸としての野越峠コース



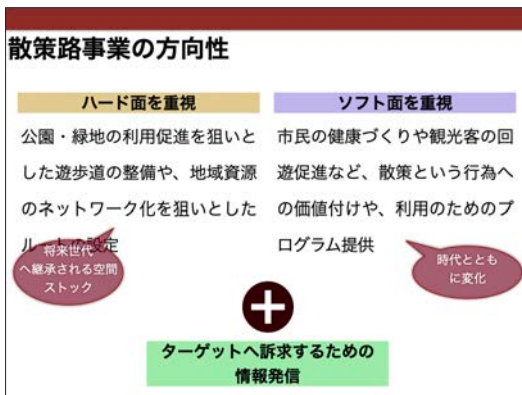
飯能の四山をネットワークする散策路の形成



ストックとして継承していくのかはとても大事ではないかと思っています。

一方で、先ほど申し上げた通り、時代ごとに歩く人のニーズであるとか地域側のニーズも変わってくるので、いろいろな色付けがされていくのが散策路の特徴であると思っています。例えばその健康づくりのため、あるいは観光客、インバウンド客を誘致するという意味で散策路の性格付けが行われるということもあると思いますので、そのハード的な位置づけとソフト的な位置づけ、両面が大事ですし、さらには誰に対して訴求していくのかという情報発信の側面も散策路事業においては大事であると考えております。

散策路事業の計画技術ということではいくつかのまとまった書物を拝見し、具体的に散策路を作っていく上でどういうことを考えていかなければならないということを整理しました。1つは道路の環境自体そのものです。2つ目が案内システムということで地図やガイドブック、あるいはガイドさん、現地での案内標識、説明板のようなもので案内をしていくということが大事だと思います。3つ目がそういったものをどう運営マネジメントしていくかということでボランティアガイドさんの活躍も必要ですし、実際に歩いていただく方に対する安全管理、そして健康管理の部分もマネジメントという意味では大事だろうと思っています。あとはもちろんその道があるということも大事なのですが、来てもらわなければならないので、あるタイミングではイベントのようなものも大事です。交流の機会という意味でもイベントの役割も大事であると考えてます。その他、持続的にこういったものを運営していくための資金や、法律的な裏付け、社会的な位置付けも必要であると思っています。ただこういったもの全部網羅している散策路事業というのはなかなかないと思うんですが、一つの要素としてこのように整理をさせていただいています。



### 散策路事業の計画技術

大項目	小項目	ウォーキング・ トレイル研究会 (1997)	神谷 (2014)	藤原 (2023) ※ロングトレイル
①道路施設	A.ネットワーク	ネットワーク計画	フットパス・コースをつくる	路線設定と遊歩道 拠点施設の整備・運営
	B.道路環境	舗装と環境計画	<該当なし>	<該当なし>
②案内システム	A.地図・ ガイドブック	地図、ガイドブック	フットパス・マップをつくる	データブックとマップブ ックの制作・販売
	B.ガイド	ガイドの養成、活動内容	おもてなしの体制を整 える	<該当なし>
	C.案内標識	案内標識	フットパス・サインを 整備する	<該当なし>
③運営・ マネジメント	A.ボランティア 育成・運用	管理主体とボランティア	<該当なし>	運営団体の設立 地域連携による管理運営 歩道状態把握のための管理 台帳
	B.安全管理	非常連絡、救急体制	<該当なし>	
	C.イベント開催	イベントの運営・PR	フットパス・ワーク を開催する	
④資金		<該当なし>	<該当なし>	運営団体の資金調達
⑤法制度		<該当なし>	<該当なし>	長距離自然歩道 (環境 省)

## ■ フォーラムの論点

改めて、今日の論点ということで、まずその散策路の整備・管理が実際どのように行われているのか、道そのものに着目したいというのが一つです。2つ目がその散策路周辺の環境ということで、多くはその公園や緑地や農地になってる部分も多いかもしれませんが、そのような環境の保全に対して散策路がどう機能しているのだろうかということを議論したいと思っております。

本日は、3名のパネリストをお呼びしております。我が国を代表する散策路事業だと我々は考えておりますが、1つ目がクアオルト健康ウォーキング、特にその健康というところを大事にしながら進められていらっしゃる散策路事業です。2つ目がオルレです。もともとは韓国の済州島で始まったものですが、それを今九州あるいは宮城の方で展開しております、それを日本で熱心に展開していただいている方にご越しいただいております。3つ目がフットパス。もともとのフットパスの言葉や考え方はイギリスが発祥ですが、それを日本流に解釈しながら進めているフットパスの事業について、特に九州で取り組まれている方にきていただいております。

これから12分ほど、それぞれの方からここに示すポイントに沿ってお話をいただき、その後は全体での討論に戻りたいと思います。

### 散策路による空間ストックの創出・継承

#### ●散策路の整備・管理

→散策路としての価値付けにより、当該路の整備・管理が促進



#### ●散策路周辺の公園・緑地の保全 (土地利用、景観など)



### 我が国を代表する散策路事業

#### クアオルト健康ウォーキング



#### オルレ



#### フットパス



### お話しきたい内容

- 散策路事業の実施組織
- 散策路事業の方向性（ハード/ソフト）
- 計画技術の5要素
  - ①道路施設
  - ②案内システム
  - ③運営・マネジメント
  - ④資金
  - ⑤法制度

### 討論の内容

- 散策路による空間ストックの創出・継承の実績
  - 情報提供頂いた内容の確認
- 時間的スパン
  - どれくらい先を見越した事業なのか？
- 空間ストックを創出・継承してゆくための課題
  - 直近の事業を進めていく上での課題は？



## 2. 話題提供

### 「クアオルト健康ウォーキング」の視点から

小関信行（日本クアオルト研究機構 事務局長）

#### ■ クアオルトとクアオルト健康ウォーキング

クアオルト健康ウォーキングですが、クアオルト自体の言葉がなじみのない言葉なので、そこからお話して、先ほど岡村先生がおっしゃった要素についてご説明申し上げます。

クアオルト健康ウォーキングというのはドイツの気候性地形療法という治療法があるのですが、これをベースにしながら進めている公共政策の健康づくりになっています。コースについては気候性地形療法という運動療法に基づくもので、リスク管理をしながら、ガイドが提供するという内容になっています。クアオルトは、ドイツの統合医療であります。その中の自然療法の治療のことをクアオルト（健康保養地、療養地）と言っています。ドイツの方では、374の自治体の中で、極めて限定された地域で行われています。2019年度宿泊では1億3,260万泊、滞在客数としては2,915万人くらいがこのクアオルトに集まっています。平均すると一か所あたり35万泊くらいとなります。

気候性地形療法は、これは治療法としては野山を歩いて治療をしていくという手法です。適応症は心臓リハビリ、高血圧、骨粗鬆症などです。期間は3週間で、治療では運動強度をコントロールします。「160 一年齢」という心拍数で運動強度55%くらいとします。心拍を計測しながらコントロールし、運動を繰り返していくことで治療していく。また、運動という緊張するものだけでなくリラクゼーションとしてクナイプの水療法、ヨガ、気功、自律訓練など緊張を緩和して治療して

#### 都市近郊における散策路事業の展開とストックの創出と継承 ～「クアオルト健康ウォーキング」の視点から～



日本クアオルト研究機構 事務局長  
博士 小関 信行  
健康運動指導士  
日本体力医学会 健康科学アドバイザー

#### 目次

##### 最初に

##### I 「クアオルト健康ウォーキング」について

##### II 内容

- 1 散策路事業の実施組織
- 2 散策路事業の方向性(ハード/ソフト)
- 3 計画技術の5要素  
(①道路施設、②案内システム、③運営・マネジメント、  
④資金、⑤法制度)
- 4 散策路による空間ストックの創出・継承への影響

#### I-1 「クアオルト健康ウォーキング」はドイツの気候性地形療法を基本

- ・クアオルト健康ウォーキングは、ドイツの治療法である「気候性地形療法」を基本に、住民に対する安全で効果的な運動指導の「健康づくり」(公共政策)
- ・コースは、気候性地形療法などの専用コースや専門コースに準じる「クアの道」
- ・心拍数の計測で、運動強度を調整し、リスクの少ない安全で「個人の体力に合わせたオーダーメイドの運動」  
＝運動処方「三要素」[安全性・有効性・継続性]＝
- ・「専門ガイド」で安全、リスク管理
- ・皮膚を「少し冷たく」して、「運動効果を増強」
- ・心理効果で、「心も軽く、無理なく・楽しく行動変容」

いるというのが基本になります。

これをベースにして日本ではクアオルト健康ウォーキングを健康づくりとして進めています。集まってきた方の健康チェックし、ストレッチをして、野山に出て行く。土の道が基本になりますが、所々で心拍と血圧を測り、安全を管理しながら帰ってくる。ちょっと体が冷たくなると運動効果があります。距離にして3km、時間にして2時間ぐらい。これを繰り返すことで、健康促進につなげています。

## ■ クアオルト健康ウォーキングの計画技術

ここからは頂いた課題に沿ってお話します。

実施組織は全国的には行政が主体になっています。行政が直接実施しているところと、上山モデルと呼ばれる協議会組織、行政内部の企画、健康、農業、産業、観光、環境、建設、教育、消防が連携して事務局になって、観光、商工、医師会、農業団体、健康保険協会、金融、青年会議所、建設会社、その他さまざまところがまとまって住民の健康づくりを推進するものがあります。大学、教育機関が加わり、学識経験者が進めているという内容になっています。

ハードとソフトですけど、ハードは先ほどのコースになります。コースについては医療の視点から、運動療法が基本になったコースの設計をしているということなんですけど、なかなか新しいことをやるとお金がかかるので、既存の散策路を使って、その散策路の中で運動に適しているものを利活用して設計し、というやり方です。全体が分かる総合案内板であったり、方向指示板であったり所々で心拍を計測するようなサインを出して、そこで誰でも計測できるようにしています。

ソフト自体は、住民の健康づくりを主にしながら公共政策を進めていくのですが、観光商品として様々な商品を提供しながら、ウォーキング愛好

### I-2 クアオルト(Kurort)とは

- ・ドイツは、現代医学(投薬・手術)+自然療法→「統合医療」
- ・クアオルトとは、ドイツ語で

クア(Kur:療養)+オルト(Ort:地域)=

**クアオルト(療養地、健康保養地)**

- 4つの自然療法で医療保険が3週間適用になる地域
- ◎4つの自然の治療薬(温泉等、気候、海、クナイプ式)
- ・クアオルトの数は(2007) 374(自治体数の3%)
- ・2019年 宿泊数 132,614,872泊
- 滞在客数 29,158,433人 平均:4.55泊
- ・クアオルト1ヶ所あたり 年間平均 35万泊

I-3 気候性地形療法とは、クアオルトにおける自然の中の運動療法  
気候の要素=特に「冷気と風」を利用し  
運動負荷が計測された野山を歩く運動療法

#### ◎適応症

心臓リハビリ(心筋梗塞や狭心症のリハビリ)  
高血圧、骨粗しう症等

#### ◎運動設定

傾斜のある土地を治療負荷で歩く。定められたルートでの運動療法  
3~4週間、3~4回/週、20~40分の継続的運動負荷  
運動強度は、心拍数(160-年齢)  
クナイプの水治療、水泳・体操、ヨガ・自律訓練などのリラクゼーションと組み合わせ(緊張と緩和の調和)



### I-4 クアオルト健康ウォーキングのフロー



### II-1 散策路事業の実施組織

- ・全国では、行政が公共政策として予算措置し実施
- ・協議会組織(上山モデル)での推進を推奨
- ・上山市では、行政内部の企画、健康、農業、産業、観光、環境、建設、教育、消防部門が連携して事務局となり、
- ・民間の、観光、商工、医師会、農業団体、健康保険協会、金融、青年会議所、建設会社、公民館、スポーツ協会、学識経験者等で組織する「クアオルト協議会」に行政が補助金を交付して、散策路事業やクアオルト(健康保養地)事業を実施

者や健康経営といわれる企業に対するアピールなどを行っている。実際に提供するの専門ガイド。お医者さんや運動の専門家から研修を受けて、試験に合格して始めてガイドになれる。リスク管理をしっかりと考えられるガイド育成しています。

コースの設計は、気候性地形療法のコース基準に基づいた土の道、傾斜地、森の中、あとはどんなに森のなかが気持ちよくても、救急対応できるように、コースごとに複数の公道がアクセスできるような設計にする。上山では、林野庁の自然休養林、国立公園内の登山道、常設のクロスカントリーコース、陸上や高地トレーニングコース、あとはスキー場のグレンデを使う。行政所有の森林や、神社の参道、市道を交えながら、標高180mから1450mまでの様々な場所にコースを設置しています。他の自治体は国立公園、市街地では都市公園、森林公園を使って散策路を整備している。コース全体では先ほども言った通り、案内システムは総合案内板と方向指示板と心拍計測板。また、行政や観光施設の窓口で、マップと毎日ウォーキングカレンダーを提示したり、行政の広報も支援しています。クリニックでもカレンダーやマップを提供し、患者さんに使ってもらおうといった試みもしていました。

運営の内容としては、年間360日、毎日コースを変えてウォーキングを提供しています。担当部署は健康推進課、受託しているのはガイド協会で、年末年始5日間だけはお休み、それ以外は毎日住民に対しては無償で提供している。気象条件で警報が出た場合は中止になります。観光商品は空色・暮色ウォーキングで、これは観光物産協会が主催し、ガイド協会が受託している。その他に健康経営関係では上山市クアオルト講座と言って、市政戦略課とガイド協会が一緒になって、企業や小学校、保育園、幼稚園、中学校、高校までの教育機関に対し、クアオルトの講座を行なっている。2022年で延べとしては9400人ぐらいいました。ただこれはカウントできた人数で、実際はいろん

## II-2 散策路事業の方向性 (ハード/ソフト):全国共通



### ・ハード(医療としての視点・運動療法を基本に)

基本的には、官地にある既存の歩道、登山道を活用し、気候性地形療法の品質に合うようなコース設計をする。また、コース全体が分かる総合案内板、どの方向に歩くかの方向指示板や心拍計測板を設置



### ・ソフト

地域住民の健康づくりを主とし  
毎日提供するものと観光商品も提供

クアオルト健康ウォーキングの専門ガイド「クアオルト・セラポイト」や「実践指導者」を養成し、気候性地形療法を基本とした屋外の運動指導を行う

## II-3 計画技術の5要素



### ①道路施設:全国共通

- ・気候性地形療法のコース基準に基づき設計(土の道、傾斜地、森の中、救急対応等)
- ・上山市では、主に官地の自然休養林(林野庁設置)・国立公園内登山道や常設のクロスカントリーコース、スキー場、行政林のほか、神社の参道、市道の傾斜地を活用している
- ・他の自治体では、国立公園、市街地では都市公園、森林公園等の傾斜地を活用

## II-3 計画技術の5要素



### ②案内システム

- ◎コースでは(全国共通)
- ・コース全体が分かる総合案内板
- ・どの方向に歩くかの方向指示板と心拍計測板
- ◎行政や観光施設の窓口で(上山市)
- ・マップ(記録表つき)や毎日ウォーキングカレンダー配布
- ◎行政の広報で(上山市)
- ・毎日ウォーキングカレンダーの掲載(広報誌・HP)
- ・病院・クリニックで広報

## II-3 計画技術の5要素



### ③運営・マネジメント:上山市の事例

- ◎年間360日開催の毎日ウォーキング(市民は無償、市外の参加者は有償。毎日コースを変えてガイドが案内)  
担当部署は健康推進課、受託はガイド組織 NPO蔵王セラポイト協会
- ◎観光商品(空色・暮色ウォーキング)  
観光物産協会主催 受託は蔵王セラポイト協会
- ◎健康経営関係「上山市クアオルト講座」  
クアオルト担当部署の市政戦略課と蔵王セラポイト協会
- ◎2022年度 延べ9414人参加
- ◎医療との連携「スマート・ライフ・ステイ(宿泊型新保健指導)」再開。行政、検診センター、医師会等の連携

な住民の方が自由にコースを歩いている。それが年間何万人です。

医療との連携としては、スマートライフステイ、宿泊型新保健指導と言って、観光地で宿泊して特定保健指導を受けるものがあります。コロナで中止されていましたが、今年から再開されます。これは行政や健診センターとしっかり連携をして全国の企業に対して提供されるもので13コースくらい。名古屋の大きな自動車会社や、教員の関係者など、宿泊しながら保険治療を受診する事になります。資金としては上山の事業自体が国の施策としてスタートして、2008年から2カ年間は国の事業で予算をいただいて実施しました。2010年からは市の単独事業、今は地方創生予算、国民健康保険の健康づくり、介護予防の予算を活用して賄っているところが大きいです。

コースには、企業がトイレや看板、水場、運動器具を提供してくれたり、協議会に入っている建設関係の企業は、地域貢献ということで整備自体に参加していただいている。様々な方々が関わり、コース整備から実際に体験して健康になるということになっている。森を健康に活用する場合は、森林環境譲与税があり、継続的に使っていと言われているのでこれを使って実施している自治体もあります。

法制度としては、具体的な法制度の裏付けはないですが、厚労省が国民の健康づくり「健康日本21」の中で、自然に健康になる地域づくりを推進している。また、自治体としては、長期計画、総合計画をベースにしながら進めている。住民の健康づくりとして、その仕組みをしっかりと使って交流人口を拡大してというのは、健康経営や観光の取り組みとなっています。受賞歴としては2012年にヘルスツーリズム大賞や、厚労省の健康寿命をのぼそうアワード、農水省の農山漁村の宝、総務省のふるさとづくり大賞など、様々な分野から認めてもらっています。

各企業、生命保険関係の企業をはじめ、様々な

## II-3 計画技術の5要素

### ④資金

#### ◎上山市の事例(国の施策としてスタート)

- ・スタート時の2008年、2009年の2カ年間は、内閣府の100%補助事業「地方の元気再生事業」
- ・2010年からは、市の単独予算、また地方創生予算、国民健康保険の健康づくり、介護予防等の予算を活用
- ・企業からの支援(トイレや看板、水場、運動器具、コース整備等、地域貢献事業の活用)

#### ◎森の健康活用

林野庁の森林環境譲与税を活用した、森林を活用したサービス産業として健康づくりが可能

## II-3 計画技術の5要素

### ⑤法制度

- ・法制度の裏付けはない
- ・厚労省が策定する国民の健康寿命延伸を目指す計画「健康日本21」や地方自治体の長期計画を基本にし、自治体の公共政策として推進
- ・上記の仕組みを、観光や健康経営等の交流人口拡大に活用
- ・参考(公共政策に対する上山市の受賞歴)

## II-3 ⑤の資料:国内外の評価

2012年 第4回ヘルスツーリズム大賞

主催:ヘルスツーリズム振興機構

2014年 厚生労働省 第3回 健康寿命をのぼそうアワード 優秀賞受賞

2019年 農水省 農山漁村の宝 準グランプリ受賞

2021年 総務省 ふるさとづくり大賞 受賞

2022年 経産省関連 健康経営優良法人(上市市役所)

2018年 経産省関連 ヘルスツーリズム認証

◎その他、参考

2015年 第1回ジャパン・ツーリズム・アワード部門賞

連携企業:太陽生命、ひまわり生命、東京海上日動火災、大塚製薬、明治安田生命、第一生命との包括連携協定締結

サントリー、サンスターとの連携、アクサ生命、ココ・コーポレーションと連携(2022年)

県内6社と健康経営相互応援協定締結、健保組合、協会けんぽ等との連携

## II-4 散策路による空間ストックの創出・継承への影響

- ・既存の散策路、登山道、参道、林道等の活用が進み、ハードの整備(路面、下刈り等)、周辺環境の整備(駐車場、トイレ)が、管轄部署の予算で推進
- ・産官学の他、医療、金融、健康保険組合等が連携し推進するため、関係者が拡大し、散策路で実施するクアオルト健康ウォーキングのエビデンス調査、利活用の推進で新しい活用法が創出
- ・健康経営や企業との地域連携協定により、活用地域が全国からの利活用者となり、医療保険におけるスマート・ライフ・ステイ(観光地における特定保健指導)、健康保険組合での利用など、医療との連携も拡大

企業が包括連携協定を使って寿命健康づくりに取り組んでいます。今まで、なかなか使ってもらえなかった、使える頻度も少なかったコースをいかに健康づくりに使ってもらうか、そこを整備利用して環境保全になるのも大事です。たくさん使うことによって、様々な道が、行政の予算だけではなくて、民間の予算や民間の手伝いで、整備されてきていることも重要です。企業だったり、保険組合だったり、それも特色であると思います。

ただ健康づくりを進めているだけではなく、健康経営など、経産省が進めているところを勉強することで、より良い環境整備、道の周りの整備ができたりすることもあると思います。今のところでは、スマートライフステイといわれる観光地における特定保健指導が大きく全国に評価されています。日本で一番進んでいると言われてることもありますので、もう少し医療と連携をした使い方、全国からお客様が来るやり方を考えたいと思っています。

今年度2023年で29の自治体が実施しています、北海道がちょっと残念ですが、九州も長崎県西海市が健康ウォーキングに取り組みながら、まちづくりと連携して進めています。



## オルレのビジョンと価値

李 唯美 (社団法人済州オルレ日本支社長)

はじめまして。チェジュオルレ日本支社長の李唯美と申します。私はもともと九州観光機構で韓国インバウンドを誘致していました。その時にオルレに出会い、私の人生も変わりました。

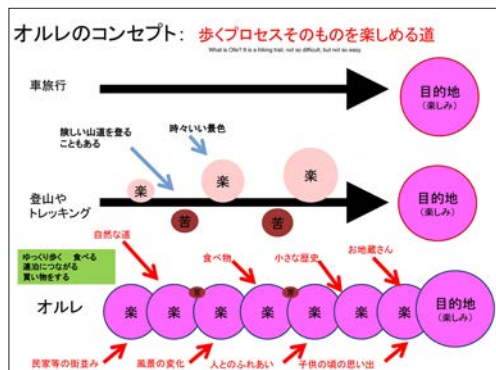
### ■ 済州オルレ



オルレという言葉は初めて聞いた方もいらっしゃると思います。スライドは、オルレの難易度、体力的な難易度を示したものです。散策よりはちょっと大変ですが、トレッキングや登山よりは簡単なのがオルレです。車の旅行や登山の旅行とは違い、オルレはゆっくり歩きながら、その地域の視点で歩くこと、その地域の歴史、風景を楽しむものです。小さな楽しみがたくさんあって、歩きながら飽きないのがオルレです。

オルレという言葉はもともと濟州島の方言です。濟州島が方言なのでソウル出身の私も最初はオルレという言葉を見たときに何を言っているのか最初はわからなかったです。濟州島の言葉で、家に帰る細い道を意味します。左の写真を見るとちょっと道が曲がっているのがわかりますね。これは濟州島の独特な建築と関係があります。島で風が強いので、風を避けるために道を曲げているそうです。自分の家から人に会うためには必ずこの道を通らないといけないといったことから、個人から社会、濟州から世界につながる道、といった意味がこめられています。

オルレという言葉からは、韓国では誰もがトレッキングを連想するので、トレッキングの代名詞になっています。今では、日本の九州でも宮城でもモンゴルでも、同じくオルレという名前をつけて、世界の道をつなごうというネットワークに発展しています。チェジュオルレを作った女性は、もともとと記者として長年マスコミで記者をしていた人です。この人は自分の人生の中で、40代になって、なにかもかやりたくなくなる、燃え尽き症候群になりました。スペインのサンティアゴで出会った女性から、韓国のこういう道があるんじゃないか、と勧められ、全く観光とも、ウォーキングも関係がなかったのですが、仕事をやめて、自分のふるさとの濟州島で始めたのがきっかけです。コースを作ったのは2007年からですが、その時にビジョンとして掲げたのが、歩く人が豊かになる道を作る。それから道の上に住んでいる地



**オルレ**

- 「オルレ」は家に帰る細い道を表す濟州の方言
- 家から村へ、個人から社会へ、濟州から世界へ続く道
- 濟州オルレによって、「オルレ」は本来の意味から徒歩旅行やトレッキングの代名詞となっている。
- 世界に向かった開かれた道 (WTN、九州オルレ、モンゴルオルレ、宮城オルレ)

**濟州オルレの始まり**

(社) 濟州オルレ

徳明淑理事長がサンティアゴ巡礼道歩いた後、2007年から政庁の濟州でコースを作り始めた。個人で始めたが、コースを作る時、たくさんのボランティアや地域の住民が加わり、現在は、非営利組織として運営されている。

**VISION**

歩く人が幸せな道  
道の上の地域住民が幸せな道  
道を出して自然が幸せな道



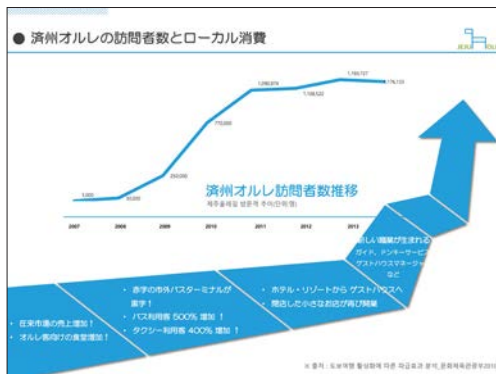
域住民がしあわせに健康になること。

済州島の大きさは日本の香川県と同じくらいの大きさです。済州島を一周するコースが27コース、全部で437キロあります。2007年の9月にオープンして今は16年目で、年間100万人が歩いています。全コースの踏破者が増えています。コロナの間に増えたのは、海外に行けなかった韓国人が済州に来て歩いたことと、それからコロナの中で人混みのあるところに行かず、歩きに行こうという人たちが増えたからです。チェジュオルレの27コース437km全部歩いた人の中で最高の高齢者は83歳、九州オルレも同じくらいです。最年少の人は5歳です。様々な年齢の人たちが歩いています。このコロナの間の特徴的なのは20代30代の若者の踏破者が100%を超えたことです。チェジュオルレが生き返ったことによってその地域にオルレ客向けの食堂、レストラン、カフェなどが増えて、済州島に様々な経済的な効果をもたらしています。

チェジュオルレは世界と一緒につながるプロジェクトを行っています。まずは友情の道として世界のいろんな国、アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリス、レバノン、日本、スイス、イタリア、ギリシャなどの国と友情の道を締結しています。またそのチェジュオルレの拠点を結んだコースにはその国の標識が立っています。姉妹の道として、九州オルレと宮城オルレとモンゴルオルレはチェジュオルレの哲学を共有しており、チェジュオルレの標識であるカンセなどが立っています。またワールドトレイルネットワークと、アジアトレイルネットワークを作って、チェジュオルレを中心として世界に向けた活動を行っています。

### ■ 九州オルレのきっかけと計画技術

九州オルレは、2005年に発足した九州観光機構に勤めていた私が、2011年夏に、大震災を契機に来なくなっていた韓国人に、九州に戻ってき



#### ● 九州オルレ グローバルプロジェクト

友情の道	九州オルレ、宮城オルレ	モンゴルオルレ	WTN/ATN
海外の有名トレイル団体の各コースを九州オルレコースと友情の道と命名し、直結する交流マーケティング。※アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリス、レバノン、日本、スイス、イタリア、ギリシャなど	九州7県に20コースが認定されている。宮城県には4コース認定。コースの開発に関わるアドバイス、標識、デザインを提供。	公的開発の貢献として九州観光公社と一緒に取り組んでいる。コースの開発に関わるアドバイス、標識、デザインを提供。	全世界のトレイル団体が一壁に合し、持続可能なトレイル育成のために協議し、情報を交換するネットワーク。

#### 九州オルレ 九州オルレの始まり

- 2005年 九州観光推進機構設立、韓国担当
  - 韓国は九州にとって最大のインバウンド市場。プロモーション素材は温泉とゴルフ
- 2007年 『LOHAS九州』
  - 30代の働く女性、ゴールドミスターゲット。高級温泉旅館を使ったワンランク上の旅をPR
- 2009年 『トレッキング九州』
  - トレッキングや登山を中心とした九州の山々をPR。韓国では『済州オルレ』が大ブーム
- 2011年 (社)九州オルレと業務提携『九州オルレ』
- 2012年 第1次の4コースをオープン
- ...
- 2023年現在、九州オルレ18コースが認定されている。

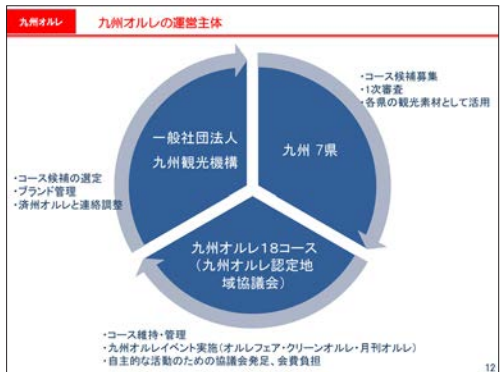
久留米・高良山コース



てほしいということで始めたのがきっかけです。2009年、育児休暇中にネットサーフィンでチェジュオルレを見て、このように本当に一般の人たちがいろんな道を、観光客も歩けるようになったら、九州の本当の姿を見せることができるんじゃないかと思って始めました。毎年4コースとか2コースと追加して、今では18コースが認定されています。九州の7県に18コース、宮崎県には宮崎・小丸川コースが高鍋町にあります。ここからだいたい1時間です。一番新しくできたのが2023年3月にオープンした松浦・福島コースです。

九州も宮城もチェジュオルレの標識を見て歩きます。この標識は、ユニバーサルデザインで、韓国人も日本人も、また言葉がわからない人でもそして老若男女誰でも分かるように、シンプルな、それから自然に逆らわないようなものになっています。まずは馬の形をしているカンセは野生馬で、のんびりゆっくり歩きながら地域を楽しんでほしいという事です。怠け者で、ゆっくり横たわっているのが好きな野生馬です。宮崎の都井岬に馬がいますけども、そこにいるポニーみたいなものです。この馬を私たちは標識だけでなく、ロゴマークなどにも使っています。また矢印は人の形をしています。リボンは枝につけます。これを見ると誰でもスタートからゴールまで、ガイドさんがいなくてもガイドさんが案内してくれるように歩くことができます。

この図は九州オルレの運営主体を表したものです。九州の7県で観光を一つになって推進しようという組織が一般社団法人九州観光機構です。九州観光機構がだいたい4月に九州7県にオルレの募集をします。7県は各市町村に案内を出して1次審査をします。一次審査に通過したのから、九州観光機構がコースの候補を選定し、チェジュオルレと連絡・調整しながらコースの認定に進みます。そこでできた組織が九州オルレ認定地域協議会です。九州オルレの認定に関わることは九州7県と九州観光機構が行いますが、一旦九州オルレ





レに認定されると、この協議会に入って、オルレ事業を実施したり、九州オルレのガイドブックやリーフレットを作成したりします。自主的な活動として、協議会参加の自治体が会費を負担し協議会を運営しています。

濟州島のチェジュオルレは、理事長ソミョンクさん個人によって始められたことですが、そのオルレの哲学、スピリットが九州オルレにつながっています。道を通じてまちづくりをすること、それから地域の人たちを幸せにすることと健康増進、それから地域を再発見することを目指したいと思っています。

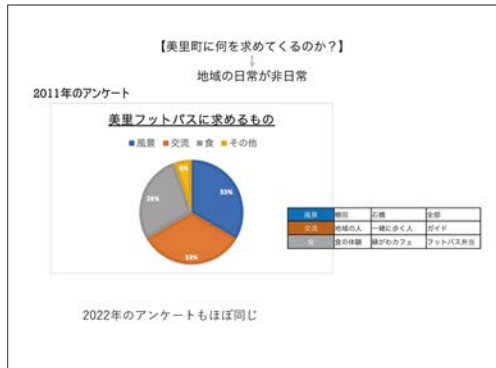
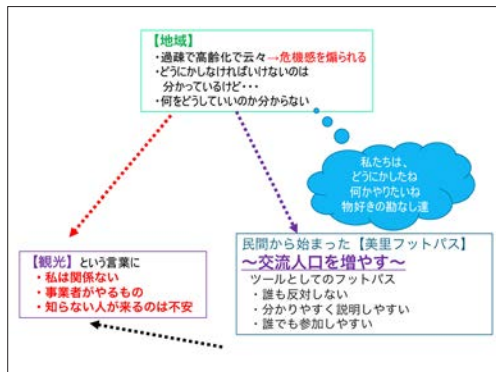
## 美しい里のありのままの風景を楽しみながら歩く - 美里フットパス

井澤り子(美里フットパス協会会長、フットパスネットワーク九州議長)

美里はここから高速道路で2時間で行けます。ちょうど九州の真ん中で、南北だと、福岡→熊本→鹿児島途中、東西だと天草→阿蘇→高千穂途中、来やすいけどすぐ去りやすい、通過型の観光だったんです。町のホームページをみると、たくさん観光名所書いてあります。みんなが知っているのはハートが現れる二俣橋と日本一の石段と幽霊が出ると盛り上がっている八角トンネルです。

### ■ 美里フットパスの経緯

私たちは地方の小さなまちです。どうかしたいねという勉強会をしたり、行政の人もいろいろ仕事の中で、全部どうかしたいねって言っていたり。地域でどうかしたいけどって言いながら何もできない。観光と言われても難しいけど、何もなくて生き残るには観光しかないよね、という中から、じゃあフットパスをしてみよう



なりました。その後にオルレをしませんかという話が来たけど、行政主導なので難しそう。交流人口を増やすためにフットパスをはじめました。交流人口を増やすためには観光ですが、直接観光というようにはいかないから、美里にあった方法がフットパスかなと思います。

## ■ 美里フットパスの計画技術

フットパスを始めた時、美里に何を求めるかと言ったら、風景と交流と食。この3つを磨けばいいんだなということですね。風景も交流も食も、全てに応えられるのは地域の人たちなので、その仕組みを作るときに地域の人たちは絶対加えないといけないよね、と言って道をずっと調べて歩きました。地域の人たちが関わる様々な道を使ってコースにする。だから国道とかはあんまり地域と関わらないので、なるべく入れたくないんだけど、国道沿いを歩くとアピール効果はあるよねとか。地域の人たちが教えてくれた、普通なら絶対行かないようなところもたくさんあったんです。観光地は素晴らしいからどんな道を通って行っても素晴らしいと言えますが、美里の風景は大したことがないので、素晴らしいと思わせるためには工程が大事、ということで、1コースつくるのに10回は歩く。そして歩く人が、発見できて感動して、地域の人に会える道、自然の中ばかりではなくて、集落の中も歩けるようなコースにしました。そして、寄り道・道草ができる。だからフットパスの歩き方はどうなのと言われたら、寄り道、道草、回り道ができるコースと言います。

ガイドと一緒に歩く道案内と位置づけています。コースづくりと同時にガイド養成講座を実施して、ガイドを発掘しました。しゃべり好きな人たちとか、いろいろ目配り気配りできる人をガイドに引っ張り込みます。歩き方を教える。歩きに来る人は目的地に行くのは上手だけど、寄り道、道草、回り道は、なかなかみんなできない。それができるような歩き方を教えるのがガイド。自分



### フットパスコース 見せ方【魅せ方】

素晴らしいものは誰でもわかる。  
大したことはないものを素晴らしいと感じるようなコース

歩く人が発見し、感動し、地域の人に会える変化のあるコースをつくる。

寄り道・道草が出来る道→滞在時間が長くなる  
『3時間の法則：3時間滞在すると3,000円以上消費する』

**ガイド（一緒に歩く人）の重要性**  
コース作りと同時にガイド養成&ガイド発掘  
・歩き方を教える（寄り道・道草・回り道）  
・説明するより、尋ねてもらう  
・営業職：美里町のPR（買い物・食事・遊び）

### 美里のステキを実感できるコース

妥協はしない  
～歩く人がいないコースを作っても  
目的を棄てない～



マップ・使い捨てにできない工夫（質と量）  
・販売はフィルタリングとプレミアム感  
道標・立てすぎない（地域の人に尋ねる機会）



から説明したいんだけど、参加した人に尋ねても  
 らうようにしてもらおう。そして大事なものは、ガイドは営業職だから、美里町でいろんな買い物とか、他の魅力を伝えるのがガイドだ、としっかり養成しました。

このように2年間かけて10コースをつくりマップにしました。せっかくコースを作っても、歩きに来る人がいないなら目的を果たせないで妥協はしない。使い捨てできないような量、質のものを作成し、販売をしました。歩きに来て欲しいならばたくさん配ればいいんですけど、誰でもいいわけではない。本当に来たい人だけに来てほしい。なぜかという地域の人々の生活圏にコースを作ったからです。それから道標は立てすぎない。標識はオルレをパクリましたが、無ければ地域の人に尋ねるから、かえって会話のきっかけになっていいかなと思って立っています。

### ■ 美里フットパスでの地域の巻き込み方

フットパスを進めながら色々気づいたり学んだりすることがたくさんありました。地域の人たちが理解をしてくれて、協力してくれて、時には主体になって。実際今は地域が主体。地域が主体だったら、自主的なコースの管理、それから見せる空間づくりを、ちゃんと自分ごとにしてやっています。看板を作ったり、花を植えたり、公園スペースを整備したり。大塚さんがやったから大塚公園、丸山さんだから丸山公園。丸山公園は行って帰る道だったんですけど、周回コースにして言ったら、ちゃんと周回コースになっていました。

フットパスの歩き方はどんな歩き方ですかとか、よく聞かれるんですよ。イギリスの発祥とか言う勇氣はないので、鶴瓶の家族に乾杯、プラタモリ、ダーツの旅、この三つを合わせたものだよって言う地域の人「あー」って納得してくれる。これが一番良かった。おもてなしってよくお茶を飲ませることと言っているけど、そういうのはおもてなしじゃない。生活圏を歩かせてくれる、

フットパスを進めながら、気づき・学びを即活かす  
 ◆歩き

- ①歩くスピードは見えるものの量・質が違う
- ②五感を使う 視・聴・嗅・味・触の五つの感覚
- ③寄り道・道草・回り道の楽しさ
- ④滞在時間 ～満足度～
- ⑤旅のニーズを満たす
- ⑥心と体の健康につながる

◆地域の人たち 理解→協力→主体へ

地域の人たちが生業を営んできた所、意識せず守ってきた生活圏

◆地域が主役

自主的なコースの管理から、見せる空間作りへ(自分事)

◆イベントはコースのPRと地域のファンづくり

地域が歩く人がいることに慣れる

- ◆地域の人たち「ここは、わざわざ歩きに来る人がいる」  
気づき・安心・自信・誇り→行動へ
- ◆フットパスは「歩きに来てもいいよ」分かりやすいサイン



フットパス→理解→協力→主体→行動へ（地域の人たちの伸びしろ）

「フットパスの歩き」は  
シナリオのない

・鶴瓶の家族に乾杯



・プラタモリ



・ダーツの旅

テレビには旅番組が溢れている

よくおもてなしという言葉聞くけれど  
 「おもてなし」と「地域が潤う仕組み」を  
 「勘違いしない」



仕事場を歩かせてくれる。今までとこれからは同じ、新しい行動は全然せず、同じ仕事を繰り返す。そして一番のおもてなしは話し相手になってくれることです。

地域が潤ってくれないといけないということで、業者さんをお願いしたのはフットパス弁当。基本美里産の食材で、そして容器は竹の皮から作ったもの。縁側は休憩用。それから職業体験、お祭りの時、容器を持ち寄って食べてたのを一緒に食べます。

軽トラの荷台でおやつ、軽トラ貸せて言って、実はこれ大学生が来たとき軽トラの炊き出しだと食べなかったんです。なんで食べないのって聞くと、カフェだから、コーヒーとケーキだと思ったというから、違うよ、田舎のカフェはこれだよ、っておばちゃんたちと話していました。

### ■ 美里フットパスの実績

歩きに来るのは何人くらいですかって必ず聞かれます。でも私たちはわからない。なんでかという、カウントできるものが主催イベント、ガイド予約、研修で歩く、これらの合計は分かります。マップは販売していますが、入場券ではない。一人一枚じゃないので、マップの販売数はわかるけど、何人来たかわからない。最初はこれだけ聞かれるならばちょっとカウントしないといけないよね、という話になりましたが、カウントしていくとどうしても大変になるので、今はもう分かりませんと答えことにしています。

受賞歴はあまり言わないのですが、見せると協力してくれるようになります。

今19コース目を作ってるんですけど、その地域の人たちはやっとうちの村にもコースが来たって待っていている。観光地ではない地域の日常が、歩きに来た人たちの非日常なんです。例えば旅行会社が800人を連れてきたいと言われたら、「交流ができないので」と断ります。地域の人たちが私たちを信頼してくれている。今日はバス2



台半, 80人歩きに来てるんですけど, 地域の人たちもよほどのことがないと大人数は受け入れられないということが分かってるので, ちゃんと対応しています.

## ■ 目標の設定と実装

ブームは2, 3年で去るけど, 4, 5年で終わる. ムーブメントを起こすには10年かかるから10年間頑張ろうねっと, 最初から言ってきました. オルレと同じ2011年から始めたんです. 10年過ぎて, 今は交流人口を増やすから, 減らさないということに目標が変わり, マップのリニューアル, 1年に1つずつコースを作っています. マップをリニューアルしたのは, スタート地点になかなか行けないということで, Googleマップを入れましたし, それから説明書きがあっても老眼鏡をかけないと見えないよねということで, 説明を全部省いて町の観光のアプリに行くようなQRコードを載せました.

セルフで歩く人にとって休憩できるお店なんか全然ないわけですね. 町内全戸に縁側を休憩場所にしませんかと募集しました. 休憩場所を提供する人がのぼり旗を立てます. 何か販売があるときはミニマルシェ, 農作業に忙しい時は休憩だけどうぞって, その時は私たちがいて, 話し相手になる, というのをやっています. その中の2軒が民宿を買い取りました. 一軒はパン工房として始まったところに, カフェスペースができ, 予約があれば宿泊できるようになっています. 縁側カフェを拠点とした体験メニューの開発では, フットパスを歩きながら採集した材料を使って, 料理したり, コケ玉を作ったり, 棚田で田植えや稲刈り, お茶摘み体験, タケノコ掘り体験など, といったことを進めています.

## ■ 美里フットパスの特徴

### 歩かせていただくならば、地域が潤う仕組み

町内の業者による「フットパス弁当」の提供



コースに飲食店が少ない!

基本、美里町産の食材・容器の統一

潤う仕組み：今までの経験を活かせる、地域の人の出番を作る  
縁側カフェ（休憩料）・食の体験（体験料）



・田舎のお茶請け、お祭り料理がご馳走&交流の場

### 潤う仕組み

今までの経験を活かした、地域の人々の技術と材料



手作りできるもの、地域の味、地域の産物  
演出【飾り付け】



### 大人気の軽トラカフェ

意外な場所に待っている、田舎ならではのおもてなし

移動ができるからどこでも だれでも!

美里の特徴は、フットパス協会（行政とか会員とかいますけど）、訪問者（歩きに来る人）、それから地域が、きれいな三角形をしてるところなんです。

私たちは一番大変なのはコース維持管理だというのが分かっていたので、コースの維持管理は地域の人たちがします。時々草ぼーぼーになるので、声をかけて4,5人で歩きにいったらワイワイやると、だいたい1週間以内に草がなくなる。ただ、今は歩きに行くこともありません。いつもきれいだから、だから歩くイベントはしなくてはいけない。本当はセルフで歩く人たちがたくさんいるのでイベントをやめようとしたことがあるんですが、地域の人たちが、祭りのような年中行事としてやっていきたい、ということで続けています。

また、月1で旅行会社が美里のフットパスに歩きに来られています。もう3年目です。1ヶ月という短い間隔だけど、違う季節に歩くからすごく満足される。

10年間で20コースまでできたので、これからの10年間も、いろいろなコースを使ったり、いろいろな団体と体験を組み合わせたりして、地域の人たちが主役になれる場を作りながら進めていきたいと思っています。

## 2. コメント 上田裕文（北海道大学）

皆さんこんにちは北海道大学の上田です。お三方のご発表どうもありがとうございました。

大変興味深かったのは、事業としてのアプローチやきっかけなどで、強調している部分は違いますが、最終的に目指しているところが一緒であること。このアプローチの違いが三者三様で際立っていて面白いな思いました。

クアオルトはやはりその地域のまちづくりの仕組みです。健康づくり、健康まちづくりの仕組



・マップはセルフで歩く  
・人集めではないのでカウントできない

年	主催イベント	ガイド予約	研修で歩く	合計	マップ販売 (セット数)	マップ販売 (コース数)	
2011	2年間で10コース（H25 +5コース）						
2012							
2013	237	201	198	636	1,237	6,185	
2014	436	468	458	1,362	1,032	5,160	
2015	315	621	421	1,357	872	4,360	
熊本 地区	2016	173		262	435	221	1,105
2017	191	105	98	394	280	1,400	
2018	345	246	297	888	579	2,895	
2019	9回：215 4組：158	8団体：116	489	280	1400		
2020	2回：26 9回：217	1組：8 3団体：34	4団体：65 99	122 251	610 45 752		
コロナ	マップの改訂 1コース追加 5コース500円×3セット=15コースから16コース1200円へ						

【受賞歴】  
平成25年度 熊本県農業コンクール 食と農部門 優良賞  
々 熊本の星 優秀賞（火の国未来づくりネットワーク）  
平成26年度 熊本県地域づくり夢チャレンジ大賞  
々 全国地域づくり推進協議会会長賞（国土交通省）  
平成27年度 熊本県健康づくり県民会議表彰  
令和元年度 熊本県景観賞（フットパスのある風景）  
令和2年度 過疎地域自立活性化優良事例表彰（総務省）

【外部評価】  
熊本日日新聞社（熊本県熊本市）  
美里町が九州のフットパスのリーダーである  
フットパス声北（熊本県芦北町）  
美里フットパスが全国のモデルになっている  
阿蘇地域世界農業遺産推進協議会（熊本県阿蘇市）  
地域を巻き込んだ取り組みはこれまでにない  
吉野ヶ里町観光戦略協議会  
地域全体を巻き込む活動はこのフットパスが初めて

【地域の人たち】  
「やっとうちの村にもフットパスコースが来た」

観光地ではない地域の、日常が非日常【受け入れられるキャパシティの問題】  
交通できない人数の受け入れは地域の日常ではなくなる

ブームは経費をかければ2〜3年で来るが5〜6年で去る  
ムーブメントを起こすには10年かかる＝覚悟と美里の時間

「交流人口を増やす」から  
**10年がすぎて「交流人口を減らさない」へ**

①既存15コースのリニューアル  
マップの改訂  
スタート地点・観光スポットはQRコード

②新規コースの開設  
19コース目を作成中

みというところが入り口で強調されていたというように感じました。一方オレはどちらかというと訪問者の方の歩く道という、訪問者が主体で始まっていて、それがだんだん街になり世界に広がっていて、つながっていく、そこからが入り口になっていったという印象です。フットパスのお話は、どちらかというと地域の人々がスタートになっている。印象的だったのは、フットパスはツールだというようなお話で、まさにそういったフットパスを使って地域の人たちがどのように変わっていくか、ということが強調されていたのかなと思います。いずれにしろここで重要なのは、それぞれの事業は入り口であって、それが発展していった先の目指すところは、実は一緒なのかなというところですね。事業は最後に井澤さんもおっしゃられたように、あくまでもツールであるということが大変印象的でした。

## ■ 散策路事業の論点

各事業に関して、多分皆さんも、いろいろ掘り下げて聞きたいことがたくさんあると思いますが、今回は学会のミニフォーラムということで、こういった論点が大切なのかなと、私が皆さんのご発表を聞いていて感じたところを少し述べさせていただきます。

一つが、今申し上げたように事業は結局入り口だったりとかツールだったするかもしれませんが、岡村先生の導入のところでもお話であったように、事業には目的や手法があって、それが社会のトレンドとかとも結びついていたりするところもあるかと思っています。

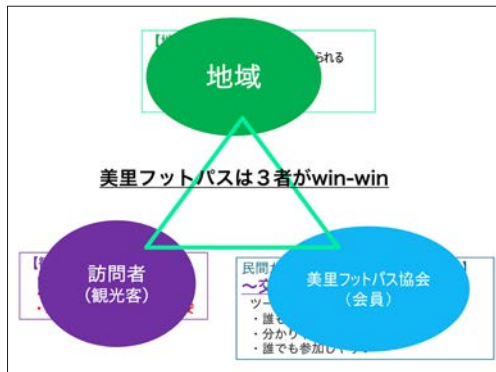
一方で、今回のタイトルでもあるストックの喪失と継承でに焦点を当てた時に、こういった形でストックを創出し継承していけるか。最後の井澤さんのお話でも交流人口を減らさないようにしていくという話ありましたけれども、今日本全体も人口減少でそのままでいけばいわゆるインフラとしての道はあつという間に廃れていってしまう。

「セルフで歩く時、休憩場所が欲しいです！」  
に応える形で始まった緑がわカフェ  
町内全戸配布で募集 美里フットパスイベントの休憩場所に



- ◆2軒が民宿開業
- ◆パン工房からカフェスペースへ
- ◆緑がわカフェを拠点とした体験メニューの開発  
・ 苺玉作り・山野草クッキング・田植え&稲刈り・茶摘み・菊掘り等

フットパス+体験を組み合わせた観光メニュー開発へ

今回のご発表は、基本的には道があることを前提として、それをどういう風を使うかとか、それをどう維持するか保全するか活用するかそういったお話でしたが、そもそもそのストックとしての道自体も、多分皆さんも現場で実感されていると思うんですけども、何もしなければ、1年、数年と放っておくと、一気に荒れ果て使えなくなってしまう。こういったそのストックとしての散策路をどうやって創出継承していくか、人口減少とか社会の構造も変わっていく中でどういう風にしていくのかというそこら辺について、どういう工夫が行われているかを議論できたらいいのかなと思いました。

もう一つが、今回の造園学会のテーマがデジタルトランスフォーメーションであったということもあり、そこら辺を聞いてみたいなと思っています。

それぞれの地域で今回コロナ禍を経験して、いろんなデジタルが発展する中での実践、あと、参加者も多分1回減少したかと思うんですね。コロナ禍を経験して見えてきたいわゆるオンラインのコミュニケーションと、現場で人が触れ合うとか、現場で人が道を歩くみたいなの、リアルで人が歩くことの大切さみたいな。今後この事業とかを継続して発展させていくときに強調した方がいいかなと感じられること。もしくはデジタルトランスフォーメーションでいくと、多分参加の方の参加の仕方とかで、デジタルデバイスみたいなものがどんどんどんどん入り込んでくると思うんですけど、そういった時代の中で、今の散策路の活用がどういうふうに変っていくのか、それに対して今考えている対応だったりとか、今後の見通しみたいなものがありましたら。

今後に向けてこのストックの創出や継承ってのが、次の社会というか長い目で見た時にどういうふうに行われてくるか、という点でお話していただけるといいかなと感じました。



## 4. 総合討論

片桐 それでは討論に移りたいと思います。

空間ストックの創出・継承の実績と時間的なスパンについて、上田先生からあったような、トレンドに左右されるといっても踏まえたいうえで、どのように考えて皆さん取り組まれているのか、その際に課題になるようなところを議論したいと思います。最終的には、継承するための課題との関係性が議論できればと思います。

まず、時間的なスパンをどのぐらいに捉えて、まちづくりや環境に対する取り組みを考えられているのかをお伺いしていきたいと思いません。小関さんお願いします。

### ■ 散策路事業をタイムスパンで見ると

小関 自治体の場合は自治体の総合計画は10年なので、それに見合う10年という形で、ほぼ10年先どんな街になっていったらいいんだろうなというような考え方はしています。参考ですけども湯布院温泉ですと取り組んだ時に100年のまちづくりだと言っていました。環境保全につなげるには100年かかるということでしたが、上山の場合は100年先というよりは、まず10年先という町になっていけばいいかを考えていました。

片桐 上山のクアオルトは、今15年にやってきて、次の10年の計画を立てるフェーズだと思うんですけど、その10年の中での状況の変化とか、今までの10年とその先の10年で検討がするところの変化はありますか。

小関 ドイツの医療を基本にしながら健康づくりを取り組んできたので、医療と連携できればいいなというのが一番大きなポイントなのです

が、それがスマートライフステイという、特定保健指導について、上山はモデルケースとしてしっかりでき、評価され、医療とも少しは連携している。この一歩先に行くと、岐阜市の場合だと市民病院や大学が連携して心臓リハビリに活用している。というのは心臓疾患から半年間は医療の手当があるんですけど、半年後からは自分でやっていかなければいけない。そこで運動しなくなると、次のイベントでまた重大な事故が起こりうる。なので、半年以降はクアオルト健康ウォーキングを使いましょう、ということをや岐阜市で取り組んでいる。これが医療行為として、医師が処方するという風になっていければよいと思います。医療の中で連携しながら認めてもらえるようなところに行ければ一番いいと思います。

片桐 医療の方もありますが、それ以外のインフラとしては予算の確保といった視点から、企業の連携によって公園や散策路ができてきたといった状況がありますよね。

小関 医療保険組合や健康経営にとりくむ企業が、自治体との健康づくりのメニューとして健康ウォーキングをしていますのでやりやすい方向には進んでいるのではないかと思います。

李 チェジュオルレは、サンティアゴの巡礼の道を参考にしたんですけど、千年たっているんですね。それを私たちは100年は続けようと思いましたが、100年続けるために今までの15年間は点を線に、これからは面にしていこうという作業にかかっています。点在していた観光地をつないで線にしたのが今までの手法で、これからは線を面にしていく作業。そこに住んでいる人たちと一緒に道を作る、地域の財産にしていこうということです。という

のも、韓国の道がどんどんアスファルト化しており、九州も同じですが、今この道を私たちが守らないといけない。私たちがせっかく真剣に探した道の個性として守ろうと考えています。私たちはbe walk という風に、今までの15年間は個人の癒し、個人が歩いて精神的、肉体的に健康になろう、ハッピーになろうというように考えていたんですね。ゆっくりのんびり歩きながら、休みながら考えましたが、これからの100年は、これを「私」じゃなくて、「私たち」で分けながら夢見ながら事業を進めていこうと考えています。

岡村 九州はまだ地域の参画がやや弱く、行政主導の印象ですが、チェジュでは道の整備をボランティアさんがしていますよね。その辺の仕組みはこれからでしょうか。

李 そうですね。九州の場合は行政の事業としてやっているの、資金的には困っていないんですね。チェジュオルレから見るとそれは羨ましい。チェジュオルレは完全に社団法人非営利団体なので、独自の事業で資金を得る必要があります。それに企業からの寄付を受けてやって運営している。九州の場合は自治体の観光事業でやっているの、予算的には困っていないんですけど、行政担当者が担うことで、4月に異動してしまうといったことが大変ですね。そういうことがないように、各コースの担当者と私たち協議会で共有するために集まって会議したり、一緒に済州島に研修に行ったりしています。それからもちろんその地域の人たちが関わらないといけません。全てのコースではないですが、1/3は地域に完全に密着してガイドの会だったり、地域の人たちのボランティアの組織を作ってコース整備を手伝ったりしていく。これを増やすことは課題になっています。

井澤 10年やってきてフットパスが定着して歩にくる人が増えてきたので、次の段階に行くよねというようなことはあります。フットパスを始めた時、隠れた目的がある、と言っていました。行政の社会インフラの手当てに割ける力が落ちている。だからこそ、人を呼び込んで、ここの地域は人がいっぱい来るということを示しておかないと、自分たち自身が生活しにくくなる。来訪者が3時間以上滞在すると3000円以上の消費がありますよ、と言いながら。また、地域に人が来ることで行政側の見方が変わってくる。

コロナの時やはりイベントもちょっと自粛したんですよ。地域の人に迷惑かけるかなと思って。でも、自粛をしたら地域の人たちが、歩くからいいじゃない、歩きに来てもいいよ、ということでまた歩くのを始めました。地元の体験と一緒にすることはきなくなったけど、一緒に食べない方法があるよという声も出てきたんです。美里地域には昔使っていた一人前のお膳があるんです。今は全然使われていないけど、これを使えば一人づつ個別にできるから、と言ったら、「結婚式の時作ったお膳がある」とか、いろんな話が出てきて、また新しい展開が出てきた。関わる人たちが増えてきたから、新しい知恵も出てくる。「こんなのどう」と言われた時に否定するのではなく、まず1回受け入れてどうにかできないかな、というような感じで続けていく。

それから、「これから」とかいろいろ言われると地域の人はずんとなるんですね。俺たちはもうあと10年も元気でおれん、ということで。外ではこれからのこと言うけど、地域に対しては今をどうするか、来年の話題までしかしないで、うまくそのまま進める。そこをちゃんとしていかないと、何気なく若い人たちが「これから」をいうと、地域の人たちは疎外感を受けてしまう。

SNSは苦手じゃない人もいるけど、苦手なフリをして、写真撮ってアップするというような、うまく役割分担をしていくのが、今からの10年間から関わる人を増やしていく方法です。いろんなツールとして使って関わる人を増やしていくと、10年後の私はいなくても、そういうふうに戻っていくのかなと思っています。お二人の話を聞いて勉強になることがたくさんあります。健康づくりも県からの事業を受け入れたり、そういう方面でもいろんなことがある。10年と言わずに2、3年後にでもそれが取り入れられたらいいのかなって思っています。

岡村 絶妙なバランス感覚ですよ。主体感の連携もそうですし、事業をどう進めていくかというのもすごいバランスよくやっている。

片桐 その差配というのを、井澤さんの言葉でこんな感じかなというのが、いろんな動きにつながっている。

井澤 おっしゃる通りで、私はおばちゃんだから言えることがあるので、男性だったら言えない部分も私だったら言える。そのへんもやはり役割分担だなと思っています。

## ■ 散策路事業の抱える課題

片桐 ここで課題を共有したいと思います。問題の箇所、クリアしきれていない点、今力を入れているところなども含めて、お話しください。

小関 クアオルト健康ウォーキングでは、行政が主体になっていると言いましたけれども、全て行政が進めると、参加者が増えないといった事態になったりする。健康というのはあくまで個人で増進するものなので、たくさんの人

たち、個人や企業の健康経営の関係者に関わってもらうことで、品質を上げていくという方法をとっていかないと、習慣になっていかないのではないかと思います。なので、協議会には、金融、警察も含めて、様々な方々が健康づくりに関わることで、うちの会社の従業員の方々の健康をどうやって楽しんで向上するかとか、うちの会社は建設だから、いろいろな技術や重機を活かして、地域の人のためになることができるんじゃないか、など、想いを実践するような仕組みを作り、なおかつ貢献があった時には、しっかり取材をして広報に掲載し、いろんなところで、この企業はこのように皆さんの健康づくりに寄与している、ということを伝えていくことが大事だと思っています。今まで、荒れていた道が使われることになってすごくうれしいという地域、率先して環境を整備する地域、ごみ拾いをしてくれる人もできています。クアオルト健康ウォーキングはミュンヘン大学の認定コースですが、これ以外にも集落の近くに自分たちの歩いて楽しめる道を作ろうという公民館単位の取り組みをしています。地域が、地域の文化や自然を見ながら、傾斜地があって見晴らしが良くて、緊急の時には搬送できるようなという視点で、自分たちで健康になるコースを設定して、道を作り、維持していくというやり方です。最初にコースを作るときには、公民館事業として行政に参加してもらい、費用を公民館に渡して地域の住民が自分たちで探す、という主体的な取り組みをお手伝いしたいと思います。たくさん業種の人、住民の方も関わっていくことが、維持管理やそれによる技術の向上につながるのではと思います。そのような取り組みをしています。

片桐 今後クアオルトを展開する時に行政に期待す

る役割について、どうお考えですか。市長の交代などで政策方針が変わったり、行政がやる気を出しすぎてもうまくいかなかったり、といったことから、いろいろと調整をされていると思いますが。

小関 なかなか難しいですね。行政が予算を持っているから口出しをしてきますが、やはり主体は住民です。2000年に上山が総合振興計画を作った際に、協働のまちづくりという視点で、行政の予算は潤沢ではなく、マンパワーも少なかったのですが、市民の方々から、共にやりましょうという事になりました。まちづくり先端にいた湯布院温泉と連携して、まちづくりを教えてもらい、それ以降も、様々なところで連携や協力をする関係性ができた。行政が変わったら全く変わるということはない。首長が変わっても、国民の健康や住民の健康はないがしろにできない。社会保障費も増えている中では、「健康でいたいという」意識が高まっているので、これをどう具体的なプログラムで支える仕組みや手法を考えるとはいくらでもできる。今まではスポーツ施設を作りました、「はい、皆さん使ってください」というサービスの提供をしてきた。それで市民が運動したかという、8割の人たちに運動習慣がないと言われていまして効果が薄い。これを、どうサポートすれば、自分の体が良くなったことを体験し、有効であるということを理解してもらえるのか、ということ行政は考えなければいけないし、市民の方に理解してもらわなければいけない。その一つの大きな要素がメンタルヘルスです。上田先生に事例研究していただきましたが、身体的な改善だけでなく、心も歩くことで改善していくということの大きなきっかけになるので、心身を改善していくというアプローチで、住民のQOLを向上させる。研究

機関はそのエビデンスを示し、市民や行政の理解を深める、といった体制ですすめられればと思っています。

岡村 巻き込みという意味では、旅館のご主人がガイドをされるなど、巻き込みの状態が上山では実現しているのかなと拝見しましたがいかがでしょうか。

小関 実際に参加してもらって、自分で体験して良さを感じてもらうことが大きなきっかけになるので、様々な業種の人に参加していただける機会は確保していきたいと考えています。

李 九州オルレもチェジュオルレも同じですが、歩いている年齢層が、50代から70代の方に偏っているのが課題だと思っています。イベントだと参加者の集計をとっているの、あまりにも偏っていることがわかるんです。それで、もっと若者に歩いてもらわないといけないと考えています。チェジュオルレの場合は若者向けの情報を発信しています。今はフェイスブックやインスタグラム、特にインスタグラムを使って、歩くのがちょっとかっこいい、という見せ方で、一生懸命情報を発信しています。

最近の若者は、ただ歩くのではなく、それが何に役立つかを重視する傾向があって、例えばプロギング、ごみを拾いながら歩くことで、歩きながらごみを拾うということを若者たちとやっています。いつも活動しているボランティアが300人くらいいるんですけど、そのボランティアも50代60代70代の方が多く、これとは別に、ボランティアの中で若者のコミュニティができるように、20代30代の若者の運営を別に作りました。また、最近はやはりデジタル化ですね。オルレでは、パスポートに参加したコースのスタン

プを押します。チェジュの場合はスタート、中間点とフィニッシュの3つ、九州の場合、スタートとフィニッシュの2つとちょっと違います。若者たちからこのスタートを夜中にしたいという、という話があり、九州オルレでは多額のお金を使ってデジタルのスタンプを作りました。でも、アナログのスタンプを好む人が多く、90%はアナログです。歩くこと自体はアナログなのでしょうがないかと思えます。

九州オルレは観光で始めたウォーキングなので、やはりたくさんの方が歩きに来ないといけないと思っています。それでイベントをやってみたりしています。コロナでは休止になっていますが。

自治体の状況による継続への課題としては、自治体担当者によっては、本当にこの事業をやりたいような人もいて、やめたものがあったりしますが、あまり歩きに来る人がいないコースに予算を割くことは難しい、と止めたものもあります。

また、韓国人が来た場合、よりスムーズに九州オルレを周ってもらうために必要なこと、九州オルレだけではなく、九州観光の全体の問題ですが、都市間のアクセスが本当に難しい、ということがあります。福岡とかすぐ近くの島原と南島原と天草は問題がなく、あとは車で行けばみんな移動できるんですけど、二次交通で行こうとすると本当に大変なので、外国人が一人で行きやすいようにするには、どうすればいいのかを考えています。

片桐 元の場所に戻らなければいけない車移動と違い、歩いてその先の地域にいき、楽しめることが徒歩での散策なのですが、それを許す公共交通のインフラが無いことは大きな制約になりますね。

李 日本人だといろんなアプリなどを使って何とかいけるけど、外国人はやはりバスに乗ることも難しいので、時間を決めてこの時間だとこのように行ける、と伝えるしかないと思います。

岡村 そういう意味ではチェジュはバスとうまく連携し、外国人でもわかりやすいですね。

李 それも最初からできたわけじゃなくて、歩く人たちが増えた中でそのコースの通りにバス停ができるようになりました。本当に卵が先か鳥が先かになりますね。増えればそういう取り組みもできるし、先に交通の問題を解決しないと人が来ない、という課題はあります。

井澤 同じようなことで、ここに来れば大満足できるけど、そもそも、来るのか、という思いがあります。一番のところにみんな行ってしまいうだろうな、みたいなことですが、日本全体がどうかしないといけない。デジタル化の話で言うと、マップのリニューアルのとき、オンラインにするかアナログにするか揉めたんです。地域の人たちは、歩く人がマップを持っているのがアナログだけだと安心する、10年間で慣れていたので、それがiPhone持って歩き始めたら、フットバスを歩いている人なのかが見た目で見えなくなる、ということで今回まではまだアナログだけにしようねということになりました。また、公共交通機関が廃止になったりするので、イベントとして公共交通機関を使いましょう、というようなコースを作ったりして、なるべく公共交通機関を使うようにしています。それが年に何回かあれば、行政の方でも見るのが変わってくるかなという。すぐにはということではないけど、ある程度効果はあるよねと。

もう一つは、Walkers are welcome美里とか、

Walkers are welcome ○○とか、welcome ○○とかというのは出来ているのに、歩く人たちがまだそれに慣れていない。だから歩く人も育てないといけないと思っています。受け身じゃなくて、能動的に楽しむ歩き方が分かってもらえてないと満足度が低い。だからイベントは完全に、歩き方を教えるというのが一番の目的になっています。地域の人は、ただ歩くだけじゃだめで、やはり交流が無いと、次も自分たちが何かをしようという形にはなっていないので、歩く人たちにときどき言うんです。たとえば、写真撮るときに黙って撮らないで下さい、ということも言います。「綺麗だ」とか「珍しい」とか言ってくれると、地域の人たちが「じゃあうちの庭の花を見てね」みたいな、交流の次の段階入れるので、こちらからも働きかけるといことがすごく大事だと。私たちがガンガン進めちゃう部分からちょっと引いたところで、歩きに来た人たちか、「すごく生け垣が綺麗なところがあるんですよ」で、「石垣の草取りボランティアとかあったら来たい」とか、そういうのを大きな声で言ってくださいとか、その段階にきているのかなと思っています。それが、地域にいろいろ経費とか、知恵を持ってきてくれるかなと思っています。歩きに来ただけではなく、歩きに来ることによって触れ合う、地域貢献につながるような形に持っていくのがこれからの10年だし、ずっと続けるための流れ、きっかけになるのかなと思います、悪知恵を働かせるようになりました。

## 4. 総括

今回のフォーラム、事前に全員で打ち合わせた訳ではなかったのですが、どのように議論が進むのか心配していましたが、かなり近いところで少し違うことやっているということがわかり、かなり噛み合った議論になったかと思います。今回だけではなく、これを機に継続して情報交換できるになるとよいのではと思いました。

また、ウォークブルを成り立たせる公共交通など、散策事業を展開するにあたっては、結構広く社会的な問題が関わってくる、取り組みを進める中でのそのあたりの広がりに対する気づきが重要なものだったと感じました。また、歩くことに自分の楽しみや健康増進ではなく、ゴミ拾いなどの社会的な意義を持たせることで付加価値の向上というの、今後注目すべき点だと思います。そして、李さんが冒頭でおっしゃった、「歩く人がみんな幸せになる」ということが、散策路事業のねらいとしての共通項目である、ということを改めて感じました。この「しあわせ」が、個人から社会まで、分野を横断して広くつながっていることを、それぞれの方のお話しや議論を通じ、共有できたことも今回のフォーラムの収穫であったように思います。

私たちの散策路の研究では、今回のフォーラムの内容も含めて、散策路事業の展開による地域のストックの創出と継承について、まとめていこう考えています。

# 3 実践

---

## 暮らし体験型散策路の計画・提案

2019年 三井不動産商業マネジメント株式会社  
首都大学東京観光科学研究教室「暮らし体験型散策路」プロジェクトチームとの共同研究

## 冊子「小出川フットパス」

2019-2022年 アーバンデザインセンター・茅ヶ崎および東京都立大学岡村研究室の協働

## 歩いて発見 モノはちルートウォーキング

2022年 多摩都市モノレール八王子ルート整備促進協議会事務局および八王子市都市計画部交通企画課から  
東京都立大学岡村研究室への委託プロジェクト

## 暮らし体験型散策路の計画・提案

三井不動産商業マネジメント株式会社 首都大学東京観光科学研究教室「暮らし体験型散策路」プロジェクトチーム

本プロジェクトは、2018年度学部演習プログラム「観光科学プロジェクト演習（PBL）」を経て提案された散策路の提案を受けて、大学近傍のアウトレットモール運営会社である三井不動産商業マネジメント株式会社との産学共同研究として取り組んだものである（研究課題名：「アウトレットモール来訪客への「暮らし体験型散策路」の計画提案—犬連れの来訪客を中心として」）。

ニュータウンにおけるレクリエーションを通じた地域での暮らし体験プログラムとして、八王子市南大沢地域を対象とし、アウトレットモールの犬連れの利用者の散策行動を促すコースの調査・設計、そ

の周知のための地図やフォトコンテストなど伝達メディアのデザインについて、産学連携体制のもと、学生を中心としたプロジェクトチームによる実践的な検証を行った。

成果物は、三井アウトレットパーク多摩南大沢店のウェブサイトにおいて「ペットとおでかけしよう」として掲載された。

### プロジェクトメンバー

大学院生：関谷悠・赤塚哲史

学部生：須田万貴・竹田彩夏・三石真由

指導教員：岡村祐・片桐由希子・野田満



三井アウトレットパーク多摩南大沢店のウェブサイト「ペットとおでかけしよう お散歩編」  
<https://mitsui-shopping-park.com/mop/tama/special/pet/osanpo.html>



# 2020

首都大学東京観光科学教室  
「暮らし体験型散策路」  
プロジェクト  
活動報告  
2020年3月発行

## 暮らし体験型散策路の計画提案

# 南大沢で ワンちゃんと ピクニックしよう！

首都大学東京観光科学教室「暮らし体験型散策路」プロジェクトチーム  
関谷悠／関塚哲史（大学院都市環境科学研究科 観光科学域）  
須田万貴／竹田彩夏／三石真由（都市環境学部 自然・文化ツーリズムコース）  
片桐由希子／岡村祐／野田満（教員）

### Contents

1. 南大沢をドッグフレンドリータウンに
2. ワンちゃんと散策&ピクニック
3. ワンちゃんとの暮らし・散歩の実態
4. 南大沢文化祭 & フォトコンテスト

本冊子は、首都大学東京観光科学教室と三井アウトレットパーク多摩南大沢との2019年度の共同研究「アウトレットモール来訪客への「暮らし体験型散策路」の計画提案—犬連れの来訪客を中心として」の成果をまとめたものです。

本プロジェクトは、観光まちづくりのクライアントとなり得る組織と連携し、社会的要請に応えながら新しい観光のあり方を示すこと重視した、観光科学科での演習授業「観光科学 PBL (Project Based Learning)」での計画提案から展開したものです。





## 南大沢を ドッグフレンドリータウンへ

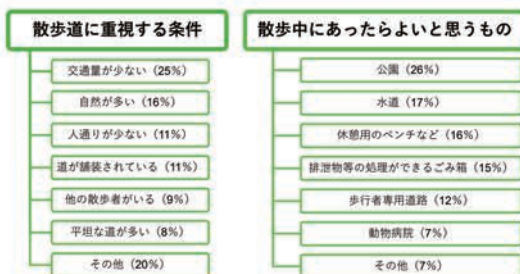
2018年度「観光科学 PBL」で、自然・文化ツーリズムコースの3年生が取り組んだ課題は、アウトレットパークへの来訪者に対する南大沢のまちでの観光・レクリエーションを提案でした。本プロジェクトは、そこで提案された「南大沢を犬連れに優しい『ドッグフレンドリータウン』にする」というアイデアを実践に展開したものです。プロジェクトでは、①まち歩き&ピクニックマップの作成、②アンケート調査、③フォトコンテストを実施しました。

## 南大沢の「犬と過ごす」ための資源とポテンシャル

アンケート調査と南大沢現状地図より、「犬と過ごす」という視点から地域の資源やニーズを分析しました。

### 犬との散歩道の条件と求めるもの

飼い主との普段の生活を知るためのウェブアンケートで、散歩道に重視する条件、あったらよいと思うものを把握しました。



### 南大沢とアウトレットパークの特徴



- +
- ・アウトレットパークを目的とした犬連れ来訪者の存在。
  - ・動物病院やトリミングサロンの充実。

### 犬と過ごすための南大沢の資源図

飼い主が散歩に重視する条件と求めるものを踏まえ、犬と過ごすための南大沢資源図を作成しました。

散策路をはじめ、公園や水道、ベンチなど、犬と過ごすための条件を満たしていることから、「犬と暮らしやすい街」としてのインフラが整っているといえます。





## ドッグフレンドリータウンの考え方と実現の手法

### ドッグフレンドリータウンの3つの柱

飼い主と愛犬が楽しめる場が提供される「ドッグフレンドリータウン南大沢」の基軸を整理しました。それは、「健康」「交流」「環境づくり」の3つの柱から構成され、それぞれの視点からまちづくりがすすむことで、ドッグフレンドリーが実現していきます。



### 手法: イベント「秋のワン祭り」からまちの環境整備へ

「賃貸に住み犬を飼っている家」をターゲットに南大沢での犬との生活を体験するイベント「秋のワン祭り」を提案しました。イベントで設定した、3つのシーン（運動会・ドッグフード屋台・手作り犬ごはん）とこれをめぐる散歩ルートは、ドッグフレンドリータウンのハード・ソフトの環境として定着させていくことをねらいとしています。



## 実践 暮らし体験型散策路プロジェクト

### まちあるき&ピクニックマップの作成

調査を通じて「愛犬と入店可能な飲食店やテラス席を増やしてほしい」という声が聞かれたこと、アウトレットパークでランチが出来るところが少ないという課題があったことから、アウトレットパークを起点に、愛犬とまちあるき、ピクニックを楽しむコースを提案しました。コースの紹介やマップは、アウトレットパークのHPに掲載、インフォメーションやペットエコ 横浜で配布しました。

### まちあるきマップに対するアンケート調査

暮らし体験型散策路をどのように計画するか、その要素や方法論を考えるため、作成したコースの効果検証を行いました。まちあるきやピクニックを実際に体験した方に、まちに対してどのような感想を持ったのか、犬と一緒に楽しめるまちであるためにはどのような環境、あるいは情報提供が必要なのか等についてアンケート調査を行い、結果をまとめました。

### フォトコンテストの開催

マップのルート上で、飼い主が南大沢のような点に魅力を感じているか知るために、それぞれが良いと思った風景で愛犬の写真を撮ってもらったフォトコンテストを実施しました。応募作品は15作品で、ペットエコ横浜店内に掲示し一般投票を行いました。33票の一般投票の結果、3つの作品が優秀作品に選ばれました！





## ワンちゃんと 散策&ピクニック

「南大沢のまちは、犬連れに優しいドッグフレンドリータウンのポテンシャルがある」という提案がプロジェクトに発展し、「暮らし体験型散策路プロジェクト」チームが発足しました。ワンちゃんと一緒にピクニックとまちあるきを楽しむことができる3つのコースを提案し、「ワンちゃんと一緒に南大沢まちあるきMAP」を作成しました。

## ワンちゃんと一緒に南大沢まちあるきMAP

多摩ニュータウンの一部である南大沢は、東京西郊に開発された計画都市です。その町の特徴である「遊歩道」「公園」「街並み・オブジェ」を活かし、犬種による散歩距離や、都合にあう所要時間によって選べるよう3つのコース「てくてくお気軽コース」「ニュータウン満喫コース」「緑のアクティブコース」を設定しました。

### 南大沢を特徴づける3つの資源



#### 遊歩道

歩車分離の道が多いため、車を気にせず安心して歩くことができます。



#### 公園

公園に至る所にあり、様々な用途に合わせて利用できます。



#### 街並み・オブジェ

ベルコリーヌ南大沢をはじめとし、ヨーロッパ・テイストのデザインの街並みを楽しむことができます。



### 南大沢での犬との暮らしを体験する3コース

#### てくてくお気軽コース

20分 約1km

広々とした遊歩道なので安心して散歩できます。中郷公園には芝生の広場や木陰、ベンチがあり、ピクニックにぴったりです！

#### ニュータウン満喫コース

30分 約3km

ニュータウンの街並みとたくさんの緑を楽しむコース。春には1kmの桜の並木道でお散歩できます。ワンちゃんと一緒に軽い運動をしたい方におすすめです！

#### 緑のアクティブコース

50分 約4km

緑溢れる遊歩道を通るため、気持ち良く安全に歩けます。上柚木公園には芝生が広がっていたり、ベンチが充実していてゆったりと過ごすことができます。





## ワンちゃんとの暮らし・散策の実態

ブース出展のイベントやフォトコンテストに参加していただいた方を中心に、ワンちゃんとの日常的な暮らしや散策、「南大沢まちあるき MAP」の体験について聞きました。

調査期間は、2019年9月28日から2020年2月10日までで、回答者は55名でした。

### ワンちゃんのお出かけ

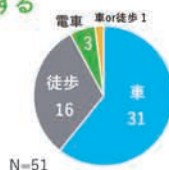
#### 平日、休日の散歩時間

平日は1時間未満、  
休日は、30分以上、  
1-2時間と長くなる傾向がみられました。



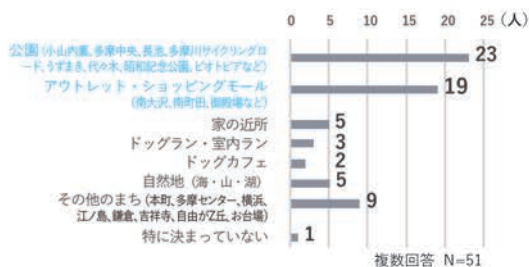
#### 休日に犬と出かける際に利用する主な交通手段

犬と出かける際の交通手段は、  
車、徒歩が多く、電車はあまり  
利用されていませんでした。



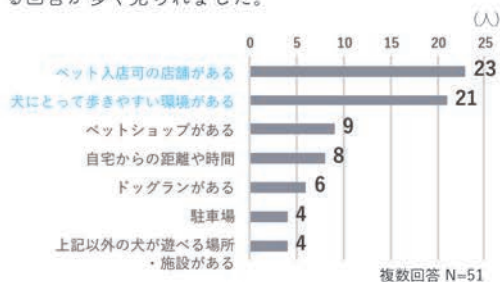
#### 休日に犬とよく出かける場所

公園やショッピングモールをあげた回答者が多く、その他にドッグカフェ、ドッグランなどの回答がみられました。

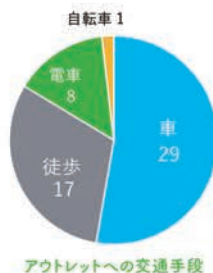
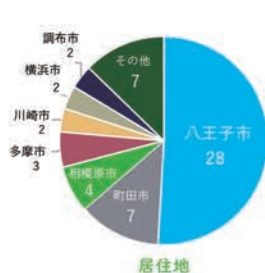
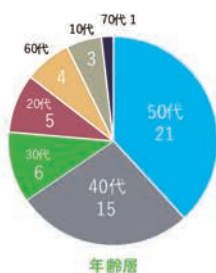


#### 犬と出かける場所や施設において重視する点

ペット入店可のお店や犬にとっての歩行環境を重視する回答が多く見られました。



#### アンケート調査の回答者の属性 (N=55)





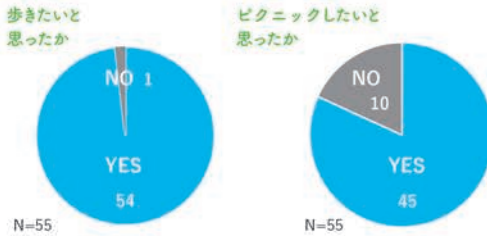
## 南大沢でのワンちゃんとの散策

実際に南大沢のまちをお散歩された方は、街路樹や公園などの自然環境に加え、遊歩道に魅力を感じていることが分かりました。この結果は、公園や遊歩道が計画的に整備されたニュータウンであることが背景と考えられます。また、多くの回答者が「アウトレットパーク」を南大沢の魅力として認識していることが分かりました。

一方、カフェや飲食店が少ない、リードフックやベンチなど休憩する際に必要な設備が少ない点に課題があるという回答もありました。これらは、マップ上にお散歩コース近隣の飲食店の紹介や、ベンチの場所を追加することで改善できるかもしれません。さらに、リードフックなどを整備することで、犬連れの方の来訪を促進することができると考えられます。

### ■「南大沢まちあるきMAP」を見て 散歩orピクニックをしたいと思ったか？

98%の回答者が実際にコースを歩いてみたい、80%以上の回答者がピクニックをしたいと答えています。



### ■実際に歩いたコースは？

実際にコースを歩いた方は55人中23人で、そのうち「緑のアクティブコース」を歩いた人が7人、残りの2コース「ニュータウン満喫コース」「てくてくお気軽コース」を歩いた方がそれぞれ8人いました。

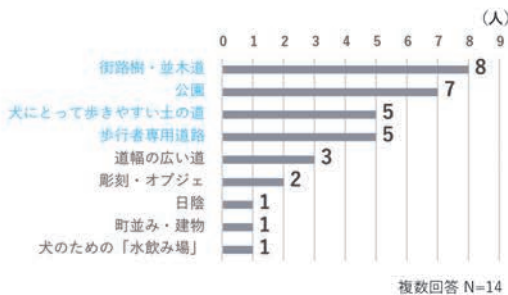
### ■南大沢で再び 散歩orピクニックをしたいと思ったか？

実際にお散歩やピクニックをした回答者23名のうち14名が再び散歩・ピクニックをしたいと回答しています。

MAPは、犬との散歩やピクニックは、南大沢への再訪問を促すきっかけになりそうです。

### ■コース内で気に入ったところ

「街路樹・並木道」を気に入ったと答えた人が最も多く、ついで「公園」、「犬にとって歩きやすい土の道」、「歩行者専用道路」と続きました。



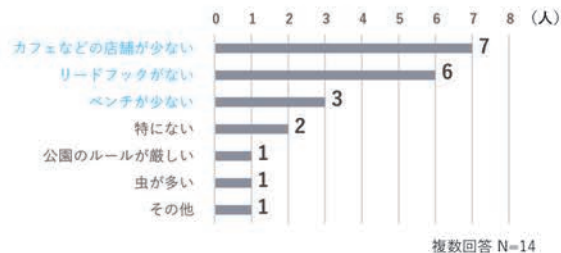
### ■南大沢で魅力的であると思った環境

「遊歩道」が魅力的な環境であると答えた人が最も多く、ついで「アウトレットパーク」、「景色・景観」の順で多い結果となりました。



### ■犬と散歩をする上で 不満に思ったところ、改善点

「カフェなどの店舗が少ない」と答えた人が最も多く、ついで「リードフックが少ない」「ベンチが少ない」の順で回答が多く見られました。





## 南大沢文化祭出展 & フォトコンテスト

ドッグフレンドリータウンとしての南大沢と暮らし体験型散策路の取り組みをアウトレットパーク利用者に周知するとともに、取り組みに対するフィードバックを得ることを目的としたブース出展、フォトコンテストを実施しました。

マップに掲載されている散歩コース上での撮影を条件としたコンテストへの応募作品は15点。一般に投票いただいた33票から3作品が得票同数で優秀作品に選ばれました。

### 南大沢文化祭 ブース出展

2019年9月の2日間、南大沢文化祭にブースを出展しました。パネル展示とともに作成したマップを配布することで、プロジェクトの取組をアウトレットパーク利用者に周知するとともに、そのフィードバックを得ることを目的としたものです。アンケート回答者には特典として、インスタントカメラで撮影した写真をプレゼントしました。マップについては概ね好評評価をえられましたが、マップを見ていただいた方に実際にまち歩きやピクニックを行ってもらうためには、さまざまな工夫が必要だと分かりました。



### フォトコンテスト

2019年12月～2月にかけて「南大沢でわんSHOT!」と題し、ワンちゃんのお散歩シーンを通じて、南大沢のまちの魅力を伝える写真を募集しました。マップに掲載されている散歩コース上での撮影を条件としたコンテストへの応募作品は15点。ペットエコ横浜店内に掲示し、一般投票を行いました。投票数は33票、3作品が同率1位で優秀作品に選ばれました。

投票のコメントでは、犬の可愛さのほか、南大沢の風景に関するものが見られました。桜並木、紅葉、菜の花畑など四季折々の風景、南大沢の街並み・首都大学東京など一年を通して見ることの出来る景観について評価が高いようです。また、「写真を撮った場所に行ってみたくなった」「静かな公園なら遊ばせてみたい」「ワンちゃんを飼ったら散歩してみたい」など、作品を通じて散歩したいと感じた方もいらっしゃいました。







## 冊子「小出川フットパス」

アーバンデザインセンター・茅ヶ崎および東京都立大学岡村研究室の協働

### はじめに

UDCC：特定非営利活動法人アーバンデザインセンター・茅ヶ崎（高見澤和子理事長）は、公・民・学が連携して、市民性と専門性を兼ね備え、社会の課題に対して都市空間のデザインからアプローチする組織として2016年に設立され、2022年3月にその活動を終えた。その最後に取り組んだのが、「小出川フットパス構想」である。本研究課題の代表である岡村が、UDCCの副センター長を務めていたこともあり、当該活動を全面的に支援した。

小出川は、茅ヶ崎市西部を縦断する一級河川である。その小出川を取り巻く課題は、自然環境や歴史文化の保全、市民の健康増進、観光・レクリエーション振興など多岐に渡る。「小出川フットパス構想」では、川沿いの資源発掘、歩きやすい環境・歩きたくない環境の整備はもちろんのこと、最終的には流域全体としての地域ビジョンの構想し、流域独特のライフスタイルを創り出すことを目指した。その第一歩として制作・発行したのが小冊子「小出川フットパス」である。

### 小冊子制作のプロセス

小冊子の制作に際して、UDCCは2019年度に、河口から源流まで4回に分けて、特に景観、地形、歴史文化の視点に着目し、現地踏査を実施した。そして、2020年度コロナ禍で活動が制限されるなか、UDCCがウェブサイトで公開した「Discover Chigasaki 景観まち歩き10選」(<https://sites.google.com/view/udcc/landscape/why-景観まち歩き>)のなかでも、魅力的なまち歩きコースが、小出川流域にあることを示した。さらに、構想立案に向けて、UDCC、「小出川に親しむ会」、そして、東京都立大学観光科学科岡村研究室の参加のもと、2021年1月末にオンラインワークショップを企画し、小出川に対する思いや課題の共有を図った。その後、数度の現地調査や、地形、歴史、景観などに関する調査を重ねて、情報収集を行った。



小冊子：小出川フットパス（表面）

## 小冊子（マップ）で表現したかったこと

まずは、この小冊子を手にとった人が、小出川沿いを歩きながら、ゆっくりと流れる風景を楽しみ、心が伸びやかになれるように、マップ面（中面）5つのおすすめルートや、ルート沿いの見どころを解説付きで記載した。加えて、表面では、歴史特性、流域の市民活動、河川整備の進捗状況なども紹介した。さらに、「小出川フットパス構想」を議論するきっかけとして、「何を指すのか」「何をするのか」というビジョンやアクションに相当する内容を簡潔にまとめて提示した。これらは、「川がつくる台地や自然、川が育んできた歴史や文化に触れ、人や物が交流する流域の形成を子どもから大人まで、地域に関わる様々な人たちとともに、公・民・学の連携で進める」というUDCCの基本的考えを具体化するものである。

この小冊子（マップ）は、2022年3月に発行され

たものの、惜しむらくは、同時にUDCCは法人を解散し活動を終えてしまったことである。この小冊子（マップ）をきっかけに、市民や行政の取り組みのなかに、「フットパス」への関心が高まることを期待する。



小出川フットパス



小冊子：小出川フットパス（中面）



川沿いを歩きながら、ゆっくりと流れる風景を楽しみ、心が伸びやかになる「小出川フットパス」を目指します。

川がつくる台地や自然、川が育んできた歴史や文化に触れ、人や物が交流する流域の形成を子どもから大人まで、地域に関わる様々な人たちとともに、公・民・学の連携で進めることを提案します。

2022年3月

## 何をを目指すのか？

川に沿ってゆっくり変化する風景の魅力を発信し、多くの人々と共有したい

### 大事にしたい資源



四季折々の風景



田園と山並み



歴史遺産



現代の建造物

川沿いでの自然観察、健康増進、日常散策など、多様な過ごし方を維持・発展させたい

### 歩きたくなる道・憩いの場



多様な歩き方



歩いて健康増進



親水護岸



アクティビティの拠点

農の風景や美しいみどりを守り育てるための営み・活動を活性化させたい

### 暮らし・なりわい・活動



農の風景



農の営み(直売)



観光イベント



自然環境保全活動

日本フットパス協会によれば、フットパスとは、「森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径(こみち)【Path】」のことを指します。茅ヶ崎市全体にそんな道が広がってゆくことを期待しつつ、小出川フットパスでは、流域の農業や商業などのなりわいや、自然環境保全に関わる市民活動とも連携し、流域としての新たなライフスタイルの創出につなげたいと考えています。

## 何をするのか？

多様な歩き方・過ごし方を受け入れる川沿いの道を整備する

歩きやすい道に改良する

エリア外の歩いて楽しい道とつないでロングパス(長距離フットパス)をつくる

自然や歴史とのふれあいの場・学びの場を整備する

休憩できる広場、イベントが開催できる場を整備する

地域のショップや飲食店などと連携して、地域を活性化させる

農地やそれを取り巻く周辺環境を保全する

人・物の交流の機会をつくる

川沿いの公共空間を活用したイベントを増やす

集客拠点施設と連携し、小さな経済循環を生み出す



※写真はイメージです

小出川は藤沢市の谷戸を源流に相模川河口で相模湾に注ぐ全長約12km、高低差約40mの緩やかな流れです。

## ■歴史特性

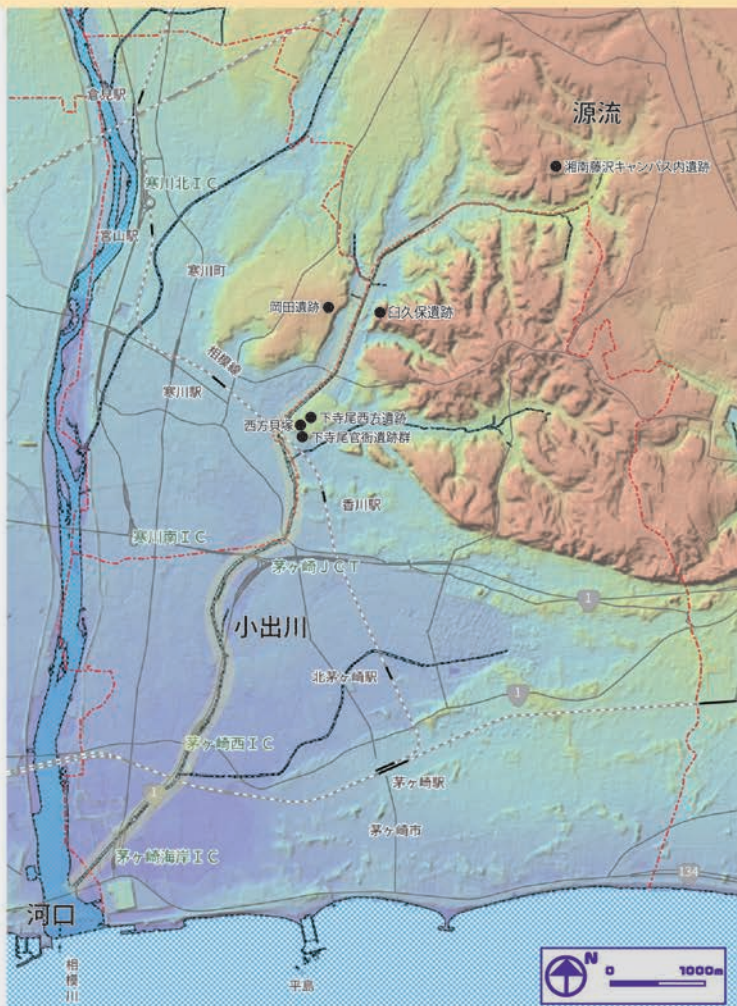
上流域は、両側の台地に多数の遺跡があります（湘南藤沢キャンパス内遺跡・臼久保遺跡・岡田遺跡・西方貝塚・下寺尾西方遺跡ほか）。旧石器時代から積み重なる遺跡もあります。農耕が始まったとされる弥生時代の大規模な環濠集落もあります。

国指定史跡「下寺尾官衙遺跡群」の西側の川沿いに、8世紀後半から9世紀前半にかけての船着き場と祭祀場が検出されています。川は交通の手段だけでなく、祈りやはらいの場でもありました。

## ■流域の市民活動

川沿いをフィールドに自然環境関連団体、地元自治会などが、多様な活動を展開しています。上流域で毎年9月に多くの方が訪れる「小出川彼岸花まつり」は、地元の彼岸花の会が土手の草刈りや手入れをしています

コロナ禍により、多くのイベントが中止を余儀なくされていますが、「小出川に親しむ会」が植樹・手入れを続けている「木の木の散策路」「花の小径」をはじめ各団体が、土手のソメイヨシノ・河津桜・紫陽花・梅などの維持管理をしています。市民に人気の散歩道です。



小出川の位置

地図出典：地理院地図vector版

## ■河川整備の進捗と散策路

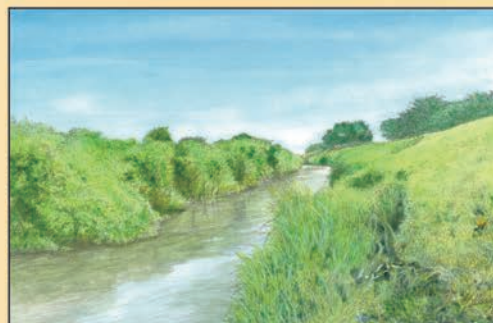
小出川では、「河川整備は多自然川づくりを基本とし、河川工事の実施にあたっては、河川に生息する多様な生物の生育、繁殖環境や、景観に配慮した整備を行う」（相模川水系小出川・千の川河川整備計画、平成27年4月、神奈川県）という方針の下、中流域・上流域で河川拡幅工事が進められています。

これらの改修工事により、生物多様性・景観が損なわれることは避けられません。しかし、何とかその影響をミニマムに抑え、防災と自然環境保全の両立を図り、市民が自然に親しめる空間の実現に英知を結集する必要があります。

土手の法面の草刈りは、刈り込み過ぎ（「過管理」）を避け、生物多様性の維持を図るために「高刈り」で行うことが望ましいと考えます。また、外来生物の繁殖の恐れとその対策も大事です。

浜園橋の架け替え工事が開始され、また追出橋・一ツ橋間の左岸には「遊水地」を設けることが計画さ

れています。ここでは、洪水対策との両立を計りつつ、多様な自然を保全し人と自然とのふれあいの場が創られることを期待します。



多自然川づくりのイメージ

出典：小出川に親しむ会30年誌

## 活動経緯

### 2018～2019年度

- ・UDCC会員による合同現地踏査(5回)
- ・UDCC会員による個別の現地調査(おもに歴史文化資源や景観資源等)

### 2020～2021年度

- ・構想提案のために、小出川に親しむ会およびUDCCで、オンラインおよび対面ワークショップを5回、勉強会を1回実施
- ・冊子「小出川フットパス構想」の編集・印刷・発行



### アーバンデザインセンター・茅ヶ崎(UDCC) 高見澤 和子

UDCCは2022年3月で解散します。「小出川フットパス構想」は、UDCCの最後の活動になります。ですが、「小出川フットパス」にとっては、最初の一步です。2018年度から現地踏査を開始し、UDCCの事業①下寺尾遺跡群「遺跡まちづくり」、②「Discover Chigasaki 景観まち歩き10選」の成果を連動させながら策定しました。自然環境の観点から「小出川に親しむ会」、観光・空間計画の観点から都立大学観光科学科岡村研究室にご協力いただきました。神奈川県、茅ヶ崎市、市民団体、流域住民などが連携して発展するプロジェクトになることを願っています。

### 小出川に親しむ会 丹沢 富雄

「小出川に親しむ会」は1987年に発足。以来30有余年、小出川とのふれあいを楽しみつつ小出川の自然が保全されることを願って活動してきました。小出川の散策を楽しむ市民が増えてきました。「小出川フットパス」は良好な散策環境と自然を次世代に伝えていく上で大切な構想です。実現に向け、多くの皆さんと一緒に取り組んでいきたいと思えます。

### 東京都立大学 岡村 祐

フットパスをよりよいものにしてゆくためには、歩くための道づくりにくわえて、周辺の環境や景観を守るための活動、にぎわいを生み出すための活動、価値を発信し人を呼び込むための活動など、総合的な取り組みが必要になってきます。分野横断、多主体連携のもとで、フットパス事業が進んでゆくことを期待します。



アーバンデザインセンター・茅ヶ崎  
Urban Design Center Chigasaki

制作・発行：NPO法人アーバンデザインセンター・茅ヶ崎(2022年3月解散)

協力：小出川に親しむ会 東京都立大学岡村研究室

発行日：2022年3月18日

udcchigasaki@gmail.com

<https://sites.google.com/view/udcc/top>



①河口・旧小出川・古相模川ルート



フトパスの発祥地・英国ではゴルフコース内をフトパスが通っているそうです。敷地内を流れる河口部分に架かる富士見橋と浜見橋、そして相模川との合流地点からの眺めは、きっと素晴らしい。

ゴルフ場  
湘南シーサイドカントリークラブ



川沿いの心地よいウォーキングが中断されずに国道1号線を横断できるといい。地下道、あるいは歩道橋(湘南ベルブリッジのようなランドマーク)の整備を提案します。

国道1号線



①河口・旧小出川・古相模川ルート

関東大地震のときに水田が旧相模川橋脚が出現しました。土地が隆起し、小出川の水が行き場を失い、古相模川に付け替えられ、柳島の土手沿いを「旧小出川」が流れました。氾濫や地震、人間の手により変化する川のダイナミズムを実感することができます。



湘南夢わくわく公園



旧相模川橋脚

小出川  
Footpath



②樹木と野鳥ルート



②樹木と野鳥ルート

田園風景が広がるなかで、富士山・大山を眺め、土手に植樹された梅や桜、シロダモ、ハギ、アジサイなどを見ながら散策します。おいしく食べて自然保護の「湘南タケリ米」生産地も訪れます。岸辺でカルガモやコサギが気持ちよさそう。バードウォッチングも楽しめます。



多自然型工法の岸辺で



植樹された土手の小径



浜園橋周辺には歩道がありません。浜園橋架け替え工事の中で歩行環境を整えてほしい。萩園橋下流域左岸に樹木が少なく、心地よい散策環境になるよう低中木の植樹を提案します。

浜園橋周辺



古老によると「昔は松がたくさん生えていた」とのこと。芝生の広場内にも、「間門川伝説 河童徳利 発祥の地」の看板のそばにもクロマツを植樹し、クロマツが印象的なひろびろになるといい。

河童徳利ひろば

⑤水田風景ルート

④里山ルート

③下寺尾遺跡ルート



③下寺尾遺跡ルート

時代が異なる国指定史跡「下寺尾西方遺跡」(弥生時代の環濠集落)と「下寺尾官衙遺跡群」(約1300年前の郡衙・寺院等)が重なる台地とその周辺を巡ります。古代の風景と現在の富士山と大山の眺め、農地の広がり、小出川の流れが重なります。



西方貝塚からの富士山の眺め



七堂伽藍跡碑(1957年建立)

④里山ルート

小出川に流れ込む支流が谷をえぐり形づくった高座丘陵に、縄文時代から集落ができました。白久保遺跡には弥生時代後期の大規模な環濠集落があります。水田風景と相模川左岸用水路、寺社、路傍の石造物などに、連続と続く人の営みを感じます。



谷戸にある集落、行谷(なめかや)



来迎寺からの眺め



### ⑤水田風景ルート

田んぼの四季の変化が楽しみ、何度でも訪れたいくなります。田植えのころ、7月下旬ごろの美しい青田、黄金色の稲穂と川沿いに咲く彼岸花、稲刈り、積みわらが並ぶ春を待つ田んぼ。晴れば大山や富士山が望める日本の原風景です。上流から下流に向かって歩くのがお勧めです。



積みわらが並ぶ田んぼ



黄金色の稲穂と彼岸花



N



500m

地図出典：国土地理院基盤地図情報

## 歩いて発見 モノはちルートウォーキング

多摩都市モノレール八王子ルート整備促進協議会事務局および八王子市都市計画部交通企画課から東京都立大学岡村研究室への委託プロジェクト

### マップ制作の背景

多摩都市モノレールは、現在多摩センターから上北台までの16キロメートルが開業しているが、箱根ヶ崎ルート、町田ルート、八王子ルートとの3方面での延伸が構想されている。本マップは、八王子ルート（モノはちルート）構想の普及のためのウォーキングイベント時に使用されるもので、マップの制作を、多摩都市モノレール八王子ルート整備促進協議会事務局および八王子市都市計画部交通企画課が、大学コンソーシアム八王子加盟大学の学生向けに公募し、選考の結果、東京都立大学岡村研究室が受託したものである。

### マップの構成

今回、モノレールのルート沿線の魅力を伝えるというミッションのなかで、多摩都市モノレール八王子ルート整備促進協議会からの委託という性質上、とくに当協議会の構成員のニーズに配慮しつつ、地域の本質的価値を伝えられるように、マップのコン

テンツを検討した。制作・発行したマップは、B3サイズ2枚から構成される。

1枚目は両面であり、表面には多摩都市モノレール八王子ルートの概要やマップ面（中面）に示す店舗情報が記載されている。マップ面（中面）には、イベント当日のウォーキングルートとモノレールの構想ルート、そして各種地域資源を示した。八王子商工会議所や八王子商店会連合会が推薦した店舗をマップ上に載せている。また、本マップの制作依頼が大学コンソーシアム八王子を通じて行われたこともあり、沿線の大学紹介にも力を入れた。これは、同時に将来的にモノレールの重要な利用者となる大学の位置や規模を把握しておくことにも繋がる。

こままでが、研究室としての受託内容であったが、さらにエクストラで1枚の地図を制作し、地域の歴史的な文脈や地形条件を踏まえたポテンシャルを表現することに心を砕いた。当該地が、主に住宅地や大学用地として開発された経緯を表現するために、開発前の状態を示す1970年代の航空写真をベース図として採用し、その上に大学の位置を示した。



モノはちルートウォーキング（表面）



モノはちルートウォーキング（中面）

また、多摩丘陵の起伏のある地形の上に成り立っていることや、区画整理などの大規模な市街地開発によってまちが形成されてきたことを理解できるような「眺望スポット」を、現地調査により確認しプロットした。

### ウォーキングイベント当日の様子

当日は地図の作成に携わった学生がイベントの受付に立ち、参加者に向けてルートの説明や地図の見方・見どころを説明した。イベント開始の9時を迎えると、続々とイベントを心待ちにしていた人が八王子駅に集まった。通りすがりの人もマップを手にとって八王子の歴史について関心を示した。また、八王子市にモノレールが延伸することで、生活にどんな利点があるのか、町がどのように変わるのか想像する人も中にはいた。南大沢まで完歩した参加者からは、「研究室の皆様が制作された読み物が非常に興味深かった」などの声も多数いただいた。



ウォーキングイベントの当日の様子



ながめて発見！モノはちの歴史

# あるいて発見 モノはちルート ウォーキング



**4km** お手軽コース  
約1時間  
200kcal

**11km** 健脚コース  
約3時間  
550kcal


八王子駅～南大沢駅編

多摩都市モノレール八王子ルート整備促進協議会  
(八王子市都市計画部交通企画課)

## 八王子ルートが実現すると…

**Y 地域の連携により、ますます発展する八王子へ**

八王子駅周辺の中心拠点と、その他の駅周辺の地域拠点を結び、人・モノ・情報の交流を活発化。



**Y 働く場所を増やし、もっと豊かな八王子へ**

多くの業務用用地が存在するニュータウンにおいて、企業の持続的な活動支援や新たな企業の誘致に貢献。

多摩ニュータウン地区

➤ 南大沢駅周辺に多くの業務系施設が立地

八王子ニュータウン地区

➤ 地区全体で多くの業務系施設が立地

**Y 高齢者をはじめとした市民の利便性が向上**

日々の生活において利便性が向上するとともに、子育て世代や高齢者の外出を促すきっかけに。

**Y 学生も便利に**

大学等へのアクセス向上は、教育研究機能のさらなる充実や優秀な人材の確保、都心回帰の傾向がみられる大学等の地域へのつなぎ止めにも資する。

## 八王子ルートについてQ&A

**Q1.モノはちルートってなに？**

**A1. 多摩モノレール八王子ルートのことだよ。**

**Q2. 八王子ルートはどこにできるの？**



● 京葉線  
● 多摩モノレール  
● 京王線  
● 東横線  
● 相模線  
● 横濱線  
● 京葉線  
● 多摩モノレール  
● 京王線  
● 東横線  
● 相模線  
● 横濱線  
● 京葉線  
● 多摩モノレール  
● 京王線  
● 東横線  
● 相模線  
● 横濱線

**A2. 多摩センター駅から、JR八王子駅へ至る全長約17キロメートルの路線だよ。**


## 多摩都市モノレール 八王子ルート整備促進協議会

協議会では、八王子ルートの実現に向けて、啓発グッズの配布、イベントの開催など様々な活動を実施しています。

八王子ルートPR動画

おすすめ！八王子モノレール出発進行！

右記のコードから、ぜひご覧ください



==== 協議会委員 ====

八王子市長

八王子商工会議所会頭

大学コンソーシアム八王子会長

八王子市町会自治会連合会会長

八王子市商店会連合会会長

公益社団法人八王子観光コンベンション協会会長

制作: 東京都立大学 都市環境学部 観光科学科 岡村研究室  
 発行: 多摩都市モノレール八王子ルート整備促進協議会  
 発行日: 2023年11月

# 沿線おすすめ店舗

<p>① <b>小太郎</b> 4種のモツの煮込みが名物 元気が出る焼き鳥屋</p> 	<p>② <b>LAMP COFFEE</b> スペシャルティコーヒーと自家製 デザートでホッとな時間を</p> 	<p>③ <b>キッチンロッコ</b> ほろほろのロッコチキンや はちナボは リピート率高し!</p>  <p>「八王子お店大賞」 受賞店</p>	<p>④ <b>JUNK'y Guild</b> 子安最古のバーガー酒場! 実は八王子全体でもレア</p> 
<p>⑤ <b>家庭料理 和香葉</b> 懐かしいおふくろの味とおいしい お酒で癒されます</p> 	<p>⑥ <b>焼肉山雅</b> A4ランク以上のお肉は特別! 肉汁はもちろん格別♪</p> 	<p>⑦ <b>パール・ノエル みなみ野店</b> シュークリームやマドレーヌ、地産 地消の焼菓子が人気の洋菓子店</p>  <p>「八王子お店大賞」 受賞店</p>	<p>⑧ <b>ヴェールの丘</b> ケーキ、焼菓子、パンなど100種 以上の商品を販売しております</p>  <p>「八王子お店大賞」 受賞店</p>
<p>⑨ <b>けいの家 八王子みなみ野店</b> 地元産の食材と全国の厳選食材が 自慢の飲食店</p>  <p>「八王子お店大賞」 受賞店</p>	<p>⑩ <b>めし処 峠茶屋</b> 手作りの味 めし処 峠茶屋</p> 	<p>⑪ <b>Royal Garden Palace 八王子日本閣</b> 「美味しいと自然に笑顔になる」 そんな贅沢な時間を演出します</p> 	<p>⑫ <b>きっちなかやま</b> 創業43年の老舗洋食店 煮込みハンバーグが人気</p>  <p>「八王子お店大賞」 受賞店</p>
<p>⑬ <b>SEVEN'S ROOM</b> 一推しの手作り餃子、 といえば一緒にビールが最強!?</p>	<p>⑭ <b>メガロス八王子</b> スポーツジムで 身体に良いこと始めよう</p>	<p>⑮ <b>ヘアースタジオ風</b> この地で35年美容院を営んでます</p>	<p>⑯ <b>八王子駅前 リーフ歯科</b> 大人の方からお子さんまで 笑顔で通える医院を目指して</p>
<p>⑰ <b>本格的豚骨ラーメン 炒家チャアヤ</b> スープ1杯になんと 700gの豚骨を使用!</p>	<p>⑱ <b>居酒屋 紫</b> 大将の歌声が!笑い声が!イイ、 万能な飲み屋さん</p>	<p>⑲ <b>ヘアー アルボル</b> 朝一から髪をリフレッシュして、 お出かけもできちゃう!</p>	<p>⑳ <b>八王子子ども劇場 Joycco</b> 子どもたちの主体性を重んじ心豊かに 成長していくことを願って</p>
<p>㉑ <b>いち川食堂</b> 子安町の老舗食堂! 昭和な食堂で 大満足の定食はいかが?</p>	<p>㉒ <b>片山名倉堂 放課後等デイサービス</b> スムーズな社会生活を送るための 療育を</p>	<p>㉓ <b>kotohari</b> 幅広い年齢層のお客様がいらっしゃる ゆったりした雰囲気のヘアサロン です</p>	<p>㉔ <b>ギャラリー四季</b> 四季折々の衣服~小物まで 取り揃えています</p>
<p>㉕ <b>Homebar syu</b> リーズナブルな値段で飲める店です</p>	<p>㉖ <b>らーめんいち</b> やさしい醤油ラーメンに角煮をドン と載せて</p>	<p>㉗ <b>陽気に唄える店 みさ子</b> だし巻き卵が大人気</p>	<p>㉘ <b>あばんてい</b> 名物!?親子が楽しい、 美味しいダイニングバー</p>
<p>㉙ <b>TWIST</b> セッションできる、生演奏がきける、 音楽に触れられるミュージックバー</p>	<p>㉚ <b>Wnomama</b> 女性お一人様でも、安心して飲んで 歌って楽しんで♪</p>	<p>㉛ <b>七福</b> 中華天心オリエンタル料理居酒屋</p>	<p>㉜ <b>BAR世界</b> 何人来てても一組 そんなにぎやかなBARです!</p>
<p>㉝ <b>BAR Bucchi</b> モータースポーツ観戦ができる カウンターバー</p>	<p>㉞ <b>TRICKY</b> 楽しいシカケをつくるデザイン会社</p>	<p>㉟ <b>G&amp;B みづき</b> シフォンケーキ、パン、惣菜、焼き菓子 など家の軒先で販売している小さな お店です</p>	<p>㊱ <b>とんかつ大國</b> とんかつ専門店です</p>
<p>㊲ <b>ばんぷう</b> ふわふわお好み焼きのばんぷうです</p>	<p>㊳ <b>ひさごや</b> 昔ながらの和菓子屋ひさごやです</p>	<p>㊴ <b>Yottette</b> 駄菓子屋です 子どももおとなも「よってっ〜!」</p>	<p>㊵ <b>フジオカ理髪店</b> 大人の趣味の店 子供~大人までくつろげる床屋です</p>

※営業時間等は店舗ホームページ等でお確かめください。





### ご参加されるみなさまへ

- ・体調がすぐれないときの無理な参加はご遠慮ください
- ・ウォーキングに適した、歩きやすい服装でご参加ください
- ・ウォーキング中のケガ、事故などの責任は一切負いません
- ・交通ルールや歩行マナーを守って楽しく歩きましょう
- ・私有地への立ち入りなど、近隣の方への迷惑行為はやめましょう
- ・水分の補給はこまめにしっかり行いましょう
- ・ヘッドフォン・イヤホン装着しての歩行や、ながらスマホはやめましょう
- ・本ウォーキングルートはあくまで推奨です

# あるいて発見 モノはちルート ウォーキング

## 八王子駅前ルート

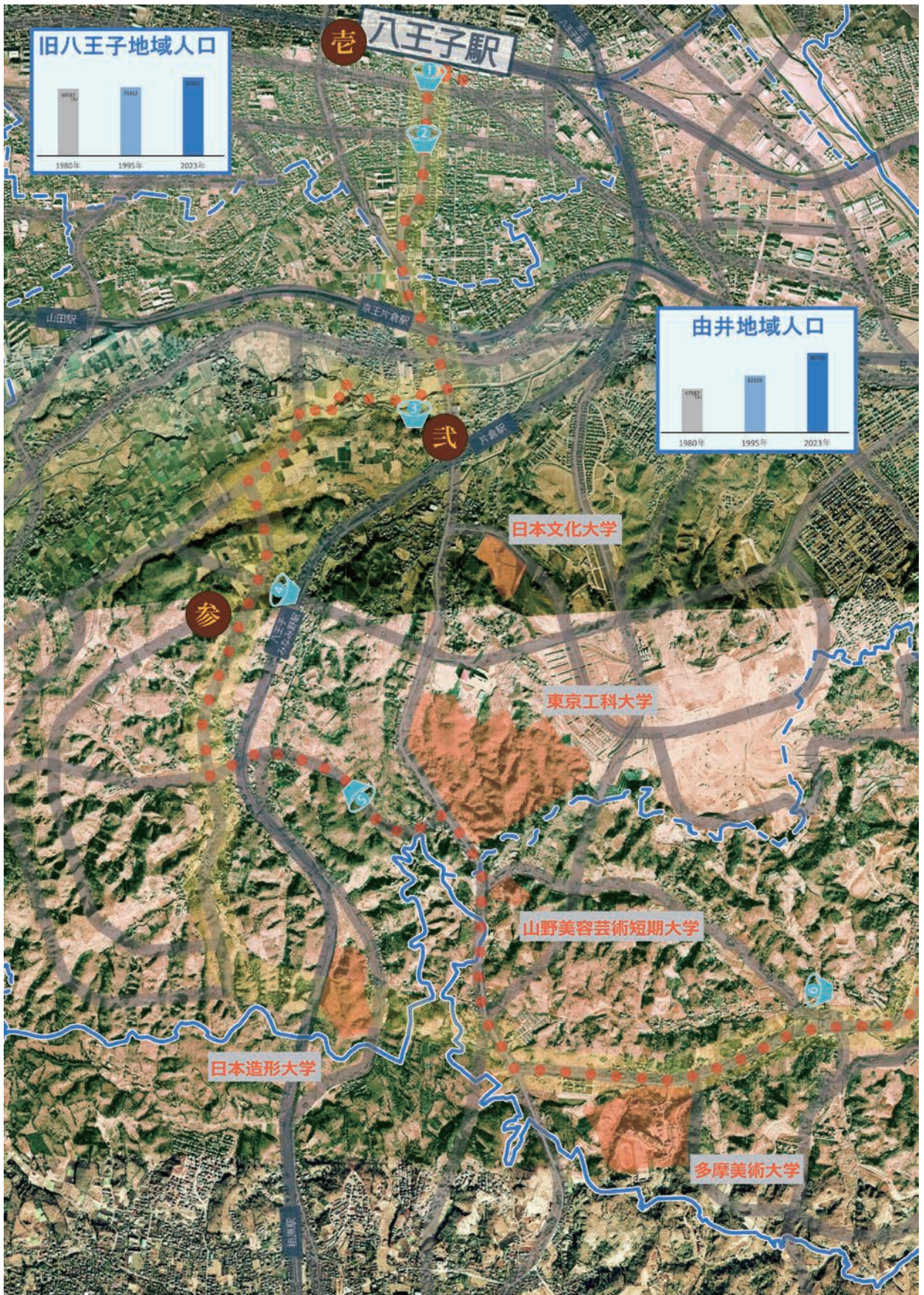


## 南大沢歩道ルート



- 日本文化大学**  
 卒業生の約半数が公務員採用試験に合格。日本屈指の設備を備えたトレーニングルーム「B'GYM」がある。
- 東京造形大学**  
 デザインと美術を「造形」という広い観点から総合的に捉える。附属美術館・ギャラリーにて学生等の作品を一般公開している。
- 東京工科大学**  
 理系文系にとらわれない幅広い学問領域を擁する大学。片柳研究所様では産官学連携研究を推進中。
- 山野美容芸術短期大学**  
 日本初の美容が学べる高等教育機関(大学教育)。正門横のコースガーデンは5月が見ごろである。
- 多摩美術大学**  
 ゼロからイチの価値を生む「創造的な力」をもつ人材を育成。世界的に活躍する建築家 伊東豊雄氏設計の図書館がある。
- 東京都立大学**  
 「学問の力で、東京から世界の未来を拓く」をキーワードに人材を育成。東京ドーム約9個分のキャンパスの緑地率は57.6%である。





都市近郊における散策路事業の成立構造・計画思潮の変遷と縮退時代における活用可能性

---

編集 岡村 祐 東京都立大学都市環境学部観光科学科  
東京都八王子市南大沢 1-1  
okamura@tmu.ac.jp

片桐由希子 金沢工業大学工学部環境土木工学科  
石川県野々市市扇ヶ丘 7-1  
yukiko.ktgr@neptune.kanazawa-it.ac.jp

発行日 2024年3月11日

本報告書は、科学研究費助成事業基盤研究（C）18K11844「都市近郊における散策路事業の成立構造・計画思潮の変遷と縮退時代における活用可能性」の研究成果をまとめたものである。

---



